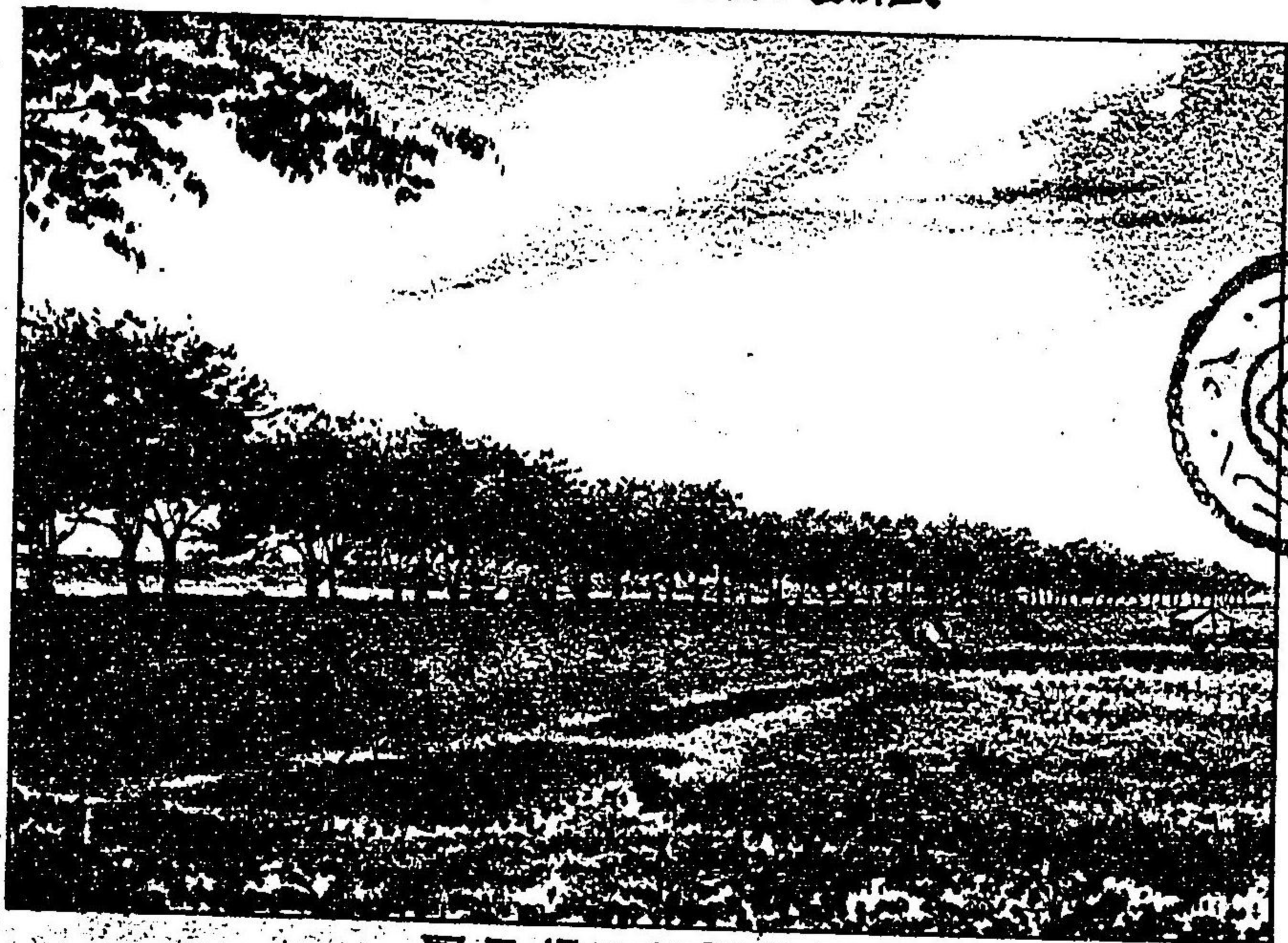
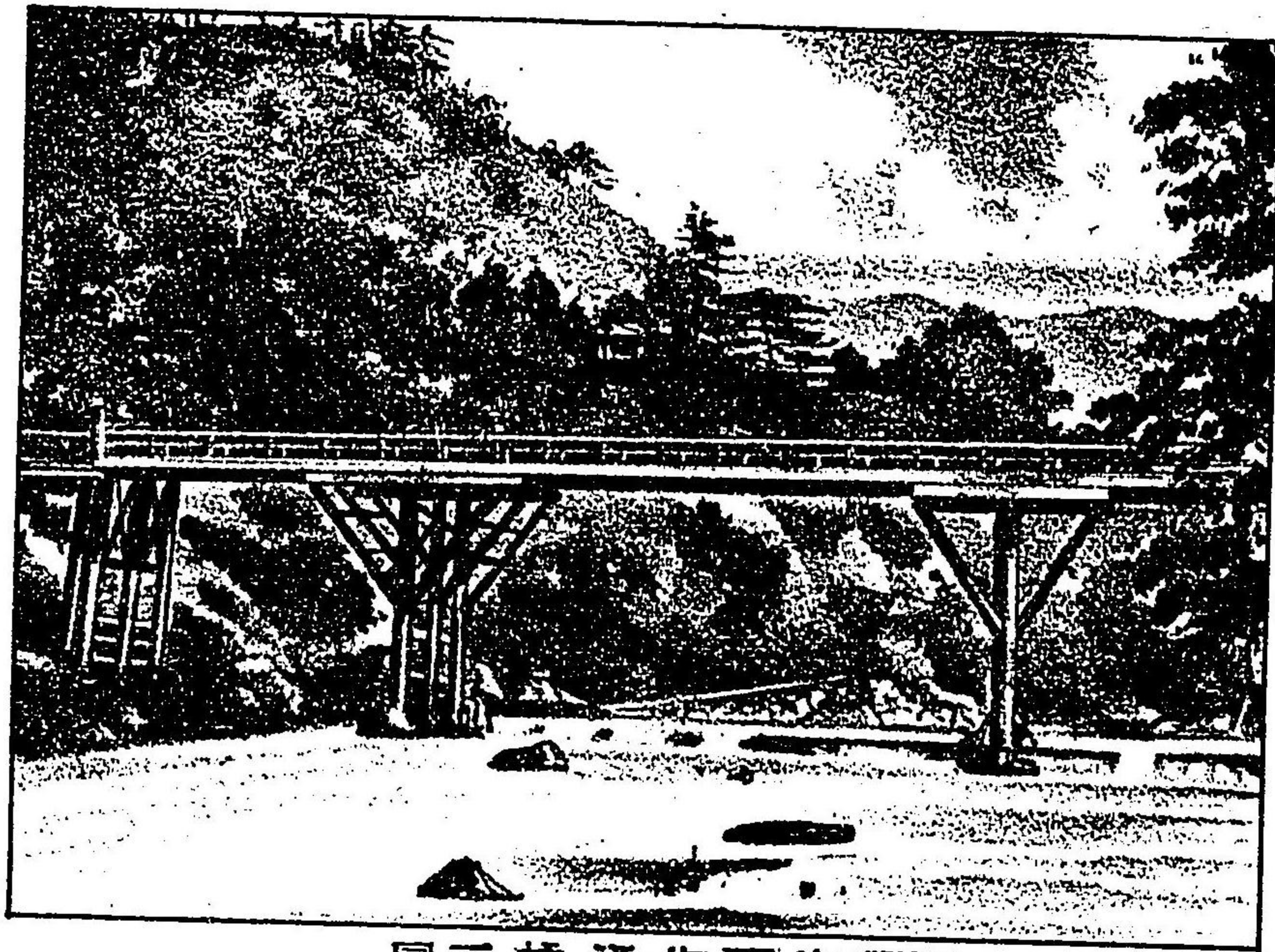


武大宮米川公園之景

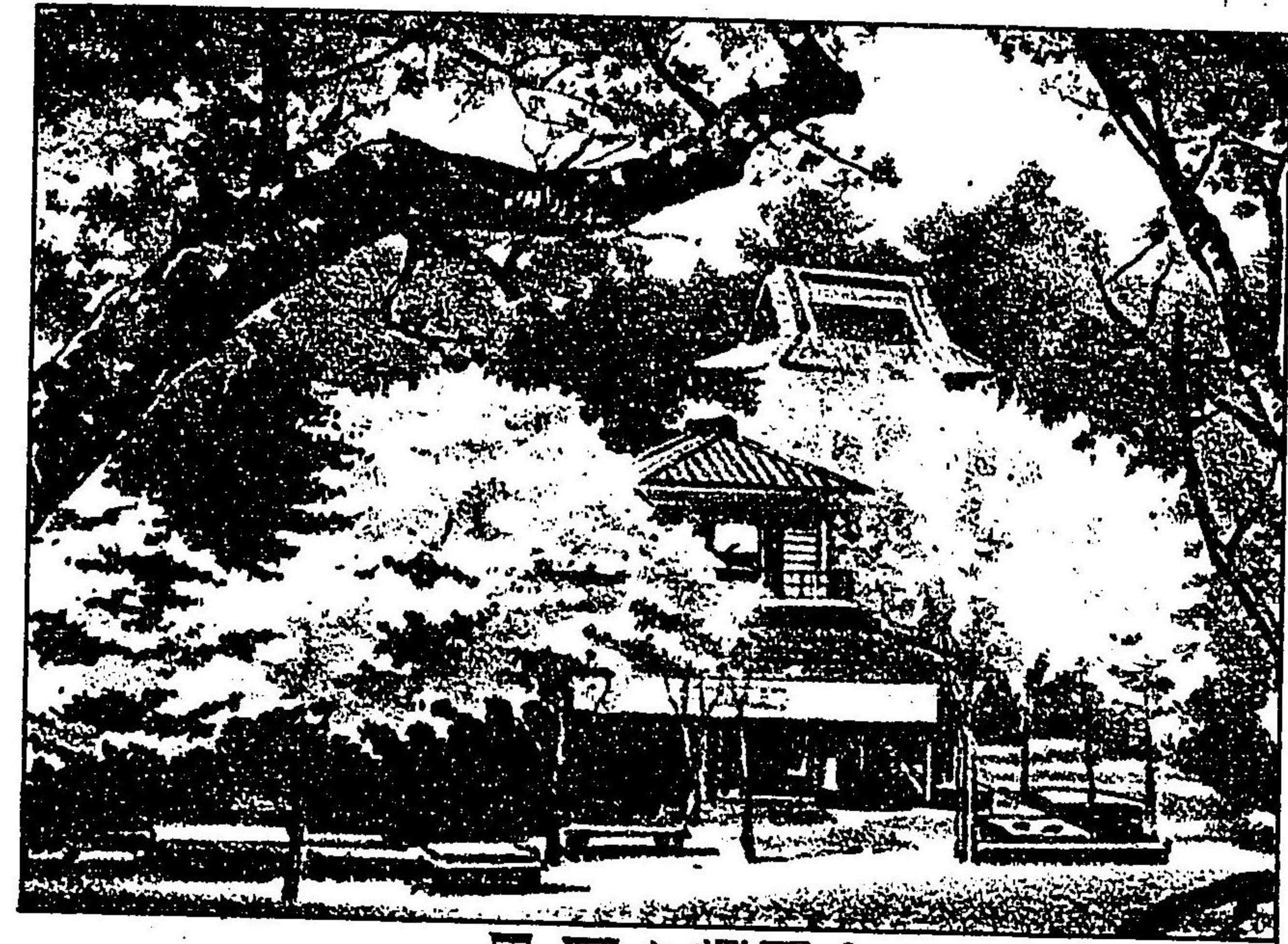


武大熊谷町堤之景





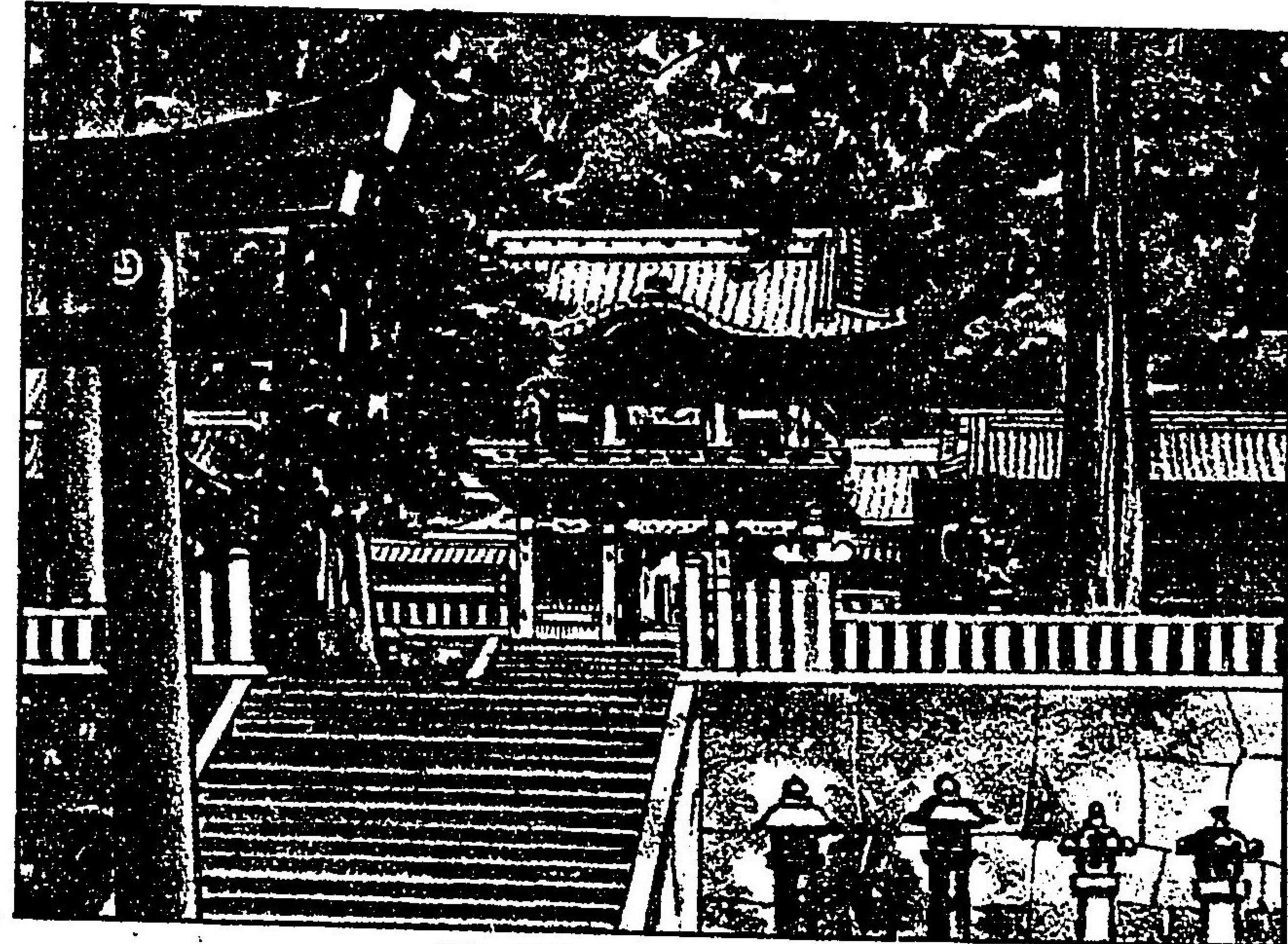
野州塩原湊橋之景



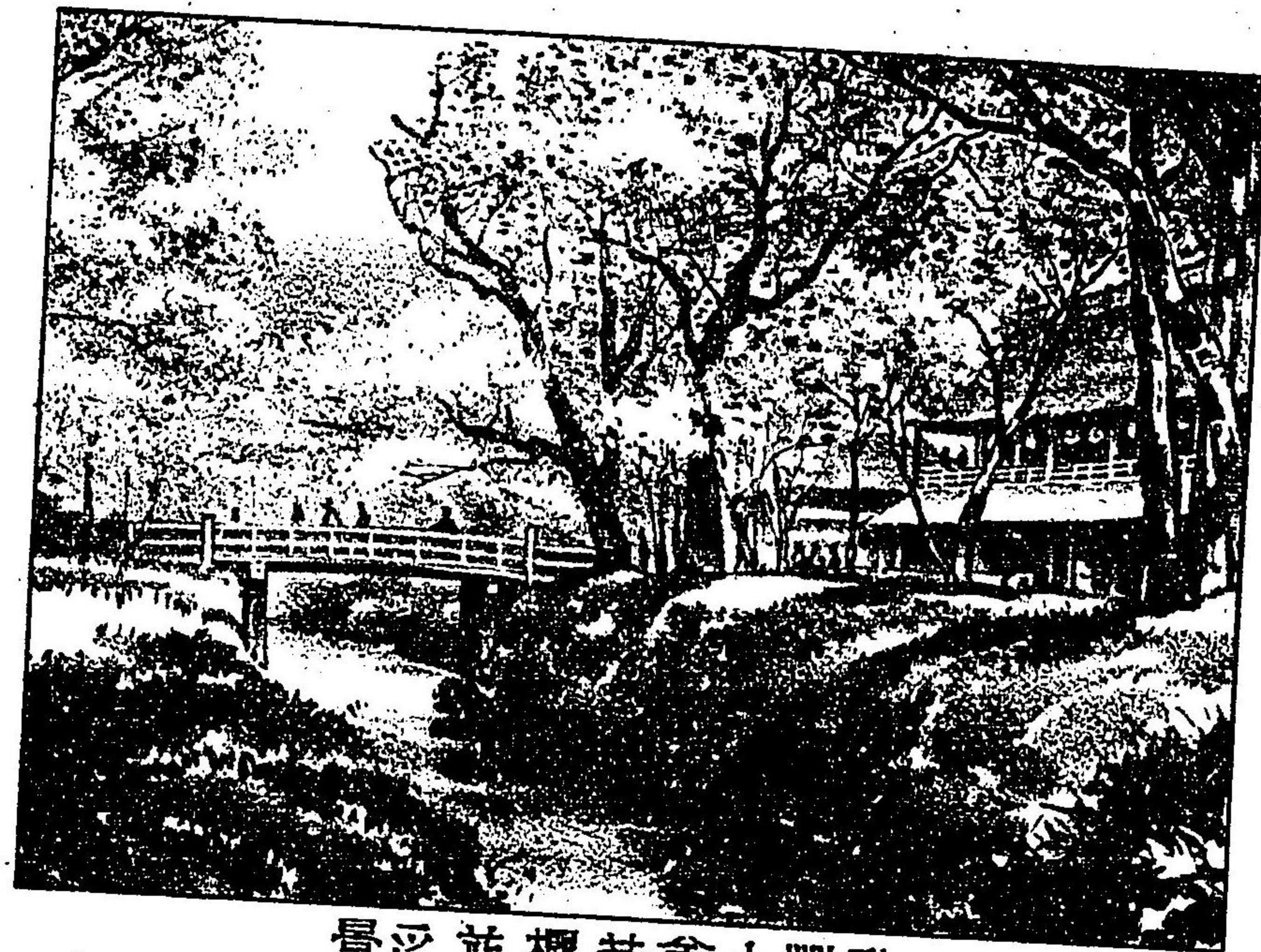
上野櫻个之景



福島飯阪温泉十綱橋之景



日光陽明門之景



武州小金井櫻花景



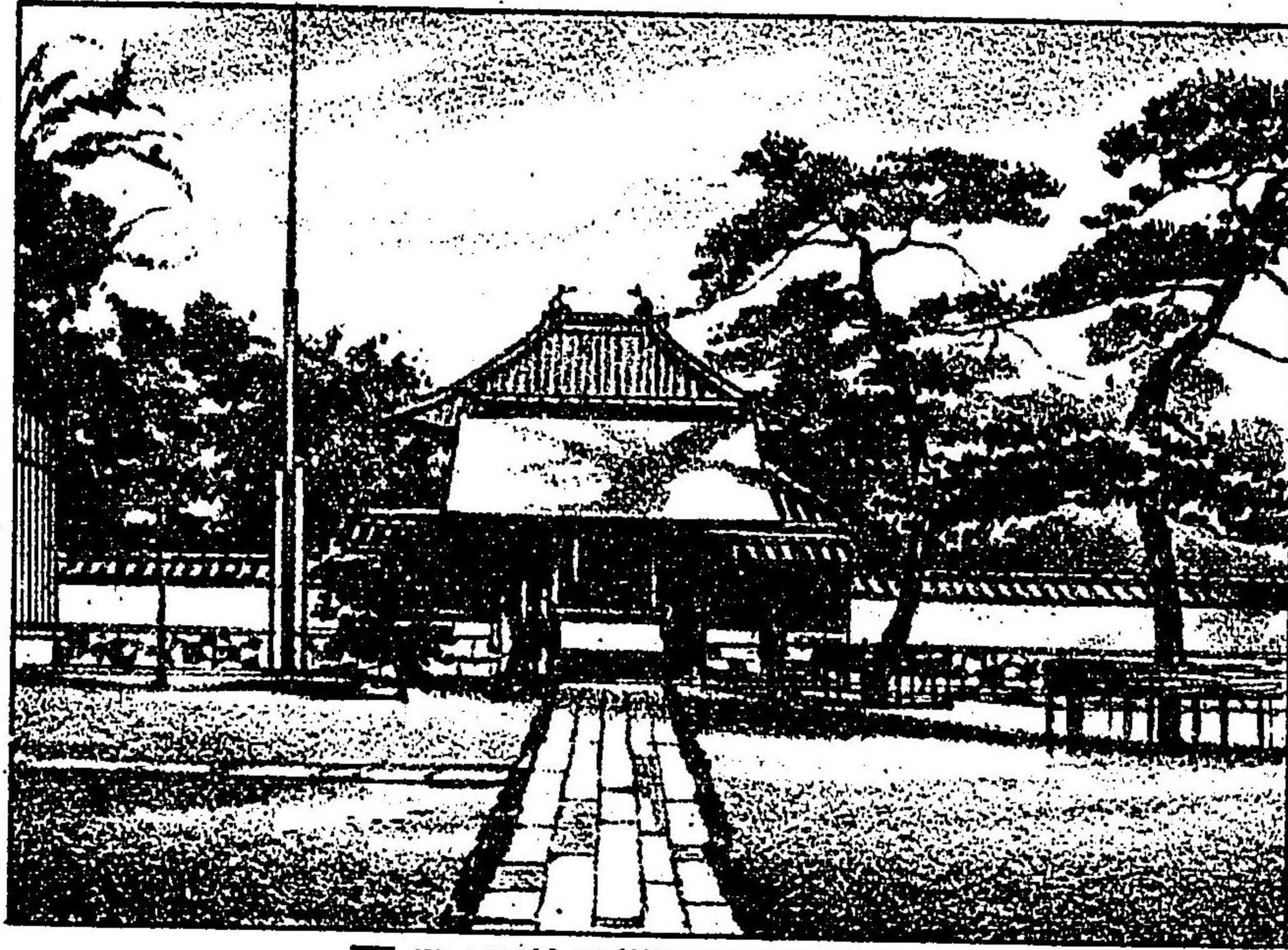
弘前大圓寺景



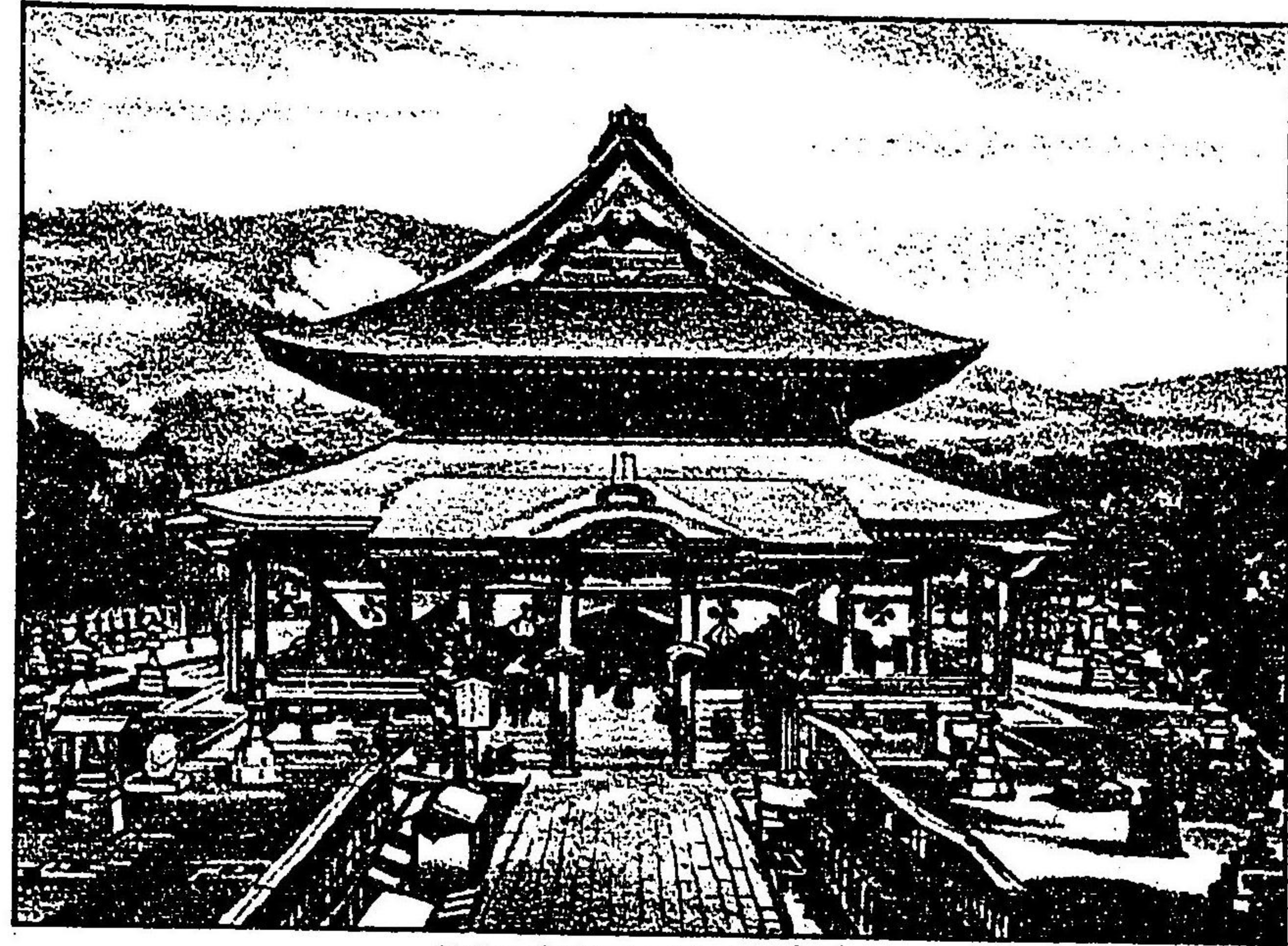
上野原温泉泉場景



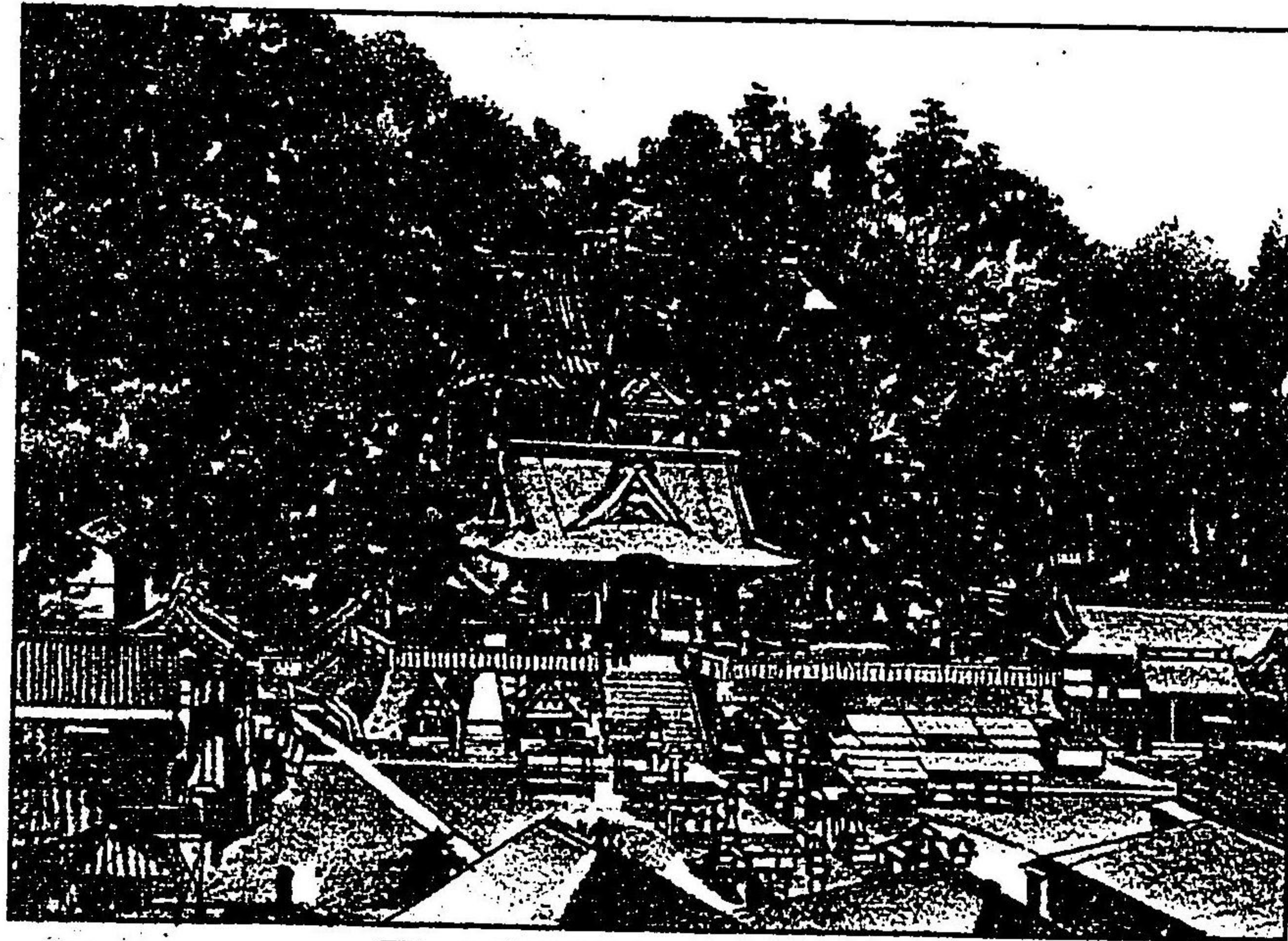
奈良園景



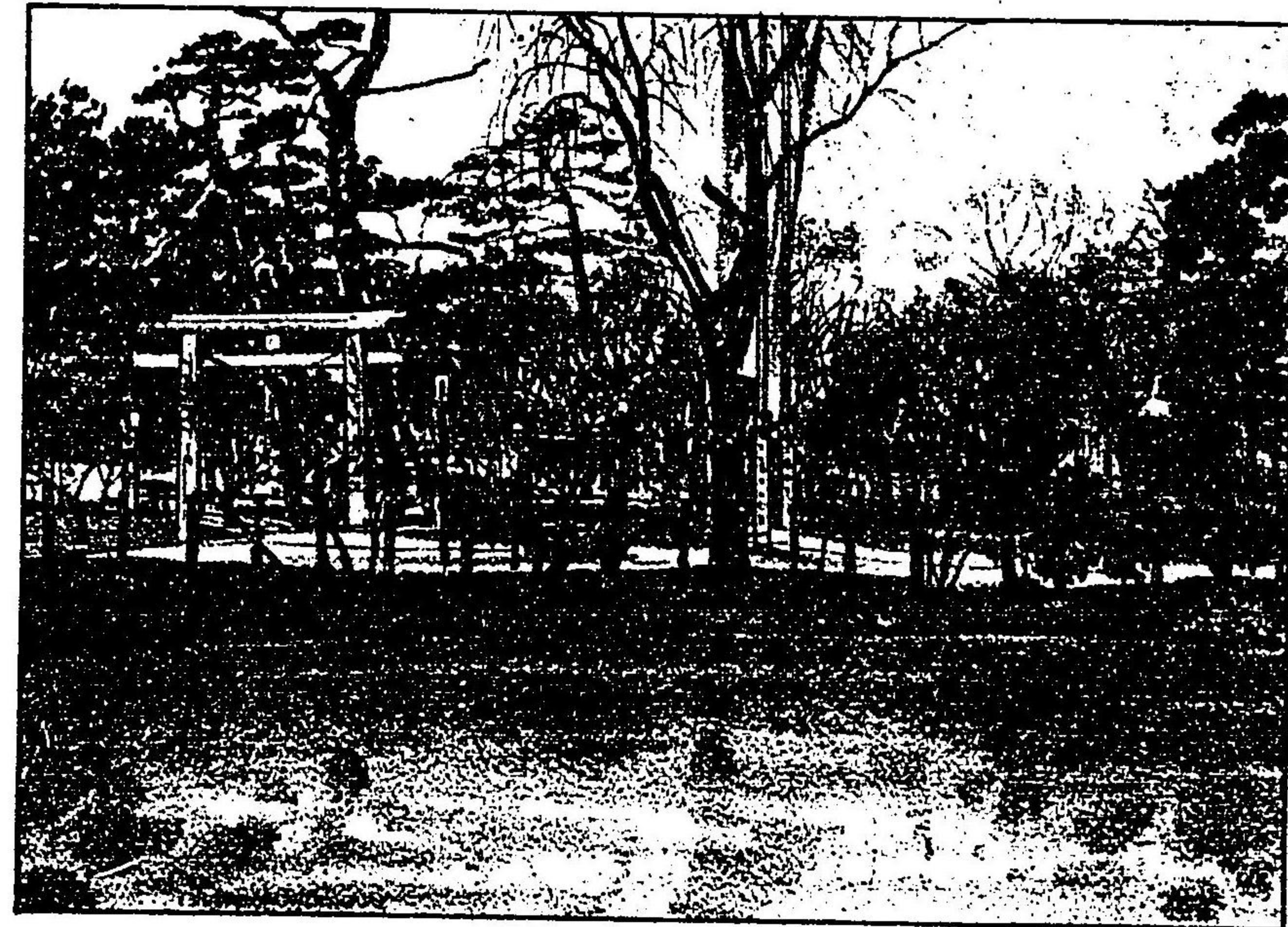
野州利學校前之景



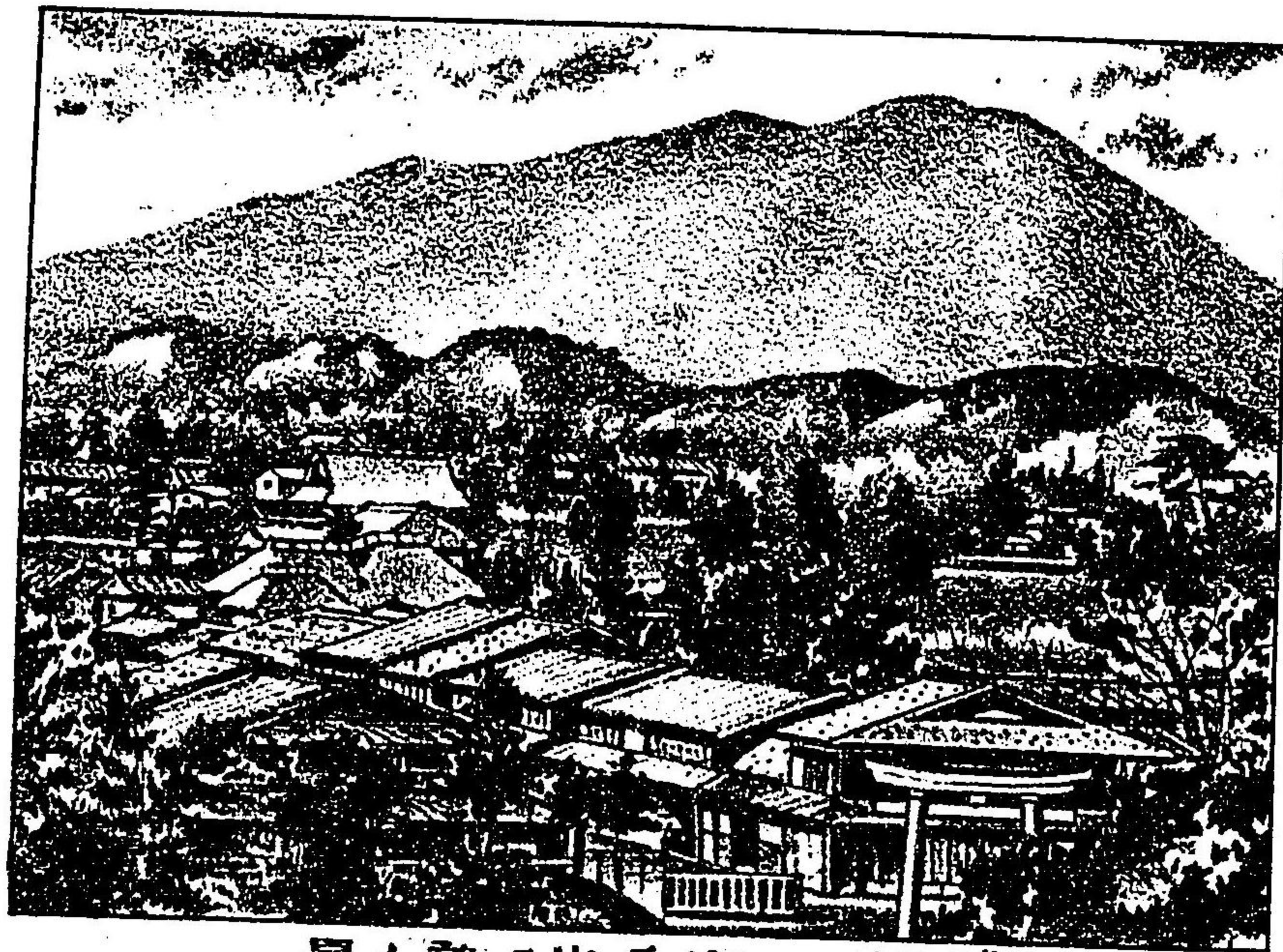
信所善光寺之景



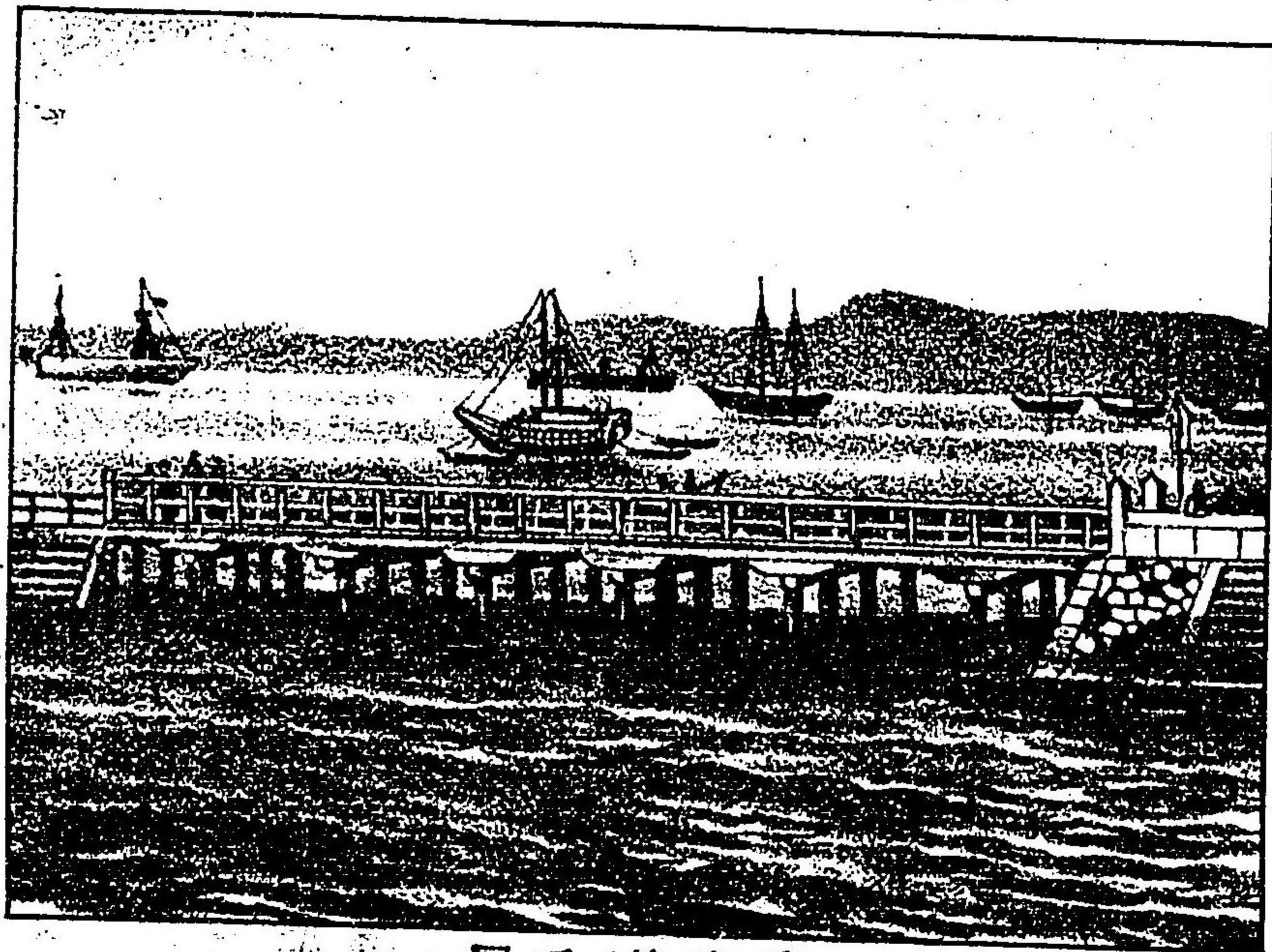
下総成田山新勝寺之景



新瀨白山社之景



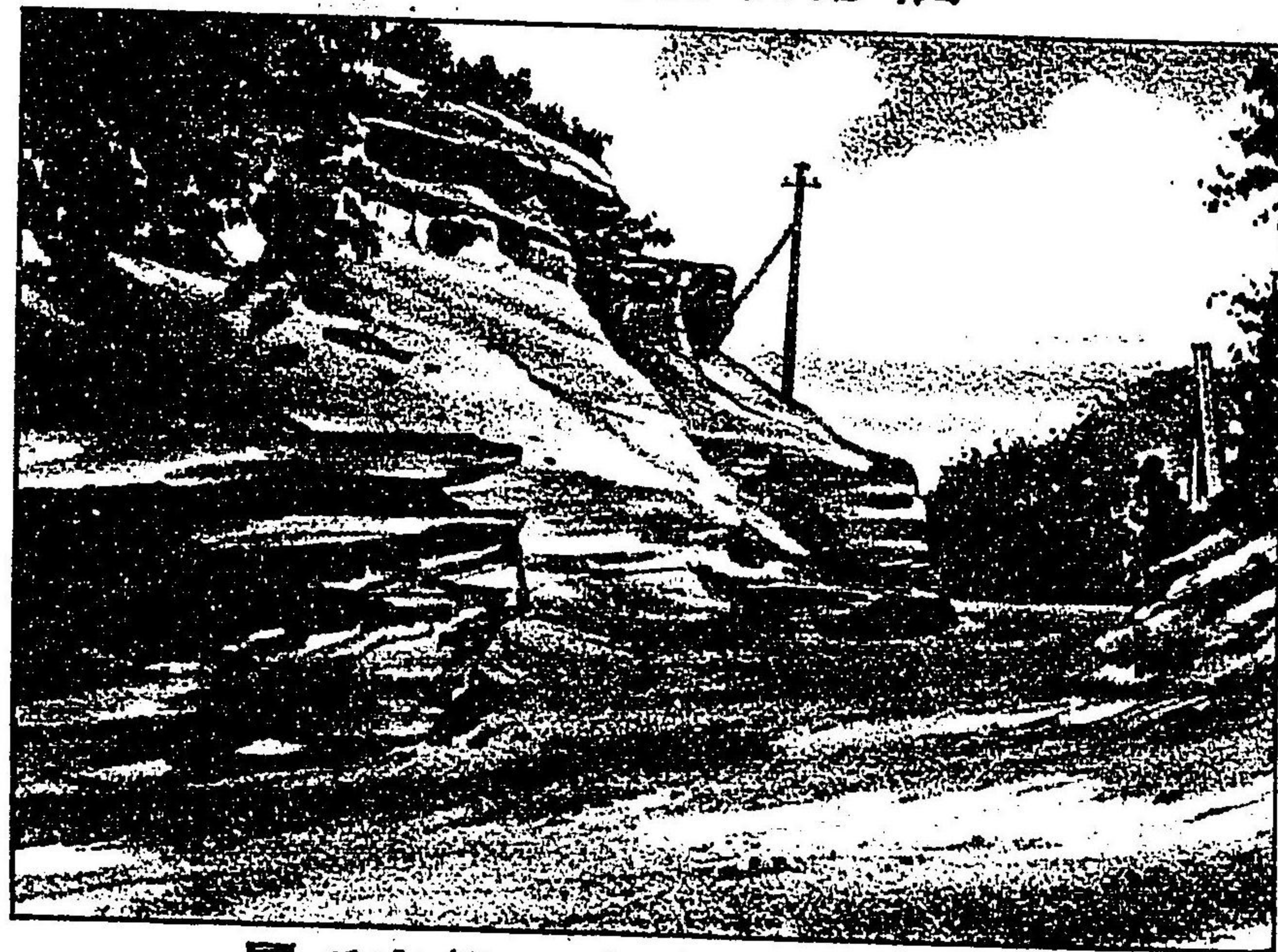
景△望ヲ山手岩リヨ岡嶽



景△港森青



景△堂大五島松前陸

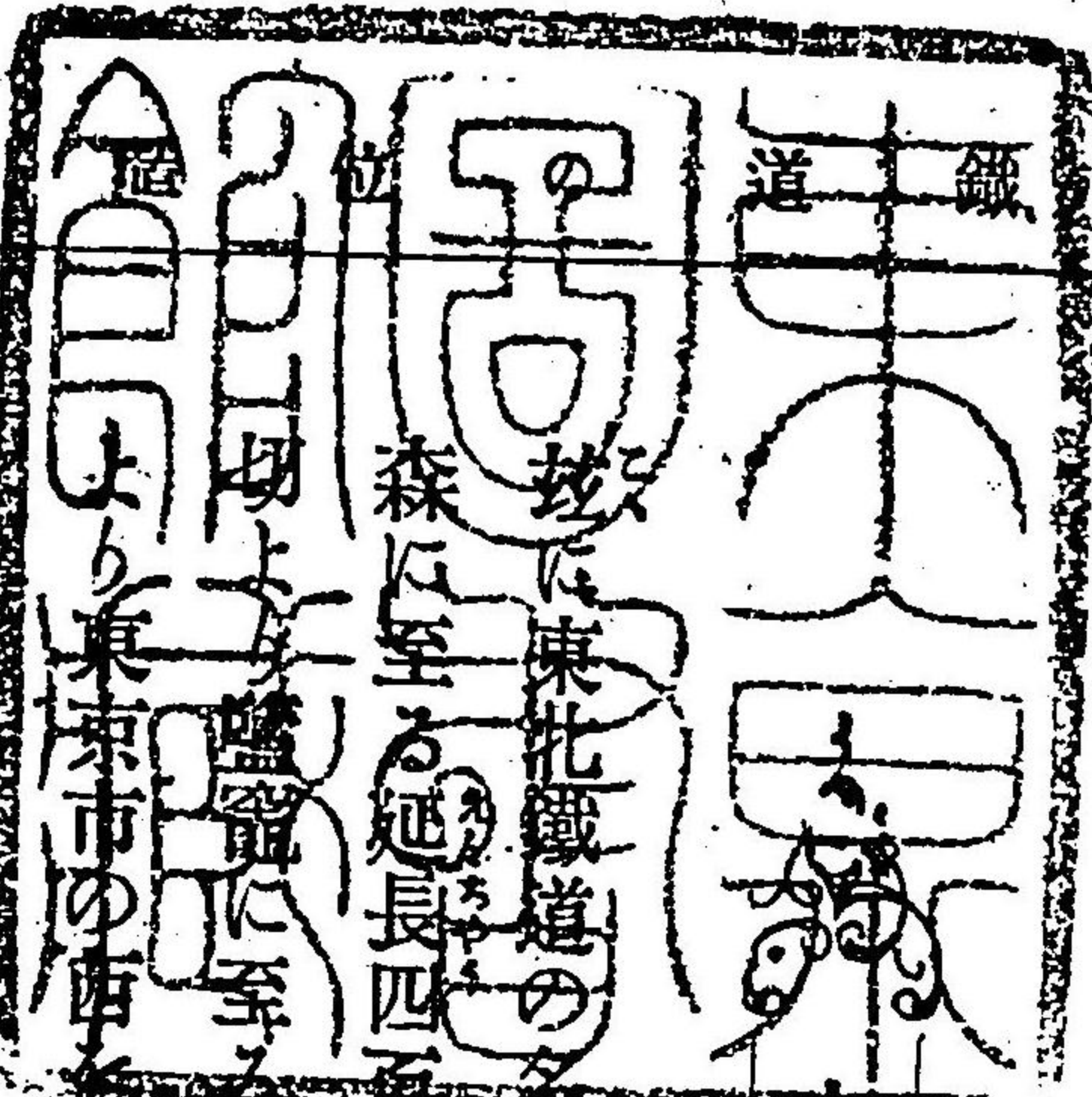


景△山松ノ末嶺打波船陸

全國鐵道名所案内(下編)

東京野崎左文
同 大久保夢遊 合著

東北鐵道



茲に東北鐵道の名を負はしたるは日本鐵道會社の東京上野より陸奥青森に至る延長四百五十四哩餘の幹線、宇都宮より日光に至る支線、岩手切上り支線に至る支線(水戸支線は別に標題を掲げて記載す)並に品川より東京市の南を迂回し赤羽にて本線に聯絡する接續線等を總稱するものにして全線路中停車場の數九十九ヶ所(水戸支線を除く)右幹線の内通し切符を以て旅客の隨意に下車し得べき停車場は赤羽、大宮、小山、宇都宮、黒磯、白河、郡山、福島、仙臺、岩切、一ノ關、盛岡、尻内、青森の十

四ヶ所とす又各鐵道の下等乗車賃金は概ね一哩一錢の割合なれども日本鐵道會社の改正乗車賃は下等百哩迄は一哩に付凡そ一錢二厘、百一哩以上二百二十哩迄は凡そ一錢、二百廿一哩以上は凡そ八厘の割合に中等は下等の五割増、上等は下等二倍半の定めなるを以て長里程を旅行する者及び中等上等の旅客に取りては著るしく其の賃金を輕減し得る事となれり、偕旅客は新橋、上野の兩停車場より乗車する者を見做し先づ新橋より赤羽に至る案内を掲げ次に上野より始の順次幹線の道走るべを爲す左の如し

●新橋停車場 (東京市芝區汐留町)

東海鐵道の起點にして日本第一の繁忙停車場なり(新橋の記は既に上編東海鐵道の部に掲げ置たれば茲に再録せず)赤羽行の列車は日々四回此の停車場より發し赤羽にて上野發青森行又は高崎行の列車と接續す而して新橋赤羽間の下等賃金は十九錢なれども大宮驛以北に赴く旅客に對し

ては其の賃金上野より發するものに下等四錢を増す

●品川停車場 (東京市芝區高輪南町字谷山下)

東海鐵道第二の停車場にして日本鐵道會社支線の分岐點なり、支線は品川硝子製造所の背後を過ぎ直ちに一大屈曲を爲し西して居木橋、大崎二村を經、永峯往還の下に長さ百十二呎の隧道を貫き茲を過ぎて自から列車の停まる所即ち目黒停車場なり、品川近傍の名所は上編東海鐵道の部に詳らかなれば重復を厭ひて茲に掲録せず

●目黒停車場 (東京府武藏國荏原郡大崎村字上大崎)

目黒停車場は白金臺町より行人阪に至る途中永峯町の北傍に在りて停車場は道路水平線の下十數尺の階段を降りたる處に之を設く、目黒村は停車場の西に方り上、中、下及び三田の四小村に分れ戸數六百八十餘戸、人口三千五百八十人、村内に竹林多く筍子を以て名産とす

目黒不動 は停車場の西凡そ十町字中目黒村に在り其途中の峻嶒を行

人阪と云ひ左傍に明王院あり古へは此阪の東傍を夕日ヶ岡と稱へ楓樹數十株枝を交へ晚秋霜深き頃は夕陽其葉に映じて紅を漲らし頗る奇觀なりしと云ふ、阪を下りて太鼓橋を渡り行くと四五町にして家續きの處に出で蛸薬師堂の前より西折すれば即ち不動堂の門前に到る、不動堂は瀧泉寺と號し天台宗にして東叡山に屬す、門を入れれば正面に樓門あり二王を安置し後水尾帝宸筆泰叡山三字の額を掲げ左に垢離場ありて獨鈷の瀧は龍の口より迸しり出で、炎天早魃の時と雖も涸るゝとなし樓門を入りて石階を躡れば本堂に達し本尊は慈覺大師作の不動明王にして脇士は八大童子なり、堂後に大日堂、鬼子母神、開山堂等あり賽人常に蟻集するが中に一、五、九の三ヶ月に於る廿七八兩日は殊に賑へり又門前數町の間には茶店酒樓軒を並べ橋和屋、内田、角伊勢等其名高く橋和屋の牡丹花の如き都下名勝の一に算へらる、其西三町ばかりにして平井權八小紫の比翼塚あり茶亭角伊勢屋にては其の墓地を預り望みに應じて客を案内す

祐天寺 目黒停車場より西の方二十餘町、同く不動裏門より西北十二三町の處に在り享保年間二世祐海和尚祐天僧正遺跡の地を下して草創し則ち祐天僧正を以て開祖とす總門を入れれば二王門あり持國廣目の二王を安置し祐海筆明顯山三字の額を掲ぐ門を入れれば右に鯨鐘あり左に阿彌陀堂、經藏あり其の正面に巍然として屹立するものは本堂にして開山八十八歳の影像及び臨終の眞影を安す又經藏の後に開山の廟あり、開山祐天僧正(顯譽上人)が寛文年間下總岡田郡羽生村與右衛門の女房累の怨靈を法力に依りて解脱せしめし事普く世の口碑に傳はり當時僧正の用ひたる法衣其他の遺品を藏し毎年八月十一日庶人の縦覽を許す

●澁谷停車場 (東京府武藏國南豐島郡中澁谷村)

澁谷村は東京市青山北町の町續にして西南世田ヶ谷、二子等を経て相州厚木に至る縣道あり此地に昔し澁谷長者宗順なる者ありて今猶ほ其宅趾及び墳墓を存す近傍に氷川神社、澁谷八幡、長谷寺等あり又停車場より東

南半里許りにして廣尾の笑花園及び祥雲寺等あり青山麻布に住ふ者此の停車場より乗降するを便利とす

豪徳寺 停車場より二子街道を西南の方に行くと五十町世田ヶ谷村の入口に在り曹洞派の禪刹にして文明年間の創建に係り高輪の泉岳寺に屬す中興の開基は井伊掃部頭直孝にして同く開山は天極秀道和尚なり、堂舎壯嚴、釋迦、彌勒、彌陀の三世佛を以て本尊とし寺内に清涼橋、黃鳥哺、星嶽丘、碧雲關、楓樹林、松柏壇、臥龍櫻、選佛場、枯華塔、照心堂等の十勝あり此寺元と弘徳院と稱し吉良治家封を世田ヶ谷郷に賜はりし時其の菩提所たりし所にして寺内に吉良氏の舊城址及び吉良氏累代の墓あり又寺より西の方の岡續きに宮阪八幡宮あり吉良頼貞の建立する所と云ふ

●新宿停車場 (東京府武蔵國豊島郡角筈村)

○内藤新宿 は東京市の西隅に在り街道の岐る、所を追分と云ひ右を青梅街道とし左を甲州街道とす、停車場は追分の西角筈村に在り赤羽線

及び甲武鐵道線と接続する所にして西すれば入王子に至り東すれば市内飯田町に達し北に向へば赤羽、大宮を経て陸奥、青森又は高崎、碓氷峠を経て越後の直江津に至り南すれば品川を経て京都、大阪若くは山陽各地に旅行し得べき四通八達之地にして乗客常に群集し新橋上野に亞ぐの繁忙停車場なり

十二社 新宿停車場の西十餘町角筈村に在り家津御子神を祭り紀州熊野神社と同神なり故に十二所熊野神社と云へるを世俗誤り傳へて十二さうと呼ぶ境内廣濶にして山あり池あり頗る風致に富めり又一條の瀑布ありて夏日納涼の爲め來り遊ぶ者頗る多し

●目白停車場 (東京府武蔵國北豊島郡高田村)

高田村は東京小石川区の西端に方り停車場は高田老松町及び關口町を距る僅かに十町餘の所に在り北は雜司ヶ谷村に隣り南は源兵衛村に接し西一里にして新井村藥師堂あり、高田は慶長年間越後少將忠輝の北堂高田

の君遊覽いんらんの地を拓ひらきたる處にして後ち寛永年間徳川氏其跡に馬場ばばを築ききて高田の馬場しやうと稱せり、又同村内に古へ所謂山吹いはゆるの里あり太田持資はうし放鷹ほうたうの途中急雨あまに遇あひて雨具あまぐを借らんとして少女せうにょの爲めに山吹やまぶきの枝えだを示しめされ終に其意かを解かいせざりしと云ふの舊跡きうせきなれども今は其地ちさだかならず

目白不動 停車場ひがしの東十八町關口臺町目白阪あの上に在り地は關口せきの崖がけに臨みて南に早稲田わせだの稲田いなでんを見晴し眺望てうぼう稍ちやうや快濶くわいなり、寺は眞言宗しんごんしゆにして新長谷寺しんちやうこくじと號し本尊不動明王ぶつぞんぶどうめいおうは弘法大師こうぼうだいしの作さくなりと言傳ごんべんふ當時は元和年間和州長谷はせの小池坊秀算せうざん僧正そうじやうの中興ちゆうきやうにして徳川秀忠公とくがわしゆぢゆうこうの命めいに依りて堂塔伽藍たうかゑんを建立けんりつし後ち長谷寺本尊ちやうこくじほんぞんと同作どうさくの觀音像くわんおんざうを移うつして新長谷寺しんちやうこくじを改め三代將軍家光公さんだいしやうぐんけいこう之に目白めじろの號ごうを賜たまひぬ、寺内茶亭てい内ちやてい多く四時しよじとも遊人ゆうじん絶えざるが中に最も雪中もつゆの景けいを好よしとす

鬼子母神堂 停車場きこぼじんどうより北七八町雜司ヶ谷村ざくに在りて法明寺ほふめいじに屬す本尊鬼子母神銅像きこぼじんどうざうは星の清水しほのしみづより出現しゆつげんせしものと言傳ごんべんへ之を信仰しんかうする者頗

る多く參詣人常さんぎにんじやうに群集ぐんしゆし殊ことに十月八日より廿三日迄あしきの會式かいしきには其雜沓ざつたふ云はん方かたなし、堂宇どうう壯麗さうれいを極め寺域ていきまた廣寬くわん、老杉らうしん鬱然うよくんとして之を圍繞ゐらうし入口いりぐち兩側りやうせうには茶亭ちやていいと多し

●板橋停車場 (東京府武蔵國北豐島郡澁川村)

○板橋驛 是東京市の北、中仙道第一次の宿驛しゆくにきにして上下二宿ふたしゆくに分る驛は則ち下板橋にして停車場を距る十町ばかり驛内に北豐島郡役所、警察署及び旅店妓樓等軒のきを並べ車馬絡繹らくえきとして往來最も繁しげし驛の入口にて道二つに岐わかれ左すれば上板橋を経て川越町に至り右は即ち本街道にして蕨驛あゐりまで二里十五町、浦和町まで三里廿五町なり又驛内に乘蓮寺、氷川神社等あり、驛の左の方少し入込みたる處に平塚山あり一祠ありて源義家の靈たまを祭り祠背の塚を鎧塚よろひづかと稱へ義家の鎧一領を埋めたる處なりと言傳ごんべんふれども確かなる據よどころ無きもの、如し(線路は此驛このえきの南を横ざり十條、稻村を經、赤羽にて奥羽及び中仙道幹線と聯絡す、赤羽の記は東

北幹線の部に就て覽るべし

●上野停車場 (東京市下谷區上野山下町)

日本鐵道會社線の起點にして東北は陸奥青森に至り西北は大宮より岐れて高崎、前橋に達し猶ほ列車を高崎に乗換ふれば官線は遠く旅客を越後直江津に導き、小山には水戸行の支線あり前橋、小山線には兩毛鐵道線あり其他宇都宮より岐る、日光線あり仙臺より岐る、鹽竈線あり一は東照宮に賽して社殿の華麗なるを觀るべく一は松島に遊びて風景の絶佳なるを賞すべく共に旅客の遊覽に便あり又赤羽より分れて品川に至れば線路は東海鐵道に接続するを以て關西各地に旅行するも亦自在なり

○上野より青森行通し列車は一日一回、仙臺に至るもの同く一回、福島に至るもの一回、宇都宮に至るもの三回の發車あり又高崎前橋に至るもの一日六回の發車ありて其内三回は長野、直江津行の列車と聯絡し又兩毛鐵道及び日光、水戸の支線に於る列車に至つては幹線上下の列車と聯絡

絡するものと聯絡せざるものあり故に他社の線路若くは支線各地に赴く旅客は豫め汽車發着時間を調べ以て中途乗換へ停車場に於て時間を徒費せざるやう心掛くると肝要なるべし

上野停車場は上野公園舊東叡山の東麓に位し東京市中最も繁昌を極むるの地たり今近傍の名所を擧ぐれば上野公園、不忍池は停車場を距る僅に三四町に過ぎず其北には根岸の里(今は根岸町と稱す)日暮の里あり淺草公園へは鐵道馬車の往復するありて二錢を賃すれば僅に半時間にして達し神田神社、湯島神社、根津神社等は亦二十町以内であり是等東京市内名所の案内は既に上編新橋停車場の部に記載し置たれば茲には例に依り上野停車場より各地への里程並に人力車賃を示さん

◎上野より各地への距離並に人力車賃

距離	人力車賃	距離	人力車賃
宮城二重橋	一里八町	十二錢	新橋
			一里十八町
			十四錢

赤阪離宮	二里十丁	二十錢	淺草公園	二十一町	六錢
日本橋	三十四町	八錢	向島枕橋	二十八町	七錢
兩國橋	二十七町	七錢	木母寺梅若塚	一里三十二町	二十錢
淺草橋	二十二町	六錢	深川公園	一里三十町	二十錢

●王子停車場 (東京府武蔵國北豐島郡王子村)

○王子村 是東京近傍の勝地として人の知る所なり、土地最も静閑にして夏は避暑に宜しく、春は飛鳥の花、秋は瀧の川の楓樹あり、冬期に至れば飛鳥の觀雪又更に趣ありて四時遊人絶ゆる事なし、この地上野を距る僅々三哩七十三鎖、下等乗車賃五錢を投ずれば瞬刻にして至るべし、停車場前より右の方沿道には旅亭料理店軒を並べ就中海老屋を以て最とす、近傍に於て一顧すべきは飛鳥山、王子神社、王子稻荷社、瀧の川楓樹、不動の瀑、名主の瀑等にして何れも六七町以内に在り就中飛鳥山 は停車場の南に欹てる高丘にして青き芝生は數萬歩に渉り其間に櫻樹の點々たるを見る、往時近傍平塚村より此の邊りまで豐島左

衛門が居城なりしと聞けど今は原ぬるに由なし、初め豐島左衛門丘上に飛鳥の祠を移し因て飛鳥山と稱しけるが寛永年中王子權現を造營するに方り山上の飛鳥祠を遷して權現の社頭に鎮坐せしめたるに依り今は名のみ残り、元文の比に至り台命に依て櫻樹數千株を植ゑ年を越えて花木林となりしより騷人墨客杖を曳く者夥しく今は隅田飛鳥を以て並稱せらるゝに至れり、丘上よりは汽車の來往を眼下に瞰下し、近くは一面の青田を見晴し遠くは筑波榛名の翠黛を一時に集め、風光頗ぶる佳なり、山に對し數町を隔て巍然たる煉瓦石造の巨屋あり、常に數條の煙突より黒烟を噴くを見る、是れ有名なる王子製紙場なり、曾て庶人の縦覽を許したるが今は許さず

王子神社 は飛鳥山の地方音無川を隔てたる處に在り、境内には樹木鬱蒼として夏時暑氣を覺ゆず社殿の結構また壯觀を極む、本社祭神は中央伊弉册尊、左速玉男命、右事解男命にして禪夷山金輪寺は本社及び稻

荷社の別當寺たりしが維新後神佛混同の弊を革めしより二社共に金輪寺の關係を斷ち別に社掌を置くに至れり、本社、拜殿、舞臺、額殿等ありて毎歲八月夏祭りを執行す

不動の瀑 停車場の西北六町許り正受院の本堂の後坂路を廻り降ると數十歩の所に在り、飛瀑丈餘蒼樹蔭鬱として天日を蔽ひ青苔露滑らかなにして爽氣肌を襲ふ、夏時に至れば瘋癲者などの來り浴する者多し、因に日名主の瀑は停車場より北の方五六町に在り人造瀑布にして其の細き不動の瀑に比すれば雅俗同日の論にあらず、又稻荷にも瀑あれど名主より一層水細くして浴すべからず、楓樹は音無川の上流に在り秋期に至れば兩岸の錦繡水に映じ美觀云ふべからず遊人の來る飛鳥の花に亞で多しといふ

●赤羽停車場

(東京府武藏國北豐島郡赤羽村)

赤羽は東北線第三の停車場にして是より新宿に至れば甲武線に連絡し品

川に至れば東海線に連絡するの便利あり、此の地素一小寒村に過ぎず、鎮守赤羽山八幡宮は文明の頃太田道灌の再興せしものにて頗る舊社なりといふ、停車場より數町にして岩淵町といふあり之を過ぎ又數町にして戸田川の下流に至れば川口の渡航場あり、此川は東京府埼玉縣の管轄境にして之を渡れば即ち埼玉縣北足立郡川口町に至るべし、赤羽停車場と相距る僅々七八町、茲には許多の鑄物師あり往時は川口の鍋つくりと稱へ鍋のみ鑄たるものなるが近世鐵瓶其他をも鑄造し漸次技術の進歩を見る、今鍋屋の井といふもの残り世に名高し、是より鳩ヶ谷町へ壹里餘汽車は三千零三十二呎の戸田川の鐵橋を渡り、蕨驛に達す

●蕨停車場

(埼玉縣北足立郡蕨町塚越)

○蕨町 是停車場の西十餘町に位し中仙道の一驛にして東京を距る四里許り、驛の廣袤東西二町、南北七町餘、人戸二千餘、維新前に比すれば稍や衰頽の狀なきにあらずと雖ども今後鐵道の便を假らば更に其の衰

運を挽回するの期あるべし、近傍案内すべき名所舊跡等なければ是より直ちに浦和驛に進むべし

●浦和停車場 (埼玉縣武藏國北足立郡浦和宿)

○浦和町 是埼玉縣廳の所在地にして驛の長さ南北拾餘町、戸數千八百餘、人口六千零四十七、所謂る中仙道中の一驛なり、裁判所あり警察署あり郵便電信局あり又中學校あり埼玉縣下屈指の繁昌地となす然れども此の地東京に接近し交通の便利却つて商業不振の原由となり他の縣廳所在地に比しては稍や寂寥の憾なき能はず、驛の南端翁壽齋たる森林あり之を調神社といふ今は浦和公園となれり、境内幽靜にして茶店あり夏日暑を避け閑を遣るに足る

與野公園

浦和町の西北一里餘、與野町に一公園あり、地は一丘陵を爲して高低一ならず丘上には櫻花數百株枝を交へ老樹には幹空洞にして三人を容るゝに足るものあり、園の廣さは凡そ五千坪にして西隅に築山

あり之に登れば眼界忽ち開け四方田圃を見晴して風景頗る佳なり、花候に至れば近傍の士女塵集して頗る殷賑を極む

●大宮停車場 (埼玉縣武藏國北足立郡大宮町)

○大宮町 是所謂る北越鐵道の起點にして東北鐵道線と分岐する所なり、故に東北地方に行く人、前橋高崎及び直江津地方に行く人は、互ひにこの停車場に於て乗換るなり、此驛も亦中仙道の一驛にして戸數九百餘、人口三千百三十八、武藏總鎮守と仰ぐ氷川神社は此の地に在り所謂る武藏の一の宮なり、今は其の境内を以て大宮公園と爲す

大宮公園

是東京近傍に於て有名の勝地たり、停車場を距る僅々十二町、人力車に賃すれば六錢にして達すべし、境内に鎮座する氷川神社は官幣大社にして社殿の結構甚だ壯觀ならずと雖ども古松老杉鬱爾として枝を交へ頗る神威を添ふるに足る神社の前面には周回十餘町の古池あり之をみたらしの池と呼ぶ、之に目鏡橋を架し橋上に立て手を拍ば池中の

鯉魚聲に應じて群集し餌を投ずるを待つ、公園内第十四區より亞兒加里性の鑛泉涌出するを以て旅店萬松樓は館内に浴室を設け之を引きて客の一浴に便ず、其他松友館、公木樓、藤ノ戸の旅店ありて割烹を兼ね
 八本松 は水川神社南大門八丁目を三丁ばかり東に入りたる所に在り往時日本武尊東征の時御陣を据ゑさせられたる舊地なりと云ひ傳へり、
 ○潮田山 は文明中上杉定政の老臣太田資清の次男資忠の城址にして大宮壽能の城といふは是なり天正十八年秀吉の爲めに亡ぼさる○九郎塚稻荷 は足立藤九郎盛長なる者其住地に塚を築き稻荷の祠を安置せしを以て初め藤九郎塚と云ひ後年誤りて黒塚と書するに至れり今も尙ほ稻荷の祠ありて公園より遠からず

●蓮田停車場 (埼玉縣武蔵國南埼玉郡綾瀬村)

○蓮田 は南埼玉郡の西隅に在る一小村にして今は綾瀬村の大字に屬し戸數二百戸、人口九百八十を有す、村内記して傳ふべきものなし但し

是より岩槻町へ壹里餘、粕壁町へ二里半

●久喜停車場 (埼玉縣武蔵國南埼玉郡久喜村)

○久喜町 は戸數六百五十餘、人口二千三百五十九、驛の長さ五町許り人家軒を並べて一市を成す、是より東北里許にして幸手驛あり所謂陸羽街道の一驛なり、當驛及び栗橋の間に流る、一川あり權現堂川と云ふ、利根川の支流にして一朝洪水氾濫する時は必らず其の患を被ふる、明治八年幸手栗橋の人民相商り堤防を築きて其の患を防ぐ、其の長さ十餘町に亘る、同九年車駕東巡の時駕を堤上に駐め其工事に與かる者に金を賜ふて之を賞す、因て名けて行幸堤といふ事記して碑石に在り、又是より左折里許にして霞ヶ關舊趾あり古松一樹を餘す、東京霞ヶ關は此名を移すものなりといふ

●栗橋停車場 (埼玉縣武蔵國北葛飾郡栗橋町)

○栗橋町 は陸羽街道の一驛なり、停車場を降り右一町許りにして驛

に出づ、宿の長さ五六町、戸數七百餘、人口二千七百四十五、北葛飾郡中幸手驛に次ぐの繁昌地なり、是より利根川の川幅最も廣き所の鐵橋（長さ一千五百二十七呎）を渡りて古河に達す、此の所は川を以て武藏下總、埼玉茨城の國縣を分ち川の中心を以て堺とす、古河は即ち下總の西葛飾郡に屬せり、幕府は曾て關を此所に設けて行旅を驗したるが維新の後之を廢せり

靜御前の墓 是栗橋停車場を距る西南數十歩伊坂村に在り、舞妓靜義經の陸奥に在るを聞き往て從はんと欲し途にして既に死するを聞き還て此に來り會ま病に冒されて死す因て葬ふるといふ、利根川の北中田村に光了寺といふ古刹あり、今に靜の舞衣ををさむ、越中守少將松平定信其事を記して收めたる箱あり後人のつくり物にはあらざるべし

●古河停車場（茨城縣下總國西葛飾郡古河宿）

○古河町 是下總の西端に在りて茨城縣に屬す、土井氏の舊城下にし

て古來下總の要地とし所謂陸羽街道の一驛なり、戸數三千餘、人口九千七百五十九、人烟稠密、車馬絡繹管内屈指の名邑たり、是より東南に鴻巣及び茶屋新田あり、此地は中古足利成氏の據るところにして古河公方の城址是れなり

鮭延寺 是古河驛の東十五町許り大堤村に在り、此の寺は出羽の最上義光の家人鮭延越前が爲めに建てし寺なり、越前曾て最上の家にて一萬五千石を領したりしが最上侯亡びて後從者二十人と共に浮浪の身となり古河に來りしに城主土井利勝之を聞き越前に五千石を與へて抱へたり越前之を自ら受けずして二十人の從者に分ち各々五十石の士となし己は一日かはりに二十人の家を巡りて養はれけり年經て病歿せしを二十人の者悲嘆遣る方なく遂に一寺を建立して鮭延寺と名けたりとぞ、熊澤蕃山の墓も亦境内に在り

源三位の墓 是土井氏の舊城内に在り、傳へ云ふ頼政宇治の役自殺せ

んとし其の臣渡邊唱に必らず吾首を塗めよと命せしかば唱其首を囊にし
此に來りて下河邊行平に投じて以て葬ふる、行平は嘗て射を三位に學ぶ
者、故に其恩に酬ゆるなりと、近傍に足利成氏時氏等の古墳あり

●問々田停車場 (栃木縣下野國下都賀郡問々田村)

問々田は陸羽街道の一驛にして戸數凡そ一千戸、人口五千人あり市街は
南北に長くして其の繁昌小山宿と伯仲の間に在り、陸羽街道を旅行する
者古河より當驛に來る間一二の古跡あるを見るべし野木明神は野木村に
在り皇子菟道稚郎子を祭る其西南八町ばかりに臺手函古墳あり仁徳天皇
の御宇下野の國造奈良別命の任に赴くに方り稚彥皇子の遺骨を奉じて來
り葬る即ち往古野木宮の舊趾なり

●小山停車場 (栃木縣下野國下都賀郡小山町)

○小山町 是古河を距る九哩七十五鎖、野木、問々田を経て到るべし、
此の地從來宇都宮に亞で殷盛なりしが維新以來馬車及び小汽船等の往來

開け、爲めに旅客は足を止めず、商賈また活路を失なひ頗る衰狀を呈し
たりしが近時鐵道の敷設ありしより水戸鐵道の起點となり、兩毛線路も
亦此驛に於て岐れ東北線も亦此を過つて北行し、實に四通八達の最要地
となりしを以て漸く其の衰頽を挽回するの運に會せり、現今の現況を聞
くに戸數一千三百餘、人口四千八百五十二尙ほ漸々増加の勢ひありと、
驛の中央より左折すれば小山氏の城趾に至るべし其他名勝舊跡の案内す
べきなし(水戸支線は別に項を設けて記載す)

●小金井停車場 (栃木縣下野國下都賀郡小金井村)

○小金井 是今は國分寺村に合し字となれり、國分寺村は戸數千餘、人
口三千七百七十八、此の地又小市を成す近傍一顧すべきは左記の藥師寺
の舊蹟なりとす

藥師寺舊趾 小金井驛を距る東卅町に在り、驛のはづれより右に入る
昔し廢帝の寶字五年始めて戒壇を下野の藥師寺并に筑前の觀世音寺に立

らる、凡そ天下に戒壇ありしは南都東大寺と此の二ヶ寺あるのみ此外に
 立るを許されずとなり、備此舊跡を探らんと欲せば先づ驛の外れより右
 に入り那須野に續きたる曠野の草むらの小徑を行けば薬師寺村に至る、
 此處に祥雲山龍興寺といふ古刹あり門を出て右の方に弓削道鏡の墓あり
 道鏡罪あり流されて薬師寺の別當となりて死せしといふ、又鑑真法師の
 墓あり、碑の表に鑑真大和尚、傍に天平寶字七壬寅五月五日と鐫つけた
 るがあざやかに見ゆ、又一古墳あり傳へて稱徳帝の陵墓とす、然れども
 道鏡の墓あるを以て附會したるならん、茲を去つて醫王山安國寺に至れ
 ば境内に戒壇のありし所とて六角堂を建てたり、此の二寺共に薬師寺の
 跡なりとて兩寺争ひを起し享保の頃幕府の處分を受けしが何れとも決せ
 ずして止みたりと

●石橋停車場 (栃木縣下野國下都賀郡姿村)

石橋は姿村の一部にして大字石橋といふ、姿村は戸數千餘人口四千三百

二十九ありて頗る大村なり、是れより雀の宮に至れば縣社雀の宮あり、
 この邊りより東に當り筑波足尾、北には黒髮山などの諸山見えて風景頗
 る佳絶なり

●宇都宮停車場 (栃木縣下野國河内郡宇都宮町)

○宇都宮町 は舊戸田因幡守の城下にして陸羽街道中屈指の名邑た
 り、市の廣袤東西壹里拾二町、南北一里二十三町餘、市坊四十九、戸數
 九千五百餘、人口三萬零百三十二、此の地往昔宇都宮氏の居城にして子
 孫此に住し兵威大に振ひ終に州主と稱し壬生、泉、山田の諸族皆な來り
 屬せり、天文中に至り那須氏と戦つて大に敗れ、北條氏亦州の南境を畧
 せしかば兵勢漸やく衰ふ、後國綱に及び豐臣氏に屬し功を以て舊封十八
 萬七千石を全うするを得たるが慶長二年又罪を獲て其の封を收め之を蒲
 生秀行に賜ふ、六年徳川氏秀行を會津に徙し奥平家昌之に代り、又數姓
 易封の後寶永中戸田忠貞を封ず、忠貞一旦島原に徙されしも曾孫忠寛に

至りて封を復し以て維新に及べり、王政革新の始め日光縣を置き既にして之を廢して宇都宮縣を置き、又廢して栃木支廳を置きたるを又々廢して遂に栃木縣廳を置くに至れり、縣廳の外裁判所、大林區署、警察署、監獄署、郵便電信局及び師範學校等あり、東北鐵道線の一驛にして殊に日光線路の起點たり、縣下唯一の繁昌地たる知るべきのみ、旅亭の重なるものは手塚屋、白木屋、稻屋、丸屋、高澤屋、林屋等なり

二荒神社 ふたらのじんじや は宇都宮市に在り是れ所謂る宇都宮なり、二荒は此の社の地より日光山に續ける山の惣稱なりといふ（詳しくは日光の部に記す）日光の二荒神社と孰れが本家なるや分家なるや、知り難し祭神は共に大己貴命なり或は皇子豐城入彦命を祭れりともいふ神殿は維新の際兵火に罹りて燒失せしを數年前造營せり先年官幣中社に列せらる、境内には下野十神社、猿田彦社、天神宮、招魂社等多くの末社あり例祭は九月九日を以て執行す

鐵の碑 市中誓願寺といふ寺に在り正和元年宇都宮公綱其母の十三回忌に建てしものなりといふ、因みに記す公綱より五代ばかりの祖に宇都宮彌三郎頼綱といふ者あり、入道して蓮生法師といふ、和歌を好くし老て後京師に至り嵯峨の中院に住めり、世にもてあそぶ京極黃門の百人一首は此の入道の住居の障子に押す料として書きしものなりといふ

蒲生君平の蹟 はまふくんへい 市中禪林寺に在り、君平は勤王の王なり數々朝廷より追賞の特典を蒙り曾て勅して正四位を贈らる、著はすところ職官志、山陵志等あり世に知らる

大谷山 だいやさん は宇都宮を距る西北二里半に在り、人力車に賃すれば金十五錢にして行くを得べし、山は巖石より成り奇岩怪石簇立して峯を爲す、就中巖を穿ちて數多の佛像を爲す者最も奇觀なり、門あり之を入れれば廣さる百歩許り内に千手觀音の石像を安置す身の丈一丈六尺、山巔に上れば姿川の上流を望み眼界豁然爽快云ふべからず、是れ實に全國無比の仙

境なりとす

◎編者日ふ暫らく本線の案内を中止し是より讀者を日光支線に導びき日光及び其近傍の名勝を案内せんと欲す、因に記す宇都宮より日光發の汽車は午前五時四十分、同十時廿分、午後十二時五十分、同三時、同六時二十分の五回にして進行時間は凡そ一時三十分間、宇都宮を午前五時四十分の一番列車にて發すれば朝の七時十分には日光町へ到着し得べし

●砥上停車場 (栃木縣下野國河内郡姿川村大字下砥上)

砥上は一小村のみ、日光支線第二の停車場にして宇都宮を距る三哩四十八鎖に過ぎず、今は上下砥上鶴田等の諸村を合して姿川と稱す、停車場は字下砥上に在り、近傍觀るべきものなし

●鹿沼停車場 (栃木縣下野國上都賀郡鹿沼町)

○鹿沼町 は日光線路中第一の繁昌地にして町の廣袤東西十二町二十

五間、南北三十四町三拾八間、市坊十五、戸數三千、人口九千五百八十二、麻を以て名産とす停車場を降り六七町にして石造の巨屋あり、是れ有名あまはらの麻紡績會社なり、大津おほつの麻紡績、札幌さっぽろの製麻紡績、之を日本三紡績といふ、其の盛大推して知るべきのみ、驛は停車場を距る十餘町の低地に在り、上都賀郡役所、警察署、郵便電信局等皆な市中に在り、又驛の西方に鹿沼入道の古城址あり

●文挾停車場 (栃木縣下野國上都賀郡落合村大字小倉)

文挾は落合村の一部にして小代、板橋、明神、文挾等を合して一村たり大谷山だいやさんの麓に位し山中の一驛なり、是より西北二十三町にして小代温泉あり此温泉は筧を設けて日光湯本温泉を遠く引來りて浴客の便に供したるなり、旅舎一戸あり庭前の池には鯉鮒をやしなひ室また清潔なり、宿料一日十五錢位、入浴料三錢、料理は客の好みに應じて調進す

●今市停車場 (栃木縣下野國上都賀郡今市町大字平ヶ崎)

〇今市町 は日光を距る四哩一鎖の所に在り戸數一千七百餘、人口五千百餘、鹿沼に亞ぐの繁昌地なり、維新の際兵火に罹り民家過半燒燼したるが今は全く舊に復せり、又此地に二宮尊徳翁の墓あり

藤原温泉 は下野國鹽谷郡藤原村大字藤原に在り、今市停車場を距る北の方四里半、倉ヶ崎、大桑を経て高德に出で同村より鬼怒川の東岸に浴び大原を過ぎて藤原に到る、東に金山を負ひ、西南に日光の連峯を望み、鬼怒川は村の西を流れ、土地高燥にして空氣乾燥せり、夏日陰雨多し、秋季晴日多し、常に西北風多くして盛夏は九十度以上に昇り隆冬と雖も積雪尺に滿たず、温泉は鬼怒川の東岸岩石の間より湧出し無色透明反應は弱亞兒加里性にして九十六度の温度を有す其分拆表を見るに一リ

格魯兒	少	量	一	硫	酸	少	量
硅	少	量	一	加	里	少	量

那篤倫	少	量	一	麻	俣	涅	失	亞	痕	跡
加留基	少	量	一							

此の温泉は明治二年創めて發見し明治十二年三月浴場を設けたり温泉宿は幸屋(星猷治)一戸あるのみ、幸屋の宿料は一日上等二十五錢、中等二十錢、並十五錢にして坐敷料は一日貸切六錢より十錢までとす、今市より此地に到る人力車賃二十五錢、駕籠賃は四十五錢、當温泉場より鬼怒川の流れを隔てて對岸に

瀧温泉 あり藤原村に屬す河上に假橋を架して相往來す、東北に高山あり西南は黒髮山の餘脈なる栗山諸山あり、氣候風土は藤原温泉場に異ならず、温泉は鬼怒川の南岸砂石中より湧出し大出某浴場を設く、湯槽四個あり浴客は夏秋に多く冬春に少なし、泉質は硫黃泉にして無色透明、其の反應は亞兒加里性にして百七度の温度を保つ、之を發見せしは今より百三十餘年前寶曆年間在り、今市停車場よりの順路、人力車賃

等は藤原温泉に異ならず

川治温泉 藤原温泉場より鬼怒川の東岸に沿ひ行くと北方一里餘にして高原村に至り橋を渡れば即ち川治なり、此の橋を追欄橋と呼び川を男鹿川といふ、男鹿川は高原村にて鬼怒川と合するなり、温泉は河岸の岩解より湧出し男鹿川に接近するを以て流水を混ず、泉質は鹽類泉にして百十三度の温度を有し打傷、創傷、疝氣、痔疾、胃病、肺病等に効あり地勢は西南一帯高山を帯ぶるを以て纔かに朝暉を受くるに過ぎず、その風向は常に西北風多く雨の多少、空氣乾濕の有様等は藤原温泉に異ならず、同所は戸數十四、温泉宿二戸近江屋鬼子三、神山某あり近江屋の母屋は後に温泉ヶ嶽を負ひ長屋は前に男鹿川を臨みて景色頗る佳なり
籠目巖 は今市より東北二里餘、岩生村に在り大渡の渡船場を渡り鬼怒川の北岸に沿ひ行くと十五町許にして達す、奇觀云ふべからず此近傍の勝地を探らんと欲せば必らず一遊して可なり

●日光停車場 (栃木縣下野國上都賀郡日光町)

○日光町 停車場を出れば道の兩側に各旅亭の出張店あり之より爪頭上りに道を行き大谷川假橋に至るの間を出町といふ、兩側に旅店、料理店及び日光名物の挽物細工、獸皮、羊羹等を賣る家軒を并べ夏日は頗る繁昌を極む、市街は盤戸町、松原町、君屋町、御幸町、稻荷町、鉢石町等の十三町より成り、其の廣さ東西三十町、南北五町、戸數二千、人口六千五百七十五を有す、又市中觀るべきもの多し、瑞雲山龍藏寺の觀音(石屋町に在り)は慈覺大師一刀三禮の作にして坂東第三十二番の札所たり、又惠心の作れる辨財天あり、石山觀音寺(鉢石町に在り)より少しく登りて觀音堂あり、茲に安置する千手觀音の像は弘法大師の作なりといふ日光町にて旅亭の名高き者は左の如し

- 小西屋喜一郎
- 會津屋喜平
- 神山 徳平
- 古橋 保平
- 紙屋 半平
- 油屋長之助
- 釜屋喜三郎

旅客は先づ此の旅店に投じ豫かじめ行く所を定め案内者を雇ふて見物に赴くを善しとす、請ふ東照宮の案内より始めん

東照宮 是贈正一位太政大臣徳川家康公の靈社なり、元和二年十月始めて宮廟を營み、公の遺命を奉じて久能山(公の遺骸は久能山に葬むる)より此地に遷葬したりといふ、元和三年二月朝廷宣して東照宮大権現の號を賜ふ、同三月九日勅使江戸に降り正一位を贈らる、明治六年別格官幣社に列す、東照宮に參詣するには先づ出町より西して大谷川の岸に至る、茲に假橋ありて左方に神橋を望む、神橋は初めの名を山菅の蛇橋と云ひ、長さ十四間幅三間朱を以て塗り勾欄擬寶珠に渡金の金物を用ふ、假橋を渡り老杉翳鬱たる間を過ぎ石階を登り行くと三町にして華表あり高さ二丈七尺、笠木七尺、總て花崗石より成る、額面は後水尾天皇の宸筆なり、華表の左方に五重塔あり高さ十七間二尺、承塵の上圍に十二支の彫刻あり、華表の右方に番所あり是より表門を過ぎ左手に三神庫、神

既を見て進めば突當りに鍋島信濃守の寄進せし花崗石の手水鉢あり又銅の華表あり之より又石階を登れば右に鐘樓あり左に鼓樓あり、又此近傍に諸侯の献納せし燈籠數十基あり、朝鮮國より献納せし虫喰鐘、琉球より献せし蓮燈籠、和蘭國より贈りたる廻燈籠等は殊に奇品なり、是より又石階を登れば陽明門あり、俗に之を日暮門といふ、美術の妙を盡し終日眺むるも猶ほ飽ざるの思ひありとて斯くは名づけたりとぞ、陽明門は破風造りの樓門にして破風下軒端には四方に金鈴を懸け表に極彩色の隨身あり裏には金色の獅子を排置す、其の欄間欄干には人物花鳥等種々の彫刻あり或は角木の端に刻し、或は丸彫にせるあり總て良工名匠の手に成り精密なる彩色を施し且つ室毎に鍍金の金物を隈なく鏤めたるを以て光彩燦然として人目を眩ます、陽明門と相對して正面に唐門あり總て素木造りにして四方棟、唐破風造りなり正面の破風の上に唐銅製の恙の虫を繋ぎ破風下、欄間、梁、柱どもに彫刻の妙を極む、又他木を接ぎ飾

れる所なく其の精微に至りては筆舌の能く盡す所にあらず、唐門を入りて拜殿に達す、拜殿は間口九間奥行五間の廣厦にして向拜付階段五級、すべて鍍金の金ものを張り濱椽高欄は蠟色塗にして殿内の柱は總金箔なり唐戸も亦蠟色塗金蒔繪なり、中の間は六十三疊、折揚格天井には青地に蟠龍を畫き、承塵の上には後水尾天皇御染筆、土佐左近將監畫の三十六歌仙の額面を掲ぐ、東に將軍家着座の間あり、十八疊にして其の天井は折揚天蓋造り、中心に伽羅木を以て葵の紋章を着け、又正面左右には唐木の寄木を以て桐に鳳凰を彫付けし羽目あり、西に輪王寺宮休息の間あり、亦十八疊にして天井に天女の像を彫り、羽目は鷲松梅等の唐木彫あり、拜殿と石之間の間に四季の柱あり、堆朱の柱にして一基の價當時八萬兩宛なりといふ、拜殿の正後に本殿あり、本殿は桁行七間五尺、梁間六間、破風には鳳凰の彫刻あり、梁、欄間等には鳥獸草木の高麗あり、殿内には内陣、空殿など稱する所あり何れも金銀珠玉を鏤め滿目燦

爛、人をして目眩し魂飛ぶを知らざらしむ、唐門を出で、神樂殿と社務所との間に至れば茲に猫の門あり、承塵の上に丸彫の睡猫あり左甚五郎の作なりといふ、門を入れば坂下門あり素木作りにして椽は黒塗なり、冠木には牡丹鶴を彫刻す、之より石階を登りて本殿の正後に當る山頂に達す茲に奥殿あり、唐銅の華表の内に拜殿ありて其後に玉垣を廻らし中に唐銅の寶塔を建て下に家康公の尊骸を斂む、以上巡覽し畢らば案内者は更に參詣人を二荒山神社に導くべし

二荒山神社 は東照宮の表門より右折して新宮馬場を出で數十歩にして其の本社に到る、此の社は二荒山三社の新宮と稱し祭神は大己貴命なりといふ、社傳を按ずるに今を距ると二千餘年の昔し崇神天皇の御宇皇子豐城入彦命東國を治めんとて降りたまひ親から崇祀し奉つる云々是れ秘祀の緣由なり、其後幾多の變遷ありて明治六年國幣中社に列せられ自今官祭を仰せ出さる云々、東に向ひて唐銅の華表あり高さ二丈二尺、

周圍六尺五寸、有栖川熾仁親王揮毫の額を掲ぐ、又素木造り三間四方の神庫、素木づくりの舞樂殿及び高野槇の神木、俗に化燈籠と稱ふる唐銅の燈籠あり、茲を過ぎて拜殿に至る、拜殿は間口七間奥行四間半にして總朱塗なり其の後に唐門あり、唐門の正面は即ち本殿なり、本殿は所謂八棟造りにして濱椽向拜付、總朱塗、正面の扉は黒塗なり、本殿の外通り長押欄間には花鳥木獸を或は書き或は彫り總て彩色を施し又内殿の左右に神寶を並列す、唐門外の西南に前記の化燈籠あり高さ七尺許りにして古色を帯び且何故にや數多の刀痕を見る、正應五年鹿沼入道教阿の献寄する所、拜殿の傍に高野槇あり、相傳ふ弘法大師登山の時苗木を高野山より齎らし來りて植る所なりと

大猷院殿の靈屋 是徳川三代將軍家光公を葬る所なり、正面に二王門あり桁行四間半、梁間二間半、三棟造り左右に右彌那羅延金剛、左輔密迹金剛の二王を安置す、裏の左右にも同形の二王を安す是は東照宮の表

門に在りしを明治六年此所へ移せり、二王門を入りて左折すれば二天門あり樓上の高欄擬寶珠等にはすべて鍍金の金ものを用ひ且つ所々に葵の紋を點す、此門北に向ひ右に持國天、左に廣目天の木像を安す、又裏面に風雷の二神を假置し其の題額は後光明院の宸筆なり、茲を入り右曲左折して七十二級の石階を昇れば左右に鐘鼓の二樓對峙す二樓の間より望みて正面に輝き立つものは夜刃門なり桁行四間二尺、梁間二間半、唐破風造り兩面の左右に健陀羅、毘陀羅、烏摩勒、阿跋摩の四夜刃を安置す門の左右に廻廊あり玉垣の前には諸侯の献納せし燈籠十基を羅列せり、茲より敷石を歩して内に入れば唐門あり鏤刻の精采畫の美また言を俟たず、唐門より左右後へ折廻して拜殿本社を圍む玉垣あり、羽目は地紋をすかし上の欄間は竹松梅椿及び種々の草花に群鶴を刻む、拜殿は東北に面せり其のつくり向拜付にして五級の階段あり、階は臘色の研出しにして高欄は朱塗に鍍金の金ものを鏤め唐戸は金色にして地彫高彫あり、殿

内は六十二疊敷、中央に減金の天蓋を掲げ其下に金梨子地の高机及び三具足を備ふ、拜殿の次に間室あり間口一間二尺、奥行四門半許り、次に在るものは本殿にして方五間半ばかり、佛殿造り二重屋根左右の破風板は金の向龍、枇杷板は牡丹其下に双頭の犀を刻せり、内扉は常に鎖して人に見せしめず、其内は壯嚴赫灼として大猷公の靈牌を安置すと聞けり、是より唐門を出で右の方塀重門を入り更に包裏門を出で、石階を登れば皇嘉門あり、是は朝廷より賜はりし門なりといふ其形他の諸門と異なり俗に龍宮造りと唱へ樓腹は白堊を以て塗り内外の桁は堆朱に地紋を刻り天井には天女の像を畫けり、門内に二條の石階あり左は寶庫に至り右は奥の院に至るべし、奥の院拜殿の中央には天蓋を掲げて下に高座を据ゑ左右に厨子入の佛像を安置す、又殿後に石垣を築き正面に唐銅鑄抜の堅門を設け其の兩袖より圓筒の石柵を廻らし中央に黃銅製の寶塔を安す、高さ一丈許り基石は八角五級なり都て奥院の構造は東照宮の奥宮と

殊なる所なしといふ、以上拜覽し了りたる後は更に近傍二三の瀑布及び勝地に案内せん
霧降の瀑 は神橋假橋を渡りて右折し日光小學校の前を過ぎ新道を進みて御料地の右を過り假橋より一里半にして山頂平垣の所に達す此所に望瀧臺ありて瀧の全形を望むべし夫より又九々折なる嶮隘の小道を二三町下れば瀧壺に至る、瀧は二級に飛下す上級を一の瀧と云ひ下級を二の瀧といふ、一の瀧は高さ十三四丈幅三四間、二の瀧は高さ十二三丈幅十間許り、其の形勢二の瀧の半ばより二流に分れ突起せる岩角に觸れ、激して飛散す、水氣煙霧の如く溪口に滿ち殆んど咫尺を辨せず遊客爲めに衣を濕す依て霧降の名あり
裏見の瀧 は日光町より西南一里十五町、霧降とは全く正反對の方位に在り、假橋より大谷川に沿ふて上り田母澤橋を渡りて蓮華石を過ぎ大日堂の近傍を過り、中禪寺道より左に岐れ新道を行くと凡そ二十餘町に

して荒澤の麓一茶亭のある所に達す、この茶亭より道を左に取り崎嶇たる逕路を躋り更らに溪に沿ふて下れば裏見の瀧は正面に懸り左右また小瀧を懸けたり、橋の左より更に峻岩を踏み小瀧を涉りて迂回すれば瀧の裏面に至るべし、行人皆な茲に來りて瀑水を其の背面より見るを常とす故に裏見の名あり、瀑布の落つる所の岩上に不動の石像を安置し落口の傍らに不動堂あり、今は堂宇太く頽廢し其本尊を失ひて空堂となれり慈觀の瀧 は裏見の瀧の上流に在り、荒澤の茶亭より志津道を廿町許り行きて右へ分れ爪先上りに十二三町登り又右の方へ二三町降れば瀧の在る所に達すべし、瀧の上は一大平石斜面を爲し其幅十五六間長さ五六十間、而して瀧の落口は屋簷の如く突出て出入なし瀑水は上の平石を流れ來り鼻端の凹所より數派に分れて飛下す、其水湊りて小潭をなし更に二派に分れて懸崖を下ると三丈餘り奇觀名狀すべからず、此の瀧は慈觀僧正の發見する所なりとて其名を慈觀といふ、此の所も亦楓葉の勝地たり

り秋季に至る者必ず一遊すべし

華嚴の瀧 はむかし江尻瀧、又八鹽瀧といふ、日光町より中禪寺道を進み清瀧觀音堂の傍らを過ぎ牛王阪を登り行くと十町許りにして馬返村に達す、又行くと數町道は漸々に上りて屢々危橋を渡り深澤の茶屋を過れば山路ますます峻峻、其最も峻しき所を劔ヶ峯といふ、是より北に般若の瀧、方等の瀧あり劔ヶ峯より北に進み漸やく峻阪を過ぐれば大平に出で是より行くと四五町忽ち左に折れて小徑を辿り行けば水聲滔々として遠雷を聞くが如きあり是れ即ち華嚴の瀧なり、對岸高き所に一字の茶亭あり瀑に對して床几を設けて觀覽者の休憩に便す、此の瀑布は中禪寺湖より落ち大谷川の水源となれるものにして直下七十五丈、幅八間其の下は人跡の能く到るところにあらず、實に間東隨一の大瀑布と稱す又此の邊に岩燕と稱ふる小鳥あり水煙を破りて翱翔す其の數幾百なるを知らず此鳥獨り此の近傍にのみ棲息すといふ

中禪寺湖 又南湖と云ひ幸の湖とも稱す、東西の長さ三里、南北一里餘、周圍七里三十二町と稱す、湖岸には喬木修竹、蕪藪として繁茂し、湖水を蔽ふて影を水底に浸す、水は極めて清冷にして細波漱澗汀を洗ひ艇を放つて一葦の行く所に任せば歌之濱、寺崎、日輪寺舊跡、上野島、千手が崎、紅葉浦、葛蒲沼等の名所を觀るべく、又遠近の翠巒倒さまに青鏡の面に映ずるあり、風光明媚にして心目ともに一新するを覺ゆ、湖畔に中宮祠及び社務所あり又泉屋、蔦屋、米屋、中村屋等數軒の宿屋あり、毎年八月五日より七日間二荒山神社登拜の神事を行ふに際しては此の地の繁昌大方ならず

湯本温泉 之を中禪寺温泉といふ、舊記に天文十三年鎌倉公方入浴云々とあれば其の以前より開けたるものなるべし又正保年度前までは御所湯、姥湯、三間湯のみにて當時女人牛馬結界の場所なれば浴客も多からざりしに維新以來其の禁を解かれてより運輸の便と共に開けて浴舎の營

繕新築日に加はり二層或は三層の高樓を構へ大屋支店を分ちて客室を設く其の繁昌又昔日の比にあらす近來貴顯紳士及び外國人等杖を曳く者多し、里程は日光町より六里十一町（中宮祠湖畔より三里と云へど二里強に過ぎず）地形は東西北の三面に山を遶らし南の一方は湯の湖の青くして藍を流せるが如きを望み、海面を抽と四千尺餘、氣候は土用中晝は凡る八十度朝夕は七十度を昇降し眞に暑さ知らずの土地なり人家三十戸許り浦口は東の山麓に散在して浴場十餘槽あり皆硫黃泉に屬す、温泉宿は吉見屋善右衛門、山田屋善六、松本半才紋其他數戸にして就中山田屋、吉見屋の家居は最も手廣にして内湯の設けあり、此地冬春の季は雪深く寒威烈しきに依り陰曆四月八日初めて浴舎を開き九月八日を期とし室を閉ちて下山するを例とす、又前面の湯の湖は東西廿五六町南北十五町餘水平かにして疊を敷きしに異ならず之に小舟を泛べ網を打たせて湯治中の徒然を慰むべし

湯瀧 ゆたぎ は湯の湖より落來り急斜なる岩面を飛下すると四十五六丈幅十五六間、其の水勢岩石を穿ちて響き雷の如く白泡四方に飛散して崖樹動搖せり復軒大槻氏の碑文に曰く、其麗似霧降一其大有華嚴雄一若龍頭觀背一瞠乎其下一矣と以て其の壯觀を知るべし

足尾銅山 あしお は日光町を距る西南七里餘、足尾郷大字御子内字間藤に在り、銅山は足尾郷の中央に位し周圍五六里に亘り、最高所を備前楯と云ひ海面を抜くと四千三百四十尺、金山樹木を生せず唯だ焼石の如くなる岩石のみ累々として皮相を爲せり、此山は方今東京府平民古川市兵衛氏の借區地に係り、日々發掘する所の鑛石三萬貫餘、之を荒銅に製し六千貫目餘を得るといふ、其の坑道は本口、二番口、鷹の巢、有木の四大坑にして就中有木坑を以て最とす、坑道の廣さは高さ六七尺、幅六尺を普通とし獨り有木坑は幅一丈ばかりあり、何れも坑内に一條の鐵路を敷きて鑛石運搬の便に供するが中にも有木坑は二條の鐵路を敷きて往復自在

ならしむ、坑道の深さ長きは千間、短きは三四尺にして内に入れれば更に數百の小坑ありて其狀蛛網に異ならず、鑛業の盛んなる實に東山道に冠たる者と謂ふべし

庚申山 かうしんざん は足尾郷北方の山奥に在り、日光町より九里半と云ふ其順路は日光町より足尾町に出で上州街道を五六町行けば路傍に一基の華表あり其左に高さ一丈二三尺もある自然石に庚申山の三字を鐫て建たるを見るべし、又其右に庚申山表口と票せる小なる角石あり此の華表より庚申山の麓まで一百十四町、一町目毎に石標を建て、參詣者の先導に供す、皆な東京講中の建つる所なり、一丁目より十二三町の坂路を登り更に十町ばかり下れば銀山平といふ所に至る即ち往時銀鑛を採掘せし所なり、夫より六十三町目までは溪水に浴ふて爪上りに登る道なれば危険の恐れなし六十三町目より數十町の間は危険なる山の中腹を昇降するを以て一步を過たば千仞の溪間に墜落すべし、八十五六町目以上は始終登りく

て山麓に達す、麓の東寄に別當の坊あり喫飯宿泊共に客の需めに應ず、此坊より奥の院まで一里十餘町といふ、山中には奇岩怪石或は屹立し或は偃臥し神工鬼鑿、筆の能く盡す所にあらず就中胎内竈、梵字石、蠟燭岩の如きは最も奇觀なり

諸是にてあらず日光及び近傍の案内を畢りたれば再び東北の本線に立戻り古田驛(宇都宮の次驛)より案内を始むべし

●古田停車場 (栃木縣下野國鹽谷郡田原村大字古田)

古田驛は宇都宮停車場を距る六哩三十八鎖の所に在り、陸羽街道より西方拾町餘の村落にして今は田原村に屬せり、是より西鬼怒川の鐵橋(延長八百三十呎)及び東鬼怒川の鐵橋(延長一千四百三十五呎)を渡りて長久保停車場に達す

●長久保停車場 (栃木縣下野國鹽谷郡長久保村)

長久保驛は長久保新田に在り、今は押上、蒲須坂新田、富野岡新田等と

共に氏家町に屬せり、氏家町は鹽谷郡中喜連川に亞ぐの繁昌地にして戸數一千二百餘、人口四千九百三十三、市街は陸羽街道に屬し停車場を距る東南里許の所に在り、又喜連川町は其東北方に在り停車場を距る二里餘氏家を経て到るべし

●矢板停車場 (栃木縣下野國鹽谷郡矢板村)

矢板驛は矢板村字矢板に在り、此村戸數一千三百餘、人口五千二百餘、鹽谷郡中の大村たり、村内字木幡に木幡神社あり、祭神は天忍穗耳尊にして山城宇治許波多神社を奉祀すといふ、又那須郡佐久山町へ里程一里半、是より針生山の小隧道を過ぎ帯川の鐵橋を渡りて列車は西那須野停車場に達す

●西那須野停車場 (栃木縣下野國那須郡那須村字永田)

西那須野村は所謂舊那須野ヶ原の中に在る一村落なり、那須野は大田原の邊より岩代の州界まで二ヶ所に分れ、東西各六里、南北各十里の曠原

なりしが養和保元より天文の時に至り所謂那須七騎等の土豪此間に割據し、漸々開墾して部落を成し、那須野と稱する者は往昔十の六を存するに過ぎず、而して今代に至り故三島通庸氏本縣に令たるに及び奮つて開墾に従事し、又百難を排除して新道を開墾せし以來朝野力を戮せて開墾に従事し草萊變じて禾黍となり、又昔日の荒寥を見る能はざるに至れり、西那須野村は戸數四百許り、人口一千二百八十六、大田原驛を距る廿餘町の間在り

那須國造の碑 は大田原驛の東南三里餘、湯津上村大字湯津上（昔しは湯都神と云へり）に在り、按ずるに 持統天皇の三年草壁皇子那須郡に崩御あらせたまふや朝鮮の歸化人廣津君の孫意斯磨といふ人上を敬するの志厚く、那須湯都神郷に碑を建つ高さ廿四尺餘、當時日本年號の絶えたるにや唐則天后一の宮中宗皇帝の年號即ち永昌元年己丑を用ひたり、此碑實に人皇四十二代文武四年庚子の建立に係る、是より數百年雨露に

侵され皆蒸して文字明らかならず、何者の碑たるを知る者なかりしに延寶四丙辰年五月那須重貞之を發見し國造の碑なることを知りて水戸黃門光國卿に謀りしかば卿其頽敗を憂ひ元祿四年受碑堂を建築せらる云々、皇子草壁は天武天皇の御子にして那須國造に任じ東國に下されしなり、今其の碑文を左に示す、圈點を附するは文義解せざるを示すなり

永昌元年己丑四月飛鳥淨御原大宮那須國造追大壹那須宣事提評督被賜歲次三庚子年正月二壬子日辰節彌故意斯磨等立碑銘德云爾仰惟殞公廣氏尊胤國家棟梁一世之中重被貳照一命之期連見再甦一碎骨祝隨豈報三前思一是以曾子之家无有嬌子仲尼之門无有罵者一孝行之子不改其語一銘夏楚心澄神照乾六月童子意香助坤作徒之大合言喻字故无翼飛无根更固

鹽原温泉 是西那須停車場を距る西北五里、鹽谷郡の北端鹽原山の麓に在り、此地日本鐵道線の開通せられしより頓に其名を顯はし、貴顯紳

士の別業など多く造られ、夏日は浴客群集し其の繁昌伊香保、磯部をも凌駕せんと欲す、温泉場は上中下鹽原及び湯本鹽原の四ヶ所に分れ、就中中下鹽原に最も多く其地の小名を大網、福渡戸、鹽竈、鹽の湯、畑下戸、門前、古町といふ、先づ其の順路を記載せんに停車場より三島村を経て三里餘にして關谷村に至る、是より屈曲して山腰を施り屏風に似たる絶壁の下を過り、或は溪流を送り或は瀑布を迎ふるなど風物一町毎に變るを以て途に飽くとなく漸くにして大網に近づけば途に見返橋あり、長さ廿間橋下に見返りの瀧あり宛も水晶の簾を懸けたるが如し、橋を渡りて坂を下れば大網に達す○大網は箒根村大字關谷に在り箒川の北岸巨大なる巖石の間より湧出するを以て別に浴槽を設けず自ら温湯の陷凹所に溜溜するを以て入浴の用に供す、土地は左右に岩石突起するを以て光線の直射を遮り風は箒川の流れに隨ひ西より東に吹くを多しとす温泉宿は佐藤久作の二戸あるのみ、茲を過ぎて猶ほ行くと八町許りにして洞門あり

り長さ十七間其の入口に架するを寒冷橋といふ、此の上流に區々龍瀧といふ瀑布あり魚鱗皆な此に至り飛瀑の勢ひに壓せられ登るとあたはず又其上流に稚兒ヶ淵、布の瀧等ありて甚だ壯觀なり、諸洞門を入り十町餘にして福渡戸に達す○福渡戸は鹽原村大字下鹽原に屬し大網より西二十餘町の所に在り海面を抜くと一千百五十尺、東北に白倉山の峯巒を負ひ西南、箒川の流を隔て、鳥居戸前山の諸岳を望む、此地戸數は二十戸許り内温泉宿十一戸軒を連ねて本道の兩側に在り即ち満壽屋（臼井吉右衛門）松屋（田代尙吉）を以て最とす其他玉屋（田代辨次）丸屋（大塚倉吉）叶屋（磯兵吾）磯屋（磯長作）山形屋（磯兵三郎）吉野屋（磯平吉）阪口屋（田代金平）槇野屋（田代米平）升屋（未詳）等にして何れも二層三層の樓を構ふ、温泉は箒川の沿岸なる岩窟の間より湧出するものを岩の湯と云ひ、其他不動の湯、冷の湯、藥研の湯等あり各浴舎は此の温泉を樋にて導き舎内に内湯の設けあり、茲を出で、行くと一二町にして右に天狗岩を望

み、左に野立石を觀るべし、野立石は高さ二丈餘、面積百坪許り此に鼓
 簧張棄床几を設けて客を慰はしむ箒川の流れば岩下に漲りて白沫を飛し
 眼界豁然風景絶佳なり、是より行く數歩にして一樓屋の見ゆるは品川子
 爵の別莊念佛庵なり尙ほ數歩を進むれば畑下戸に達す○畑下戸は鹽竈
 門前の間に在りて本道より南に位せる低地なり、西に丘阜を負ひ東に箒
 川の溪流を擁し、川の東岸は鹽湯の部内にして北岸は樹形の河原なり、
 南は富士喜十六の峰巒を望み、兩山の間に瀑布あり吉井瀧といふ、前の
 宮内次官吉井伯爵深く愛して名けたり、直下十七八丈ばかり岩を傳ひ屈
 曲して落來り頗る奇觀を呈す傍らに吉井伯の別業あり、温泉は西端岡阜
 の下に在る岩窟より湧出し、河原の湯、鳩の湯、貉の湯、本の湯、冷の湯
 (中の湯ともいふ)の五あり、泉質は何れも弱鹽類泉にして無色透明無臭
 無味、温度は百二十度乃至百三十五度を保つ、温泉宿は佐野屋(君島豐
 平)紙屋(阪内仁三郎)大和屋(阪内平六)伊勢屋(阪内榮三郎)井桁屋(阪内

重太)の五軒あり、此所を斜めに見て過れば旒店廿戸ばかり檐を並べて
 一市街を爲す所に出づ即ち門前なり○門前は地形東北に山嶽を負ひ西
 南は箒川に臨み土地平坦にして空氣常に乾燥す、泉源五ヶ所あり河原湯
 及び下の湯は東方田園の間に湧出し、自樂坊及び寺の湯は妙雲寺東山の
 下に出で三島の湯は本道の東北より湧出す、温泉宿は何れも二層三層の
 高樓を築き互ひに繁昌を競ふが中にも宮田屋(深尾七三郎)を最とし松本
 屋(渡邊半三郎)山口屋(櫻井千代松)之に次ぎ福田屋(手塚子之吉)疊屋
 (渡邊長吉)關東屋(渡邊久吾)又之に亞ぐ是より町續きの一橋を渡れば古
 町なり○古町は海面を抜くと一千四百二十尺、地形東北に大久保挾間
 の峯巒巍峨として聳え西南倉下喜十六の山岳を望む、溪水あり流れて箒
 川に入る之を平井澤といふ風光明媚の地なり温泉は箒川の東岸より湧出
 し不動の湯、瀧の湯、中の湯、御所の湯、中山の湯の五ヶ所あり、温水宿は
 此地に最も多くして其數十二軒、就中上の會津屋(倉島峯吉)米屋(細井

久平(萬屋(倉島峯治)等有名なり其他中の會津屋(君島峯吉)永樂屋(君島豐三郎)稻屋(君島兼吉)那須屋(渡邊宇太吉)常陸屋(君島勝馬)鍛冶屋(君島兵太)角屋(君島由三郎)明賀屋(君島捨吉)鉾子屋(君島直吉)等あり楓川樓(松井長兵衛)は料理屋兼業にて家廣く眺望に富む、此處より會津道を行くと六七町にして壯麗なる樓臺を小丘の上に望む、是れ眞田幸民氏の別業なり、是より少しく離れ八幡神社の境内に二株の老杉あり各々周圍四丈に過ぎ枝垂れて地を掠めんとし其幾百年を経たるを知らず土人之を倒杉といふ是より後戻りして鹽釜に至り鹽湧橋を渡りて斜に溪路を行くと十町許りにして鹽の湯に出づ○鹽の湯は土地高燥にして海面を抜くと一千六百十尺、西は鹽湯山脈連亘し東は前黒山横はり四面山を以てめぐらし宛も壘底の如し中に一の溪流あり鹿俣川といふ温泉の湧出する所三ヶ所あり冷の湯、中の湯、岩の湯といふ、浴舎は明賀屋(君島五郎)玉屋(君島淺吉)柏屋(阪内直吉)の三戸あり就中明賀屋は家屋宏壯にして浴

客五百人を容るゝに足る、鹿俣川に浴ふて廿町許りも上れば飛泉の絶壁に懸るを見る其一を雷霆の瀧、其二を霹靂の瀧、其三を咆哮の瀧、其四を素練の瀧といふ、如何なる人の名づけしものなるや其名の唐めきてむつかしげなる笑ふに堪へたり、又畑下より徑路を登ると八町許にして須卷に至る○須卷は其面積甚だ狭く、南に湯上山を望み、北に須卷澤を瞰む、温泉は湯上山中諸所の岩窟より湧出し流れて六條の飛泉となる故に一名瀧の湯といふ、温泉宿は根本屋一戸あるのみ二層樓にして湯瀧室浴室を設く名物の團子あり風味賞すべし又古町より西二里の山中に一温泉場あり之を新湯といふ○新湯は南方に高原山を控へ東方は富士山に面す、此山の西麓に方一町餘の場所ありて一圓硫黄を含蓄し總て灰白色を帯び草木共に生せず、其間諸所に空洞ありて各熱泉を湧出す温泉宿は之を樋にて導き各々内湯を設く其重なるは藤屋(渡邊伊三郎)大黒屋(大塚金藏)君島屋(君島久伸)等にして其他下藤屋、鶴屋、葛屋、龜屋、菊屋等

あり皆客室數十を有す

●黒磯停車場 (栃木縣下野國那須郡黒磯村)

黒磯驛も亦那須野ヶ原の一部にして今は東那須野村に屬し那珂川の沿岸に位す、素より曠原中の一部落にして一の見るべきものなし、唯那須七湯の通路に當るを以て四方より來る浴客は皆な此の停車場に降り車馬の來往頗る頻繁を極む、是より舊陸羽街道の鍋掛へ壹里、越堀へ壹里廿町にて至るべし

那須七湯 は下野國那須郡那須ヶ嶽の四周に在りて其の温泉場を湯本、高雄服、辨天、北、大丸、三斗小屋、板室の七ヶ所とす故に七湯といふ、浴客は先づ黒磯停車場を降り北の方數町に至り那珂川の假橋を渡り左折すれば那須嶽は前面に高く聳えて浴客を招くに似たり、左右は那須野ヶ原にして縁野遠く連なる、是より松子、田代、廣谷地を経て喰初佛に至る、此の喰初佛の本尊は日蓮大師の眞影を自然石に彫たるものにて參詣

人常に絶えず此邊より硫氣やうやく鼻を襲ふを以て温泉に近づくを知るべし、湯川を渡り羊腸たる坂路を登り廣谷地を距ると二里にして那須湯本に達す○湯本 は那須嶽の半腹に位し海面を抜くと三千尺 炎暑の期節甚だ短くして艶陽の時期頗る長し故に避暑に適す、温泉は那須嶽の南麓に在りて湯川の東岸二ヶ所より湧出す一を鹿の湯と云ひ一を行人湯といふ、泉質は酸性泉にして無色透明、多く硫化水素臭を帯び強酸性鐵味を有す其反應は酸性にして百七十二度の温度を保つ、此地の戸數は三十戸許り其中温泉宿は小松屋、河内屋、和泉屋、中藤屋、松川屋、松屋、橘屋、清水屋の八戸あり、何れも二層三層の高樓を構へ各々繁昌を競へり、其中内湯ある者は小松屋、河内屋、松川屋等にして何れも湯口より樋にて導くなり、旅籠飯料等は物價の高低に依り一定しがたしと雖も日光、鹽原等に比すれば頗る廉なり中には十五錢内外にて宿泊せしむる家あり、是より十二町にして高尾股温泉に至る○高尾股 は湯本地内に屬し、

湯本より一層高き所に在るを以て眺望も亦佳なり、東は原野廣く守ツム
 シガ平を負ひ西は高雄股川に沿ふ、温泉は窮谷の岩間より湧出す浴舎は
 僅かに一戸あるのみ、歸途を榛莽の間に取り温泉神社に賽すべし○温泉
 神社 舒明天皇の御宇に狩野三郎といふ者鹿を狩んとて此地に來り忽ち
 白鹿に行逢しかば射取んとせしに荆の中に隠れたり、之を尋ねんとて深
 山に入りしに忽然白衣の老人顯れ出で吾は温泉の靈神なり此深谷に萬病
 を愈す靈泉あれば早く草創して萬民を救ふべしと告げて山に飛去りたま
 ふ、有難しと伏拜めば朦朧たる雲霧晴れ彼の白鹿温泉に浸り居るを見た
 り悦びて矢を好しと引かため兵を放てば思ふ矢つばを射止めぬ走り
 寄りて見れば常の鹿とは異れり其後温泉を開き温泉社を建立し彼の白鹿
 の角を納め奉つれり云々、今尙ほ神寶として之を藏せり黃門光國卿之を
 萬字の角と名けたまひたりと形萬字に似たればなり、又神社の寶藏には
 那須與一の矢の根數種を藏せりと、神社を拜し石階を降れば右に芭蕉翁

の句「湯をむす布誓もおなじ石清水」を自然石に刻せり又降る數十歩左
 に見立大明神あり、是より左折して峻坂を降れば復芭蕉翁の句を石に刻
 す「石の香や夏草あをく露あつし」是が有名なる殺生石の入口にして賽
 の河原を過ぎ教轉地獄を眺めて殺生石のある所に至る○殺生石 は砒臭
 烈しく鼻を襲きて居るに堪へざらしむ、此石の起りを原ぬるに往古某帝
 の寵妃玉藻前白面金毛九尾の老狐なりしに其生体を看破られ遂に逐れて
 那須野に飛來り近里の人民を害ふに依り三浦助義純、上總介廣常勅を奉
 じて那須野に下り之を退治せしに老狐は大石と化し以來飛鳥走獸之に觸
 れて死するもの數を知らず依て之を殺生石といふ、能登國惣持寺の住僧
 峨山和尚の高弟源翁和尚法力を以て之を三つに碎き遂に化生を退治せり
 云々、是は昔しの造り物語りにして取るに足らず、殺生石は砒石或は礬
 石と稱ふる劇毒質の礦物にて多くは礬黃及び酸素を化合し他の諸金屬と
 混和して生ず、其質甚だ脆く熱すれば溶解せずして酸素と化合し白煙と

なりて蒸發し葱蒜の如き臭氣を放つ、此の白煙は亞硫酸瓦斯なり、是は人類其他動物に害あると最も猛烈なれば今にても此の害に逢ふ者あり見物人は用心すべし砒石の中毒は那須温泉に浴して奇効ありといふ、湯本より途を北に取り進むと三十町にして辨天の温泉あり(辨天、大丸、北、三斗小屋等の温泉は其案内を略す)

●黒田原停車場 (栃木縣下野國那須郡那須村字黒田原)

黒田原も亦那須曠原中の一驛にして那須村に屬し近頃新たに開きし所なり、近傍觀るべきもの東北二里餘に芦野古城址あり

芦野古城址 は舊陸羽街道中の一驛芦野町に在り、傳へ聞く豊城入彦命四世の孫奈良別命那須國造たりしより子孫相繼で此に住す、即ち芦野氏なり、其後四郎太夫某に至り那須資忠の次子資方を養ふて家を續かしむ當時國造の世を去ると已に遠く、那須黨の勢熾んなるを以て遂に之と交親し世々城に居れりといふ

●豊原停車場 (栃木縣下野國那須郡豊原村字水原)

豊原驛は那須曠原の北端に位し那須村の一部たり、磐城國西白河郡と相接し、實に栃木福島の縣界を爲す、是より東一里許り舊陸羽街道の寄居と白坂の間に二柱の神あり共に堺明神と云ふ、之を以て磐城下毛の境界を爲す

●白河停車場 (福島縣磐城國西白河郡白河町字舊郭内)

○白河町 は阿部豊後守の舊城邑たりしが戊辰の役戰爭數日終に兵火に罹り舉城灰燼に歸せり、此地往昔笹原の莊と云ひ結城親朝之に築きて小峯城と名く、其後丹羽氏の采邑となり大に城郭を修理し國道の要阨に當る、尋で蒲生氏に移り阿部氏に至るまで其間主を更ふる者數家、該城線らずに逢隈川を以てし州内諸山皆な環拱擁立して山水明媚の地なり、是より西北は若松に通じ東南は常陸に達す、市の廣さ東西二十五町餘、南北十二町餘、市坊二十三、戸數三千餘、人口壹萬一千二百七十七、市に

區裁判所、郵便電信局、警察署及び西白河郡役所あり、物産は生絲、茶、馬、藥種類を以て最とす旅舎は柳屋傳三、内池屋健藏(白河本町)いさみや祐八(停車場前)等有名なり、是より近傍の勝地を案内すべし

南湖 是白河城の南半里許りに在り、文化中白河城主松平定信公(樂翁公)の浚開する所にして初め關の湖水又は大沼と云へり、公深く其の風致を愛し命くるに雅名を以てし分つて十七勝と爲す、則ち關湖、共樂亭、鏡山、眞萩浦、錦岡、松虫原、常盤清水、松風里、月待山、月見浦、下根島、御影島、千歲堤、小鹿山、有明崎、八聲村、千代松原等にして十七勝は國風を以て名け、別に十六景を設けて漢名を附し、一は和歌を以て題し一は漢詩を以て題し其詩歌を石に刻して湖畔に建つ、別に一碑あり南湖の記を勒す、湖の大さ周圍廿町餘に過ぎず湖に枕むの山亦大ならずと雖ども山明水媚實に當年の様を追想するに足る、此地今は公園となれり

感忠銘 南湖の東に搦山と云ふあり即ち結城氏の城墟なり、元享建武

の亂に勤王を主張せし結城氏の忠魂を慰せんが爲め、白川樂翁公儒員廣瀨典に命じ其事を記して之を城墟の斷壁に刻せしむ名けて感忠銘と云ふ、碑の高さ一丈八尺横九尺、其文に曰く

蔚然深秀、在我白河東、者結城氏墟也、我望之而有感焉、元享建武間、士氣衰薄、天下擾々、視利避就、獨宗廣親光、忠烈彌々、憤發唱義、欲率天下而興之、不幸弗克以殞身、然猶東川十良知、戴南朝之天、者、實亦其力也、一時忠烈補公之外無能稱焉、而今吾民鮮知、其爲州人、奚以興于餘風、內山重濃家、於墟下捐財、爲予勒銘表而出之、公嘉斯舉、題賜三大字、以刻上方、嗚呼二子之忠魂數世之後得此偉標焉、其必含笑於地下、吾輩亦與有榮也、銘曰
嗚乎此山、維石嶸々、溪風肅然、劍佩夜還、踪蹟不刊、輝映千年、民莫自棄、國能生賢、
文化四年秋九月

廣瀨典 謹識

廣瀨典 謹識

又是より南壹里許りに關山といふ高山あり、此地は天正十五年二月十六日佐竹義重、伊達政宗と決戦したる古戰場なり、又關山の絶頂に満願寺といふ古刹あり天平二年の創建にして聖武帝勅願所の扁額を掲げ其他古物を多く存せり

白川の關址 みやこをば霞と共に立ちしかと秋風を吹く白川の關」と

能因法師の詠りし白川の關は關山の南旗宿の内に在り、樂翁公の建られし碑ありて其の遺蹟を存す、此處は左右嶋崖にして中に一條の通路あり、當時北夷の内地に入るを防がん爲め國司などの構へし關所にて朝廷より置たるにはあらざるべしとなり、是より道を轉じて北に向ひ矢吹停車場に至るの途中轉寢の森、人なつかし山等の舊蹟あり旅客若し序あらば之を探るべし

甲子温泉　は西白河郡の西端甲子山の半腹に位し有名なる阿武隈川の上流に在りて白河を距る五里廿五町、其地は下野の那須三斗小屋温泉と相距る直徑二里半に過ぎず、先づ白河を距る二里折口といふ所より阪路漸やく峻を加へ、又二里にして高清水に至る、是より一里廿五町にして温泉場に達す土地高燥にして空氣清冷、大倉山、庭鳥山、朝日嶽等三方に連亘し阿武隈川の源流は西南より來りて温泉場の前を貫流す、温泉は微亞兒加里性にして温度百二十度を保ち湧口四ヶ所ありて之を本湯、新

湯、湯神の湯、瀧の湯といふ、温泉宿は菊地元壽の二戸なれども壽康樓と云へる三層の高樓を構へ、道を隔て、二階建の別荘あり客室の建坪都て二百五十坪許り、宏壯にして浴客數百人を宿泊せしむべし、樂翁公曾て此山に遊び風光の絶奇なるを賞す其文は載せて關の秋風にあり

湯本温泉　は白河を距る西北九里、岩瀨郡湯本村に在り布引山と白河布引との間に挾まり土地靜雅風色明媚にして晩春には桃李節を同らして開き鶯鶯一時に鳴く、温泉は鹽類泉にして温度百十度内外を保つ、村の中央に巨大なる浴槽を設けて共同浴場とし、浴舎は樋にて原泉を導き皆な内湯の設けあり、湯口屋、星野屋、角屋等を最とし其他三戸の浴舎あり、皆な二階造りの大厦にして客室數十を有す、浴舎は専ら費用の低廉を測り客より旅籠にて止宿したしと請ふも應せず豫じめ席料を定め蒲團を貸し米を買はしめ薪水の勞を取りて報酬を受くるを常とす

●矢吹停車場（福島縣磐城國西白河郡矢吹村）

矢吹村は白河を去る九哩二十五鎖の所に在り、戸數五百二十餘、人口二千〇三十八岩代國岩瀬郡に接する一村落到して近傍見るべきの勝地なれば直ちに須賀川驛に到るべし

●須賀川停車場 (福島縣岩代國岩瀬郡須賀川村)

○須賀川驛 是陸羽街道の一驛にして岩瀬郡の東部に位し人家稠密車馬輻輳、福島以南第一の繁昌地なり、戸數三千餘、人口九千七百十八を有し驛に岩瀬郡役所、病院、産馬會社等あり物産は生絲、繭、藍、煙草等を最とし紙類、穀類陶器等之に亞ぐ此地北は釋迦堂川の流を帯ひ西は西川原に、東は東原に連なり平野に接して四通の便あり、この地三春町を距る七里許り、所謂る三春馬は三春地方の産なり、然れども此の地より産する者も亦三春馬といふ、驛東南鏡田村の西に鏡沼の古蹟あり就て探るべし、又此地にて旅舎の名高きは大和屋藤兵衛なり

●郡山停車場 (福島縣岩代國安積郡郡山町)

○郡山町 是安積郡中第一の名邑にして市の廣袤東西七町、南北十三町、市坊十一、戸數二千七百餘、人口八千〇九十六を有し、人戸櫛比し警察署、郵便電信局及び農學校等あり、安積郡役所は驛の西隣桑野村開成山の上に在り、先年噴火せし磐梯山は此地の西北に聳え相距る八里許り驛の西に長者邸と稱する古蹟あり、又驛の北の外れに安積國造神社あり、按ずるに安積の國造は遠祖を比止禰命といふ、其裔神官となりて世々之を祭れり、幕府の儒者安積良齋はこの家より出たり、又重なる旅舎は海老屋、川崎屋、菊屋の三戸とす

安積山 是郡山の西三里許りに屹立する高山なり、又の名を額取山といふ、往昔葛城王を此國に遣はされけるに、國の神のまうけ疎かなりとて王の御氣色悪しかりしを采女なる女盃とりあげ「あさか山影さへ見ゆる山の井のあさき心はわが思はなくに」と詠みて酒をすゝめしかは王の心和ぎたりとなり、此山は郡山の次驛日和田より行く道あり

●本宮停車場 (福島縣岩代國安達郡本宮町)

○本宮 は安達郡に於て二本松に亞ぐの名邑たり、市の廣袤東西二町餘、南北十三町餘、市坊七、人口六千九百九十五を有す、公立病院あり、牧牛共立會社あり、旅人宿は停車場前境屋、越後屋、水戸屋等名あり、は東阿武隈川を帶び、西菅山花山等の山脈を負ふ、山頂に安達太郎神祠あり森林鬱蒼風色愛すへし
熱海温泉 は本宮停車場より西方三里半安達郡高玉村に在り、この地片倉山と吉丸山の山間に位し氣候清涼にして頗る避暑に適す、泉質は鹽類泉にして温度八十度を保ち、疥癬、眼病、黴毒、痔疾其他あらゆる皮膚病に効ありといふ

●二本松停車場 (福島縣岩代國安達郡二本松町)

○二本松町 は丹羽氏の舊城邑にして戊辰の戰地たり、城址に製絲場を設け、工女三百名餘を使役して盛んに蠶絲を製出す、この製絲場は去

る明治六年始めて佐野某の起せしものにて、器械は上州富岡の製絲場に
ならひ更に改良を加へ、安達太耶山の麓より四里許り掛樋にて水を通じ、
水車にて器械を運轉し機關の宏壯人目を驚かすに足れり、地は東西十六
町餘、南北十町餘、市坊十三より成り戸數二千五百餘、人口八千四百十
餘を有す、安達郡役所あり、郵便電信局あり、講習學校あり旅舎は大和
屋宗介、きくの屋の二戸有名なり、市中一小山を以て街道を遮る之を
觀音山といふ、山脈西に延びて城山となる、此地より福島へ五里十二町
餘、若松へ十六里十五町餘
安達ヶ原古蹟 は二本松驛を距る數町、阿武隈川を隔て、東の沿岸に
在り、平兼盛の「みちのくの安達ヶ原の黒塚に鬼こもれりと聞くはま
ことか」と咏せしは此所なり、此處には數多の巖石むら立ち其下に岩窟
あり、昔し鬼の住めるといふは此の岩窟なりと、石に南無觀世音菩薩、
南無阿彌陀佛など刻つけあり、是は享保の頃新たに造りしものとす。

近傍觀音寺といふ寺に鬼の釜、又人を殺たる刀などを存しあり何人のつくり設けしものによ、安達ヶ原は大方田畑に開かれ古しへの名残もなし唯た黒塚の古蹟あるのみ

嶽の湯温泉 は二本松を距る西方半里許り永田村に在り、土地高燥にして空氣清流、最も夏時の遊浴に適す、泉質は硫黄泉にして温度百十度を保ち風濕、痔疾、疥癬、雁瘡、火傷其他に効驗ありといふ

安達太郎山 又の名二本松岳といふ、安達太郎山と訓むは誤れり、此地有名の高山にして海面を抜く三千尺、二本松の西方三里に直立す、満山岩石峭立して古松楓樹其間に繁茂し、溪水之を環り潺湲聲あり、山中に前記の嶽の温泉あり、風景頗る佳なるを以て杖を曳くもの多く、殊に霜葉の頃を以て遊人多しと爲す

●松川停車場 (福島縣岩代國信夫郡松川村)

松川は信夫郡に入り始めての驛なり、戸數七百餘、人口二千五百八十三

を有す、驛に菅神の祠あり文正中筑紫太宰府より勸請する所といふ、社前の飛梅と稱する古木は安永中忍幢律師の植る所なりと、是より延長七百九十二呎の隊道を経て福島に至る

●福島停車場 (福島縣岩代國信夫郡福島町)

○福島町 は板倉氏の舊城市にして今は福島縣廳の所在地なり、城址は街南阿武隈川に枕む、傳へ聞く治承中杉妻行信此に居りしを以て杉妻城と稱し、蒲生氏の時福島と改たむ城主數々換りて一ならず、廢藩置縣の時此地に縣廳を置けり、縣廳は舊城内に在り阿武隈川に枕み結構壯大なり、其他裁判所、信夫郡役所、警察署、郵便電信局、師範學校、及び病院等闕内に散在す、市は東阿武隈川に浴ひ南に須川を帶ひ之に石橋を架し信夫橋といふ、驛の廣袤東西十餘町、南北二十餘町、市坊四十二、戸數五千餘、人口一萬七千七百十五を有し市街の繁昌なる實に東京以北の一都會と爲す、旅亭の名ある者は停車場前上安、松島屋、太田屋及び本通り

の藤金、郡役所前の松葉館、其他手塚屋、鹽六、横山、伊勢屋等なり、又此地より米澤に至る街道あり

信夫文字摺石 福島を去る東南半里許り利根山の麓山口村に在り河原

左大臣は「陸奥の信夫もじずり誰ゆゑに亂れそめにし我ならなくに」と

詠じたり○大森城趾 は街南二十町許り太平寺村の西十五町に在り、天

文中伊達晴宗の築くところ、後蒲生氏郷、上杉景勝等是に居り、今は廢

して田圃となり敗壁殘濠尙ほ存す○信夫山公園 は街北十四丁の所に在

り、黒沼神社招魂社及び觀音堂あり眺望太だ佳なり、此あたりにしのお

草多かりしかと今は少なし、當地名産の信夫文字摺布は此の草にて製す

となり○紅葉山 は驛の東端にあり老樹蒼鬱として堤上に挺で、阿武隈

川の清流其下に在り、之に架するは船橋にして長さ六十餘間、之を渡り

て紅葉山に至る○石那坂古戰場 は驛の東北一里餘伏拜村に在り、文治

の古戰場なり佐藤庄司以下十八士の爲めに二基の碑を建つ

北畠顯家の故蹟 福島驛の東北三里半、伊達郡大石村に靈山と呼ぶ高

山あり又の名を不忘の山といふ、東北伊具宇多二郡に亘り頂まで一里二

十町、直立一千百八十尺なり、山勢嶄峯にして皆な石壁なり老樹蒼鬱清

涼掬すべし、玆に城墟あり南北朝の時北畠顯家陸奥の州守に任じ鎮守府

大將軍を兼ね義良親王を奉じて本州及び出羽を兼知す、親王始め國府に

居り後此城に移る、足利尊氏の反するに及び顯家西國に死し其弟顯信州

の介に任じ白川に鎮す、興國四年足利尊氏の將畠山高國此の山の諸壘を

陥すといふ、山上に顯家の靈社あり宮幣社に列せらる又樂翁公の建つる

碑あり其事を記す

飯阪温泉 は福島町の北二里十町、信夫郡飯坂町に在り、町の廣袤東

西十町南北八町、戸數七百餘あり其内商家二百餘戸、温泉を以て生活す

る者多し、先づ市に入り入口の坂を登れば右に摺上川を隔て、愛宕山を

望み左折右曲して十綱橋の前に至る、橋は柱脚を用ひず銅綱を以て之を

繫ぐ人呼で釣橋と云ふ、此の地温泉の古きは鱒湖、透達の二泉にして共に町の中央に在り、相傳ふ昔し日本武尊東夷征伐の時此地を過らせたまひ御身に恙あらせしかば此の鑛泉に浴し給ひしに立どころに御惱み平愈せる故に地名の鱒湖を其まゝ湯の名に命せられたりと今は浴場の傍らに瑠璃尊を勸請し左側に「あかすして別れし人のすむ里はさばこの見ゆる山のあなたか」と白川樂翁公自筆の古歌を刻せる碑石を建つ、其他十綱町の岸に在るを波古の湯と云ひ、瀧の町に在るを瀧の湯と云ふ、又温泉宿は鱒湖、透達二泉の邊りに在るを和久屋(佐藤うめ)誘引屋(佐藤仁兵衛)榭屋(半田太五右衛門)堀江屋(堀江政藏)網屋(渡邊長太郎)佐藤屋(佐藤繁右衛門)と云ひ瀧の湯近傍に在るを花水館(石堂寛助)角屋(中山辰五郎)榭屋(片岡とし)堀江屋(堀江常右衛門)といふ皆な二層三層の高樓を構へ客室數十を有す然れども家屋は概ね昔し風にして内湯の設けある者少なく浴客をして合浴所に通はしむるを常とす、獨り花水館は家屋

を當世向に新築し空中に架せる如き長廊を煉して客を崖下の内湯に導き、樓上四十疊の室を大廣間とし猶ほ足らざる時は界の張壁を取外して一大會室を造るの準備あり、町内別に料理店、小間物屋、呉服店、寫眞師あり、其他警察署あり、郵便電信局等ありて不便を感ずる事なし

大鳥城趾 飯坂市街の西北に大作山あり是れ所謂大鳥城址なり治承年間佐藤庄司元治の據る所故に之を佐藤の館又は丸山城址ともいふ、元治は湯の庄司と呼び繼信忠信の父なり、右大將頼朝の泰衡を伐つや石那坂に戦ひて死せり、山上に至れば信夫、安達の野歴を指點すべく風色頗る佳なり

湯野村温泉 は伊達郡湯野村に在り摺上川の一帶水を隔て飯阪温泉場と相對して呼べば將に應へんとす、温泉宿は多く摺上川の岸に崖造りの家を構へ、其重なるものを叶屋文作、綿屋常七、河股屋みち、和泉屋いし、松葉屋大次郎と云ふ、温泉の湧口都て三つあり橋本湯、狐湯、切湯

といふ、摺上川の岸に混浴場を設けて之に入らしむ其泉質は飯坂と同じく弱性鹽類泉にして温度は攝氏四十八度を保ち無臭無味なれども少しく白粉色に濁れり、又湯野村より摺上川の右岸に沿ひて登ると十五町にして穴原温泉あり北原村に屬す、温泉宿二戸あり吉川屋多利造、和泉屋倉吉といふ、この地風景好ければ浴後散策する者多し

吾妻山 福島停車場の西凡そ五里、信夫郡の微温湯温泉場より凡そ一里に在り、吾妻富士と一の高原を隔て、相對し盛んに水蒸氣を噴出し時としては鳴動して熱灰を降らすとあり耶麻郡の磐梯山と共に近年新たに爆裂せし新火山なるを以て地質學者等の登山して其の實況を視察する者多しと云ふ、噴口は一切經山の中腹にして字硫黃谷といふ處に在り

●長岡停車場 (福島縣岩代國伊達郡長岡村)

長岡は陸羽街道の村落にして戸數凡そ三百、人口凡そ千四百あり、東壹里餘にして保原に達すべく三里半にして梁川町に到るを得へし、又前

記の湯野村、飯坂温泉に遊ぶには此停車場より瀧車を下るを以て最も近しとす、其他近傍に名勝なし

●桑折停車場 (福島縣岩代國伊達郡桑折町)

○桑折町 は國道中の一驛にして半田銀山の東南阿武隈川に枕み鐵道は町に浴ふて西方を通過す、戸數一千餘、人口三千七百五十九、伊達郡中屈指の地なり、驛に無能寺と呼ぶ古刹あり、明治九年聖駕東北に巡り駕を茲に止めらる一古松あるを御覽あり侍臣をして名を撰ばしめ御蔭の松といふ、其他近傍に名所古蹟多し順次案内すべし

半田銀山 有名の半田銀山は桑折町の北端より左折し三十町許りにして至るべし、山は數村に跨がり刈田郡の境に連亘す、高さ三百尺、銀坑は大同年間の創開にして近世幕府に於て之を保管し明治に至り民間の私有に歸せり、工場器械其他の壯大なる殆んど足尾銅山に亞ぐといふ、山上に沼あり押の池といふ、又押關の遺跡あり往昔官道の通せし所なり、

又山南に葛の松原あり
 阿都賀志山 是桑折町の北方一里藤田驛の北、國道の傍に聳立す山上より州内を一望するを以て古來國見峠の名あり、海面を抜く壹千三百七十尺、此所もまた昔し官道の通せし所にして、藤原泰衡城塞を築き源右府の兵を防ぎたり、要害白河の關の上に出づ今は道を開きて行く者艱を知らず、又この山下に下紐の關趾あり、坂上田村麿の置く所なり
 伊達大木戸 是藤田驛と貝田驛との間に在り、國見峠は巍然として其左に峙つ、山下に國見神社あり、社南に古松一株あり義經腰掛の松といふ、傳へ聞く文治五年源賴朝伊達郡に至る、泰衡之を聞き壘を厚檜山(阿津賀志山とも書す)に築き國見驛と此との間に五丈の長塹を鑿ち阿武隈河流を堰て西木戸太郎國衡をして之を守らしむと即ち大木戸なり、是より福島宮城の縣界を経て磐城國刈田郡に入り越河停車場に至る

●越河停車場 (宮城縣磐城國刈田郡越河村)

○越河村 是宮城縣内に入りて始めての驛なり、戸數七百二十餘、人口二千七百五十七、稍々繁昌の地なり此驛に龜井の清水あり、龜井六郎義經に従つて此地に來り渴して此の泉を掬すと、傍らに蘆あり皆な偏葉を生ず郷人片葉の芦といふ

●白石停車場 (宮城縣磐城國刈田郡白石町)

○白石町 是伊達家の重臣片倉小十郎の城邑たり、初め長尾景勝の家人甘糟備後の居城なりしが慶長五年伊達政宗の爲めに陥され、爾後片倉小十郎をして城を守らしむ、今は勦して桑田となし僅かに殘壘を止むるのみ、戸數一千九百餘、人口七千零八十三、市に郵便電信局、警察署等あり、旅舎は阿子島を以て最とす、街西に巍然として聳立するは官城縣内第二の高山刈田岳なり、又の名を不忘岳又は藏王岳と呼ぶ、近傍古蹟に富み調子山、刈田神社、菊面石、一本樹、三樹怪松、古將堂、無影池等人の知る所なり

鎌先温泉 白石停車場を距る西方一里廿八町、宮城縣下刈田郡福岡村大字藏本に在り、人力車賃一人曳十五錢内外にして至る、道は新道にして稍々平坦なれども始終爪頭あがりにて車の進む遅し、温泉場は人家三十戸許り兒捨川の上流に在りて四面山を繞らし頗る閑静の地なり、鎌泉は鎌先山の半腹より湧出し、湧口にては無色透明なれども浴池に入る時は黄白色を帯びて不透明に變じ鹽味と硫氣とを含む、此の湧口より樋を設けて温泉を浴池に導く、浴池は長さ三間幅二間ばかりのもの二個、皆な石にて疊み一を總湯と云ひ、一を留湯と稱す、而して湯は湯瀧となりて樋より落來る、効能は肥胖病、慢性便秘、多血及び逆上症、腸加答兒、胃加答兒其他に宜しといふ、温泉宿は湯主一條一平、鈴木屋幸右衛門、最上屋助平、木村屋源八の四戸にて宿料は二十錢より四十錢までの間とす、此の温泉は年代頗る古く正長年間に開け康正年間洪水の爲めに一旦埋滅し百廿五年の後に再び温泉湧出せしかと地震の爲めに其口を塞

がれ享保年間三たび湧出して今日に至れりといふ
 青根温泉 白石停車場（仙臺地方より來る人は大河原停車場より往くも好し）を距る西北六里三十町、陸前國柴田郡前川村刈田岳の麓に在り、宮城縣下第一等の温泉と稱せらる、白石停車場より人力車を驅れば四時間許りに達すべし、此地海面を抜くと三千三百尺三面山を繞らし唯其一方を開きて杳々松島、金華の遠景を水天彷彿の間に認むべし、鑛泉湧口は大湯、名號の湯、新湯の三ヶ所あり、泉質は鹽類泉なるも固形分少なく少量の食鹽、格魯貌如留母、硫酸曹達等を含むのみなれば浴客中には此泉を汲みて養焚の用に供する者あり、効能は上衝、頭痛、肺勞、精神病、婦人血の道、脚氣などに宜しといふ、温泉宿は都て五戸あり就中不忘閣（佐藤仁右衛門）醉嶂館（丹野七兵衛）の二戸最も宏壯にして何れも室數一百餘を有す、是より西三里を登れば刈田嶽の頂に至る
 刈田嶽 一名不忘山は山中に役の行者開基の藏王權現を安す、山は休

火山にして海面を抜くこと六千五百尺、頂上に藏王沼あり即ち舊噴火坑の湖水と變じたるものにして其水藍の如く炎天と雖も涸ることなし、山下に古刹あり金峯山藏王寺と號す、又山中に奇岩怪石多し、烏帽子形屏風岳、熊野峯、杉峯、箕輪、魔魂山、震河原、劔峯等あり就中劔峯は巉岩峭立誠に其名の如く、焦燄の昇るところ之を竈の口といふ、飛灰の積る所之を灰塚といふ、下に河あり之を三途の川といふ、多くは地獄の名を以て之を命す、此地丹土を出し河水紅きを以て之を血の池に擬す又水晶石六方石の産する所之を物見岩又の名水晶山と稱す風景殊に佳なり、山頂の舊噴火坑より發して冷水堂の下に至り清川と合し宮驛にて白石川に灌ぐを濁川といふ水質は多くの硫氣を含み其色白濁にして一の魚類を産せず、其上流は直下して瀑布となり、流れて奔湍となり兩岸に奇景多し、是より峨々温泉に至る

峨々温泉 は青根を距る一里餘の山奥に在り、其道取は青根に寄らず

して遠川田より直行するも好し、又青根よりするも好し、青根を距ること幾何もなくして山を挟み南北より流れ合する河あり即ち一は清川にして一は濁川なり、危き獨木橋を渡り匍匐して崖を攀登り峯づたひに行くこと遠からずして、忽ち幽境に入り奇岩起伏樹木鬱蒼の間を過ぎ、途上三瀧大瀧など、稱する大瀑布を觀つ、行くと半里、峻坂を降りて濁川の水溪に入れば峨々温泉なり、地獄石大黒石等峨々として雲表に聳れ激流奔湍岩に激して玉を碎き雪をちらし、奇觀殆んど晁山に譲らず、客舎は宏壯清潔にして避暑の客を待てり

小原温泉 は刈田郡小原村桂澤山の麓に在り、白石停車場より西三里斷崖絶壁の溪間に位し溪流潺々として聲あり頗る山水の風景に富む、温泉湧出は古湯と稱し石を截りて浴室を造り、泉質は鹽類泉の一種なれども其中に硫化水素を含むが故に久しく浴地に溜溜すれば稍や暗黒色を帯び眼病、腺病、肺病、梅毒、其他婦人一切の病に効あり、明治十八年前

は道路險惡漸やく人を通ずる程なりしが十九年九月大工事を起して新道を開き道路平坦馬車、人力車を通ず湯主は四竈太郎兵衛、同利、新湯主は齋藤員衛其他一二戸にして家屋は概ね二階建にて室内清潔なり

●大河原停車場 (宮城縣陸前國柴田郡大河原町)

○大河原町 是國道の一驛にして停車場を降り西の方白石川を渡りたる所に在り、其驛の繁昌白石に亞ぐ、戸數一千百餘人口四千三百八十六市に柴田刈田郡役所、裁判所宮城支廳、警察署等あり、旅舎は高山庄七有名なり、近傍に古蹟多し源二位泰衡古戰場、西木戸國衡の塚等驛西に在り、又有也無也の關は驛西六七里に在り古歌に「頼み來し人の心も變るやと問ふても見ばやうやむやの關」とあるは此の所なり

遠刈田温泉 古へは湯刈田と書す、大河原停車場より青根温泉に赴く

途中刈田郡宮村に在り(白石停車場より行くも里程に相違なし)温泉場は刈田岳、青麻山等の峯巒に圍まれ松川の溪流を擁して頗る閑雅なり温泉

湧口は都て五ヶ所あり上の湯、東の湯、目の湯、下の湯、新湯といふ、泉質は鹽類泉にして無色透明中性の反應あり、温度は攝氏五十度内外を保ち精神病、皮膚病又は腸胃病、疝氣、脚氣、婦人血の道子宮病等に効あり、温泉宿は佐藤源兵衛、吾妻長吉、遠藤勘五郎、大沼勘十郎、小室市之丞、佐藤勘太郎等數十戸あり

●槻木停車場 (宮城縣陸前國柴田郡槻木村)

槻木驛、鐵路は槻木の南に於て白石川と國道を横ざり、驛の西に至りて槻木停車場あり、白石川は此地に來りて阿武隈川に合し、驛は東南に川を帶ぶ、槻木は柴田郡中の大村にして人口六千六百五十二を有し驛また甚だ賑はへり、是より岩沼驛に至るの途中右の方に入りて道祖神社といふあり、實方中將の馬の斃れし所にて一説に中將も此に死せりといふ(中將の事は後に詳記す)

●岩沼停車場 (宮城縣陸前國名取郡岩沼町)

○岩沼町 是名取郡中第一の名邑にして戸數一千二百餘、人口五千四百四十五あり、陸羽街道陸前濱街道の要衝に當るを以て百貨玆に輻輳す驛に竹駒神社あり稻荷を祭る、聞老志に此地故武隈、文字或は竹駒に易ふ訓音相通ず幸に寺號に爲すとあり、或は然らん此の地古へは國守の居る所謂る阿武隈の館是なり、市内旅店の重なるは蓮田屋善兵衛其他二三戸あり、又近傍觀るべき所少なからず、驛の以東海濱に至れば遠望浦といふ所あり大洋渺茫眺望極めて可なり、能因法師が「武隈の松は此度跡もなし千歳を経てや我は來つらん」と咏せし鼻輪の松の故蹟も亦近きに在りと云ふ

●増田停車場 (宮城縣陸前國名取郡増田村)

増田驛は仙台を距る六哩三十八鎖の所に在り、岩沼に亞ぐの市驛にして人口三千八百六十餘を有す、明治九年東北御巡幸の時名を賜はりし衣笠の松は沿道唯一の名木と稱せらる

實方中將の墓 是増田驛を距る西方一里許り鹽手村の竹叢の中に在り實方朝臣は一條院の御宇殿上にて恨みある行成卿の冠を打落せし罪にて陸奥へ配流せられし御方なり「さくらかり雨は降り來ぬあなしくはぬるとも花の影に宿らん」又「都には聞きふりぬらん時鳥關のこなたの身こそつらけれ」皆な中將の咏なり

埋木。増田驛より中田村を経て名取川を渡る、有名の埋木は此の川より出づ硯、印材に用ひて妙なり「名とり川瀬々の埋木あらはれは如何にせんとか相見ろめけん」有とて逢はぬためしの名とり川くちたに果てね瀬々の埋木」みな名取川の咏なり○高橋古城。是増田停車場を距る西北半里餘吉田村に在り、藤原秀衡の古壘とも云ひ、伊達家の家臣福田駿河守の居城とも云ふ詳かならず、是より長町を経て廣瀬川の鐵橋あり、此の川の中心を以て名取宮城の郡界と爲す、須臾にして仙臺停車場に達す

●仙臺停車場 (宮城縣陸前國宮城郡仙臺市東七番町)

○仙臺市 是曾て伊達氏の城邑にして東北の大都會なり、人煙稠密、馬輻輳、全市の廣袤東西三十四町、南北三十二町、市坊三十二より成り、戸數一萬三千二百餘、人口六萬零九百八十四を有す、廣瀨川其北を流れて宮城野其東南に連なり、師團本營を青葉城址に、分營を躑躅岡に置き、宮城縣廳、控訴院、裁判所、逓信管理局、大林區署、市役所、警察署、集治監、監獄署及び第二高等中學校、師範學校、農學校、公私各種の學校、病院、書籍館、議事堂等各所に散在し、其他銀行諸會社、紡績場、新聞社等一として備はらざるなし、停車場は市の東端東七番町に在りて東京上野を距る街道八十九里餘、隣縣福島縣へ廿二里、巖手縣へ四十八里、山形縣へ十六里三十二町あり、又旅人宿は多く國分町に在り、其最も大なる者は安藤利兵衛、針生久助、大泉梅次郎、齋藤忠助、橋本友三郎、奥田正吉等何れも停車場前に支店を設く、其他羽陽舎(停車場前)杉山たか(南町)等之に亞で名あり

青葉城址 青葉城は伊達家の居城にて街西廣瀨川大橋を渡りたる所に在り、慶長五年藩祖黃門政宗卿の築く所なり、この城遠く西北に圍む者は和泉岳にして西南に蟠まるは不忘山なり、七嶽峰其北に連なり大白嶺其南に聳ゆ、近くは茂陵越路山、經嶺の南山を右翼とし、國見岳、權現嶺、八幡山の北山を左翼とし、前面は東に向つて開け、廣瀨の河流域下を遶り、宮城の原野郊外を帶ふ、所謂龍蟠虎踞相備はるの地にして要害天下に鳴る、戊辰の亂後本城を毀ち、明治十五年九月城外火を失して灰燼に歸す、二師團の本營は實に此の城址に在り

經々峰の靈廟 是黃門正宗卿以下三氏の墳墓にして城東廣瀨川の西縁樹鬱蒼たる所に在り、廟下に一字の精舎あり、正宗山瑞鳳寺と號す、山門に入り大華表を潜り數十段の石階を登れば拜殿に至る、瑞鳳殿三字の額は佐文山の揮毫にして深殿には貞山公(政宗卿の法號)の靈像を安置す、前の羽林義山公の廟を感仙殿と云ひ、後の羽林雄山公の廟を善應殿と云

ひ、共に瑞鳳殿を距る西方二十步許りの丘陵に在り宮殿廊廡何れも富麗を盡せしに戊辰の戦亂に本殿を毀たれ今は感仙殿の深宮を存するのみ、此地河流地方を過ぎ、鬱林門前を遶り、古杉老松幽邃に暗く、窓を開けば一望萬里白帆の洋中に浮ぶを觀る、實に佳境壯觀の地なり

櫻岡公園 是市の西端に在り舊亘理、岩沼、錦織の三邸宅地にして明治四年之を開き以て士民遊覽の地と爲す、借樂園といふは是なり、園内に櫻岡神社を祠る、華表の傍らに老梅古松二株を栽ゑ松を般若の松、梅を八房の梅と云ひ、共に正宗卿が朝鮮より齎し歸りしものといふ、祠前に小池あり夏は花菖蒲を栽ゆ、池畔に一大豊碑あり林子平の事蹟を記する者にして篆額は伊達慶邦公、選文は大槻磐溪翁なり、園内には梅、櫻、牡丹、藤花、躑躅、菊等四時の花弁絶ゆる事なし、又挹翠館、梅三亭等の割烹店あり、茶店珈琲店などありて客を待つ

林子平の墓 是街北龍雲院といふ寺の境内に在り、明治九年車駕此地

に駐まり、子平の功を追賞せられて従五位を贈り幣帛料を賜ふ、扈從の士金を捐して子平の爲めに紀念碑を建つ、篆額は一品有栖川親王、撰文は重野博士たり、子平曾て書を著はして外患を警しめ、幕府の嫌忌を受け寛政年間幽閉中に死す

榴ヶ岡 是停車場の東に在り此地昔しは躑躅の樹多く且つ此花を以て都々玆摺なるものを製せしを以て岡の名に命けたり、今は一本の躑躅をも見ず、却つて櫻樹多くして春時は遊人集り頗ぶる雑沓を極む古歌に「みちのくの躑躅ヶ岡のくまつらつらしと君を今日そ知りぬる」又「東路やつゝじが岡を來て見れば赤裳のすろに色ぞ通へる」とあるは此地を咏めるなり、傍らに天神社あり六十四代圓融帝の御宇平持村なる者始めて勸請する所にして始めは宇田郡八幡崎に在り其後屢々移轉して寛文七年綱宗卿此の地に移せりといふ

東照宮 是城北に在り慶安三年忠宗卿將軍家の允許を得て社殿を造營

し承應三年に廟宇成る、殿堂門廡壯麗を極む、傍らに一字を置きて仙岳院と號し祀事に奉ず、寺主を江都東叡山に請ふて最教院の僧正見誨を請じ、太守道を清めて神輿を迎へ其年三月十六日夜始めて遷宮すといふ、毎年九月十七日を以て大祭を執行す

青葉神社 は市街の北端に在り後に荒卷の巒峯を負ひ南面して市街に臨めは高陵あり、眼下に七萬の人家を見おろし、遠近の秀嶽を一目に集め、東海の波濤一碧洋々たるを望み、眺望絶佳の地なり、茲に鎮座ある青葉神社は去る明治十九年始めて造立する者にして、祭神は故從三位權中納言兼陸奥守伊達政宗諡號武振彦命なり、毎年五月廿四日を以て祭典を行ふ、傍らに青葉神社の碑銘あり詳らかに政宗卿一代の偉蹟を紀す社傍に料理店、温泉場等あり境内を散策する者多し

愛宕山 は市の南に在り、茂陵の北に在りて廣瀬川の清流に臨める巖上の一高陵なり、上に愛宕の祠宇虚空藏あり喬木枝を交へ鬱々蒼々たり

兩社の傍らに茶店三四軒を並べ、巖頭に床几を備へて遊人の休息所に充つ、此處に立て眺望すれば眼下に仙臺市を見おろし東渺々たる滄海に白帆の隠見するを望み、金華山一髮海を隔て、翠色拭ふが如きを見る、四季折々のながめに飽かず最も納涼に宜し

偕市中の名所古蹟は至るところに在りて殆んど枚舉に遑あらず、せめては重立たるものを選びて記さんと欲するも是また紙數に限りありて半ばをも載せがたし最も遺憾と爲す、是より市外二三の名勝を案内して次の驛に進まん

燕澤蒙古の碑 仙臺市より東南一里餘り榴ヶ岡の北より原町に出で玉田横野を過ぎて猶ほ行くと數丁にして岐路あり、是より左に折れて案内村を過ぎ比丘尼阪を越ゆれば燕澤村に至る、路傍觀音堂の前に蒙古の碑あり、高さ六尺餘、徑三尺許り石面欄行文字五十一を刻す、多くは古跡又は梵字やうのものにして讀べからず、抑も此碑は胡元の僧祖元の立る

所ろにして初め祖元命を蒙りて我邦に來り、陽に歸化すると稱して我國の動靜を覗ひ潜かに本國に報ず、弘安四年夏五月元兵十萬我が博多の津を襲ひ、颯風に會ふて船艦悉とく覆没し屍は海を埋め能く生て還る者僅かに三人なりといふ、元大に悔い追齋して文を作り其徒清俊をして石に刻せしめ死者十萬の靈を祭る、是れ其碑なり文殊に奇異の文字を用ひたるは嫌疑を避けんが爲めなるべしといふ碑は弘安五年仲秋二十日に建つとあり

宮城野 是れ榴ヶ岡以東の平原をいふ、郷人活巢が原ともいふ、此地古來有名の勝地にして殊に古跡多し「宮城野の萩や小鹿の妻ならん花咲きしより聲も色なる」さましく心に心をとむる宮城野の花のいろく虫のこゑく」など古歌にあり、古へは此地の太守より年々宮城野の鈴虫を將軍家へ献上せしほどの事なりしが今や悉く開けて田園となり、其宮城野と稱するものは僅々五六町歩に過ぎずして陸軍練兵場となれり

茂嶺の城址 是れ愛宕山の南根岸村に在り、名取を前にし宮城を後にし兩郡の山脈此に盡き屹然突起して自然仙臺市を庇翼するの形勢を爲す、相傳ふ百一代後小松帝應永年中栗野大膳なる者名取の北邑三十三郷を領して此の城に居ると、太守綱村卿此地に一寺を建立して兩足山大年寺と號す、依て卿の没後此の山中に葬る、戊辰の亂後此の寺宇を毀ちたるも歴代の墳廟は今なほ存せり

秋保御湯(温泉) 是れ仙臺を距る西方五里、名取郡湯本村に在り温泉は名取川の上流に沿ひたる平地より湧出す、湧口三ヶ所ありて湯本、澤の湯、日の湯といふ、温泉宿四戸あり内湯を設け桶を以て導く、獨り日の湯は別に浴室を設けず僅かに頭及び眼を洗ふに供す、泉質は鹽類泉にして硫氣を含み温度は攝氏五十五度を保つ、疥癬、金創、疝氣等の諸病に効ありといふ

作並温泉 是れ仙臺市を距る西方七里、羽州山形街道の内宮城郡作並村

に在り、道は爪先上りなれども車馬を通ず、温泉は廣瀬川の上流に沿ふて數ヶ所より湧出し、就中古湯、新湯(鷹の湯ともいふ)等名高し、古湯は建久年間に發見し、新湯は近き比發見せり泉質は硫黄泉にて無色透明温度は攝氏五十度以上を保ち疥癬、脚氣、血症其他に効あり、温泉宿は古湯に岩松要、同苗傳兵衛の二戸あり、新湯に森谷、小池の二戸ありて何れも二層の高樓を構へ客室も亦清潔なり

定義温泉 是仙台市を距る西方六里餘り、宮城郡大倉村に在り道路峻嶮にして車を通せず、温泉は白髭山の麓に在りて字定義と稱する所の巖石の間より湧出す、泉質は青根温泉と伯仲し温度は攝氏三十七八度を有す、婦人諸病、逆上、金創、梅毒、皮膚諸病に用ひて効あり、湯守は石垣加茂之助にして浴舎も清潔なり、此地山中の溪間に在るを以て夏時避暑に來る者多し

●岩切停車場

(宮城縣陸前國宮城郡岩切村)

岩切驛は仙台を経て青森に至る東北鐵道線の分岐する所にして則ち直行すれば松島、小午田等を経て青森に達し、幹線より岐れて右折すれば鹽竈に至つて止む、其地は國道の一驛にして殊に松島、鹽竈に至るの要衝に在るを以て諸國の旅人茲に集まり頗る繁昌を爲す、此驛より至るべき古蹟は有名の多賀城址なり、其他近地に末の松山、千引石、野田玉川等の名あり、聞く靈元上皇仙臺の國主に勅して奥中の名勝を條上せしめたるに時人之を審らかにせず疎漏の事を記して上奏せしより遂に誤謬を傳へたり、末の松山千引石は盛岡、青森二縣内に在りといふ

多賀城址 岩切停車場より東南二十町、市川村市川橋の東に方四百間許りの丘陵あり是れ多賀城の古址なり、今猶ほ近傍より古瓦を堀出す事ありて好事家は之を硯に造りて珍重すといふ、此城始めは多賀の柵と稱へたるが寶龜十一年に至りて多賀城と呼べり、今は城址の在る所を多賀城村と名く、又多賀城の碑あり昔し多賀の城門に建て四境の遠近を示し

たるものにして今は周圍に柵を結ひ傍らに一本の松を栽為たり、碑は高さ六尺五分、面の潤さ二尺六寸四分、其の碑面の文は左の如し但し文中の里程は六町壹里と知るべし

多賀城 去京一千五百里

去蝦夷國界一百二十里

去常陸國界四百十二里

去下野國界二百七十四里

去靺鞨國界三千里

此城神龜元年歲次甲子按察使兼鎮守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也天平寶字六年歲次壬寅參議東海東山節度使從四位上兵部省卿兼按察使鎮守府將軍藤原惠美朝臣朝禰修造也

天平寶字六年十二月一日

野田の玉川 多湖の碑を距る十町ばかりの田間に小渠ありて野田の玉

川の古跡と云ひ傳ふ、橋の傍に碑あり能因法師が咏める「夕されは汝風として陸奥の野田の玉川千鳥鳴くなり」といふを刻せり、然れども是地は野田玉川の舊趾として見るべき據こるなし恐らく國人の附會せしものなるべし

十符池 多賀城址の南に在り、池中有二垂柳一柳下菅草頗多と聞老志に見ゆ「陸奥のどふの菅薦七符には君をねさせて三符に我ねん」とは此所を咏せしなり、或は曰ふ野邊地に在るもの眞の古跡なりと

洞雲寺 岩切停車場の西、國道の北七田驛に在り、曹洞宗にして慶雲年中定惠僧正の開基に係り其後弘仁の頃慈覺大師再興す、塔宇壯嚴にして開山堂の如きは柱、扉ともに彫刻を施し古雅愛すべし、庭園には清水流れて小河を爲し架するに十板橋を以てし、翠巒境地の四方を繞りて幽邃極まりなし、本尊は毘盧遮那佛にして之を本堂に安し會式には賽人麿集頗る雜踏を極むと云ふ

●鹽籠停車場 (官城縣陸前國官城郡鹽籠町)

○鹽籠町 是岩切にて東北鐵道の幹線より岐れ僅々三十分間にして達するを得、此地は松島灣に枕み水陸の運輸兩ながら便を得て商業活潑の地なり、戸數は七百五十、人口は四千六百九十一、堀割は市の中央を横ぎりて江灣に至り船を行るに便なり、此地一名千賀の浦と稱し夙に松島と共に勝地を以て著はる、東京よりの旅客にして松島の景を賞せんと欲せば先づ鹽籠に至り是より、舟に乗りて行々ろの景を賞し、松島町に上り松島停車場に出るを順路とす、鹽籠町の旅店にて名ある者は太田屋、海老屋、齋藤の三軒にして何れも停車場前に支店を設け、鹽籠神社への案内、又は松島行小舟雇入の周旋を爲す

鹽籠神社 是停車場より西の方五町許り樹木鬱鬱たる山上に在り、表坂は石階百餘級、急にして峻なり裏坂は斜にして緩なれば之を女阪といふ、女阪の中腹に割煮店勝講樓あり、樓に登れば海波煙雨を帶び、島影

隠見、漁舟其間に來往し、信に一幅の畫圖の如し、表坂を登り隨身門及び正門を入れれば本宮あり、相傳ふ鹽土老翁を祀ると、元祿中伊達綱村其の左宮を建て武甕槌命を祭り、右宮は經津主命、別宮は岐神を祀り神祇管領卜部兼連に請ひ其の縁起を草せしむ、或は曰く延喜式に載る所の志波彦神社即ち此の社なりと、今は志波彦神社を分つて二とす、昔しは奥州一の宮正一位鹽籠大明神と號せしが今は國幣中社鹽籠神社と敬め奉る、社内に和泉三郎忠衡納むるところの南蠻鐵の燈籠あり高さ六尺餘扉に日月の形を鐫る、忠衡は奥州押領使藤原秀衡の三男なり

神釜社 市内海老屋旅舎の前に神釜社あり所謂神釜なる者を祭れり、古釜四口あり其三は徑四尺八寸、一は四尺、傳へ云ふ太古鹽土老翁始めて鹽を此の釜に煮て其の利を民に教ふと祠と共に名を得る所以なり、本社之東南に金光明山法蓮寺と云ふ寺あり、寺下以東の沙汀を翠松磯と云ひ、籬島は海汀を去る十餘町恰も海面に浮ぶが如し皆な此地の勝なり

●●●松島の奇景 ●●● は宮城縣陸前國宮城郡松島村に在り、東海の巨灣東北金華山に界し西南相馬岬に至る、松島は灣の一邊に在りて更に小灣を爲す、俗に八十八島と稱する無數の島嶼點々海上に基布し島は悉とく松を生じ且つ其形に依りて各々名あり、實に日本三景の一たり（安藝の宮島、丹後の天の橋立及び松島を以て三景といふ）偕て此奇景を賞せんと欲せば鹽竈より海上三里の間舟を雇ひ行々左右の島嶼を巡覽するを可とす、先づ鹽竈の浦を漕出れば第一に目に入るを籬島とす、島中翠竹林を爲し林中に一祠ありて里人間籬明神といふ、鹽竈の景は此の島あるが爲めに一層眺めを増すものにして遊人は夏日此の島に上りて涼を納れ又貝を拾ふを常とす、舟其邊りを過ぎて千賀の浦の灣口を出れば眼界豁然忽ち無數の小島を一望す、舟は島嶼の間を縫ひ所謂灣内に至れば一步を進めて一象を顯はし、一櫓を搖かして一景を得、近き者は走り遠き者は舞ふ、實に千狀萬態變幻極りなし、元人薩天錫の詩に曰く風光招我海山阿、拍

吟魂奈三句何、御島烟波松島月、到此捲舌富樓那、世稱して松島の傑作と爲す、其の沖合瓊ヶ崎には鯛の生巢あり二町四方の海を圍みて之に海魚を貯はへ浪荒く漁獲多からざる時の用に供せり、且つ近傍に料理店吉田屋あり客若し三十五錢を投すれば一竿と餌とを興へて隨意に生洲の魚を釣らしめ其獲たるものを膾とし鹽焼として膳に上すを得へし、舟は是等の島嶼を或は遠く囑め、或は近く望み一時間乃至二時間にして松島村の波止場に着す

●●●松島村 ●●● は戸數百戸許りの一小村落にして其前は一小港灣を爲し東北に丘陵を遶らし、海岸には旅店及び名物の硯石、埋木細工、福浦竹等を賣る家軒を列ね、旅店は觀月樓を以て最とす、此家海岸に三層樓を構へ客室數十あり、其他松島館、加賀三亭、鈴木屋等之に亞ぎ皆な料理を兼業とす、宿料は一泊三十五錢の定めなり、勝區の中重なるものを選択て案内を爲すこと左の如し○觀瀾亭 村西月觀崎に在り元仙臺侯の游館た

り、傳へ云ふ藩祖政宗卿曾て豐太閤より伏見殿の一亭を賜はり之を江戸の亭中に移せしを後忠宗卿此に移して此の亭を造營す、吉村卿東坡西湖の句を摘み「雨奇晴好」の四字を書して楣端に掲ぐ、別に「觀瀾亭」の三字を書したる扁額あり、佐文山の書す所、亭は皆な榎の柱を用ひ室は廣くして雅致あり、竹垣を結ひて外圍を爲す、亭に上れば近く雄島、經島、福浦島、燒島等を望み風光松島に冠たり、其右に幽篁浦あり○幽篁浦北畔の水汀を破浪灣、荒管汀と云へり、即ち松島八景の一にして竹浦夜雨是なり俊成卿の歌に「立かへり又も來て見ん松島やをしまの管や浪にあらずな」とあるも亦是なり、象ヶ鼻、岩ヶ青、春磯等を経て雄島に入る○雄島、又御島、小島、千松島ともいふ全島長さ百餘歩、横其半ばに居る松島の南廿餘島の内この島最も大なり、小松崎より此島へ渡る橋を渡月橋と云ふ長さ十二間、俯望すれば碧淵人を呑まんとし目爲めに眩む、此島素頼賢、見佛上人等の住せし所にて島口に松吟庵といふあり其の故跡

なり、高僧の居りし故を以て死者の牙骨を埋むる者四方より來り島身爲めに穿たる、者半ばに過ぐ、又坐禪堂あり寛永年中雲居禪師の建つる所とす、其南に頼賢の碑あり高さ一丈幅三尺六寸、側らに五輪の塔あり高さ一丈許り之を骨塔といふ、又見佛堂あり見佛上人の像を安す、島上に松樹あり松頼慈々、晴波激澗爽氣肌を襲ふて至る快云ふべからず○五大堂、松島村の東岸に斗出する小半島の名にして之に二短橋を架して陸に通ず、一は三間、一は六間橋板の間を隙して空虚にしたれば其間隙より碧水の漫々たるを見るべし、此島元觀月崎と稱す阪上田村磨東征の日此を過ぎ多門天の像を安置す後に慈覺大師五大明王の像を安せしを以て五大堂とは名けたり慶長年間政宗卿名工鶴左衛門等に命じて堂宇を修造せしめ以て其の觀を新たにす、島上老松蟠屈枝葉倒まに垂る諸島其前に點々し奇景云ふべからず、昔しは此島に藤花咲亂れしと云へど今は跡だになし○瑞巖寺、は古への松島寺なり、松島村の北二町餘の所に在り、傳

へいふ仁明天皇承和五年の建立にして眞壁平四郎なる者出家して宋に入り法を經山の無準に學ぶ歸朝して開く所なりと、一説には慈覺大師の開基にして當時は青龍山延福寺と號せしとも云へり、爾後智覺、覺滿等歸化の僧相繼で居れり、慶長十年に至り政宗卿之を改造し忠宗卿に至りて成功せり、雲居和尚を請ふて中興開祖と爲す、佛殿堅二十一間、横十二間、正面に政宗卿甲冑の像を安し又殉死者の位牌を列す、公の像は獨眼短面、兜に長大なる半月を飾り手に軍配を携へ一目其人に見ゆるが如し殿内別に奥の間、上段の間、中段の間、孔雀の間等あり、明治九年 聖駕北巡の際此の寺を行在所と定められ、上段の間に玉坐を設けたり、還幸の後ち一千圓を賜ひて保存費に充られしといふ○富山 は松島の奇景を一眸に集むる所なり、山は手樽村に在りて松島を距る二里弱、先づ舟を磯山の岸に着れば玆に多くの男女ありて遊客の案内を求むるを待つ、案内料八錢を投ずれば見物し得べし、是より岸邊の小山を踰えて田圃の

間を過ぎ行くと十餘町にして手樽村に至る更に峻阪を登る七八町にして頂上に達す、山上寺あり大仰禪寺と號す、寛文中雲居禪師の創むる所、富春山の扁額を掲ぐ、東南を望めば海天一色、遙かに外洋に接し、漸やく西する所相馬の數峯を望むべし、左眎すれば金華の翠黛高く聳ゆ、俯して瞰れば群島點々松島十里の灣も亦一泉池に異ならず、世人の松島の景は富山に在りといふは決して過賞にあらず、山上にては大仰寺にて茶を薦むるの外旅舎茶亭の設けなければ山に一日を費さんとする遊客は其用意肝要なり

○石の巻港 松島より野蒜港まで一里弱、此間運河あり新鳴瀬川と云ふ、舟行して野蒜に至り、鳴瀬川を横きり更に運河あり汽船を通ず、是れ寛永の初め政宗卿の開鑿する所、北上川より分注して鹽竈石の巻間の運輸に便す、此の間五里舟行して石の巻港に至るへし、本港は宮城縣下牡鹿郡に在り北上の河流滔々流れて海に入る所なり仙臺を距る十三里

鹽竈に至るの漁船は日々四回の發着あり、戸數千五百餘人口六千餘、郡役所、區裁判所、警察署及び郵船會社支店、第一國立銀行支店、第七十七國立銀行支店等あり、其他病院あり學校あり、劇場寄席諸興行物一として備はらざるなし、商賈軒を連ね百貨輻輳す、實に東北の要津にして船舶の出入年々三千に下らず、此地また衣袖渡口、烏帽石、日和山等の名勝あり、萩の濱は東方五里、是亦一の要津たり

金華山 は鹽竈を距る海路二十里、牡鹿郡鮎川村に在り松島の奇景を賞し石の卷港を経て至るべく、其間島嶼點々、鮎川に至る渡口を山鳥また鹿渡といふ此間僅かに二十四町、山は宛も洋中に聳立し高さ八十丈、五峯々巒六十八區、溪間四十八、山腹天女堂を立つ、寺あり金華山大金寺といふ、延喜式に載する所黃金山神社是なり、其の北岬を二王崎と云ひ、東岬を大箱崎と云ひ、南岬を蛇穴崎と云ひ、遙かに下總の犬吠崎と相對す、前に燈臺を設け航海者の便と爲す、山中麋鹿多く遊客至れば陸

續出來りて食を求む宛も家畜の如し、山水の美は今更いふまでもなく實に古今の名勝無双の靈地といふべし磐溪大槻翁詩あり曰く屹立煙霞漂渺間、海東名嶽是仙寰、千秋赫々金華句、無後人呼陸奥山、と以て其の勝を見る可し

●利府停車場 (宮城縣陸前國宮城郡利府村)

利府は仙臺より野蒜港に至る街道の一驛にして戸數二百戸ばかりの小村落なり近傍特に案内すべき名勝舊跡なし

●松島停車場 (宮城縣陸前國宮城郡松島村)

松島停車場は松島の海岸を距る西北三十二町に在り、金拾錢を賃すれば人力車にて至るを得へし、故に松島以北の人にして松島を見物せんと欲せば松島停車場を降り、松島浦に至り舟行して其奇景を賞しつ、鹽竈浦に出で、鹽竈停車場に至りて汽車に乗るを便とす、其勝はすべて松島案内中に記したるが如し

●鹿島臺停車場 (宮城縣陸前國志田郡鹿島臺村)

鹿島臺は廣長、深谷、船越、平渡等諸村を合して新たに設けたる村名なり
戸數一千二百餘、人口四千四百六十、志田郡中の大村たり、村内字大迫
及び廣長に亘りて湖水あり、品井沼といふ周圍凡そ五里二十四町、下流
一は高木川となり、一は鳴瀨川に入る、是より鳴瀨川の鐵橋延長五百七
十九呎を渡りて小牛田に達す

●小牛田停車場 (宮城縣陸前國遠田郡小牛田村)

小牛田は江合川に瀕し、國道の古川驛を距る東方二里二十町、遠田郡中
の一村にして戸數六百餘、人口二千百十八を有す、此の近傍にて有名な
る節婦お辰の墓は西方二里半志田郡坂本村天性寺に在り
温泉村八湯 小牛田停車場の西北十里餘、玉造郡の西隅に温泉八ヶ所
あり皆温泉村に屬す、川渡、田中、赤梅、舊車、新車、鳴子、河原湯、中山の八
湯に分ち相距る近きは數町遠きは一里餘とす、泉質は多く鹽類泉にして

各場共に浴舎數戸あり就中新車、鳴子を以て著名の地とす、八湯の近傍
に小黒崎、美豆の小島、白絲の瀧、三條山、尿前關舊趾等の名勝あり土地
僻遠なるか爲めに其名著はれずと雖も風景の閑雅なる殆ど陸前一國中に
冠たり

●瀨峯停車場 (宮城縣陸前國栗原郡陸里村)

瀨峯は東野中に在る一驛にして近傍に名所古跡の記すべきなきし、停車場
より東南半里許り遠田郡蕪栗村に蕪栗沼といふ湖水あり、東西一里十一
町、南北一里十二町、流れて佐沼川に入る、是より長沼湖に沿ひ北浦北
方五地を経て石越に至る

●石越停車場 (宮城縣陸前國登米郡石越村)

石越は登米郡中の大村にして戸數一千四百餘、人口五千二百八十五を有
し其北は陸前、陸中の州界を爲し又宮城警手の縣界たり

●花泉停車場 (岩手縣陸中國西磐井郡花泉村)

花泉は磐手縣下に入り始めての宿驛にして全村の戸數五百十餘、人口一千八百七十七を有す、此の驛を發し有壁の隊道延長八百八十六呎を過ぎて一の關に達す

義經の墓 有壁驛の西に在り、義經自盡の後沼倉小次郎高次なる者之を此の地に葬り以て其の陵墓を建つ、此地は乃ち高次は古館地にして上に山あり辨慶が峯と稱す往昔武藏坊辨慶經歷の地なりと云ひ傳ふ○津久毛橋 是有壁驛より國道を南に往く一里半許り澤邊驛に在り源賴朝泰衡を攻る時、梶原景高詠歌の所なりといふ今は僅かに一小把橋を存す

●一の關停車場 (岩手縣陸中國西磐井郡一の關町)

○一の關町 初め磐井の里と云ふ「諸人は磐井の里にまどむして共に千歳を經べきなりけり」と夫木集にあるは此地の事なり、故に今磐井町とも云ふ、其の一の關といふは天喜康平の頃安倍貞任追討の際源義家一

二三の關砦を此の地に置く、一の關は乃ち磐井に置きしを以て爾後村名となれり(二の關三の關は江刺郡に在り)地勢東南は白山機織の諸山に對し西北に磐井川を帶ふ、爲家卿の歌に「松かげの磐井の清水汲あげて夏なき年と思ひけるかな」とあるは此川を咏せしなりと云、此地維新前田村氏奕世の治績にして人煙稠密物貨概むね集まる、驛に西磐井東磐井郡役所あり、治安裁判所あり、郵便電信局あり、殊に北上川の水利用を假り石の巻港と往來交通の便あり、水路凡そ三十里、水陸の便已に斯の如くなるを以て前途多望の地と爲す、此地平泉に接するを以て頗る古蹟に富む左に之を列記すべし

平泉の由來 平泉は一の關を距る北の方二里餘國道に接するの一村落にして戸數一千餘、人口三千六百四十餘あり、今は人家落々たる一寒村に過ぎずと雖も往昔の事を原ぬれば、この地は寛治年間藤原清衡の始めて江刺豊田より居を移せし所にして、祖孫相繼で幾んど百年東北に雄

視せり、清衡は鎮守府將軍に任じ陸奥出羽の押領使となる、清衡の孫秀衡又州守に任じ威名益々輝やく、其子泰衡に及び源頼朝の爲めに亡ぼさる、其盛時に在りては豪奢を極め居館の如きは之を王室に擬して伽羅樂御所と稱せり、爾來年移り物變りて遂に今日の形勢を爲す、當時この邑及び中尊寺、戸河内、達谷、衣川（衣川は今膽澤郡に屬す）四邑を衣の里と云ひ是等の諸邑皆な同郷なりしと云へり、近傍名所古蹟多かる中に第一に見るべきは中尊寺と爲す、中尊寺に至るの途中衣川の流れて北上川に落合ふ所に小丘あり是れ高館の舊蹟なり、里人之を判官館といふ判官館 又衣川館とも云へり、源義經家兄二位の忌諱に觸れ秀衡を便りて陸奥に落ち此館に住みしなり、古圖を見るに此館は東西四百六十間餘、南北百三十間餘、高さ五十間あり當時北上川東山の麓を流れたりしも今は此の館の下を流る蓋し洪水の爲めに崩壞して狹隘となるに至れりといふ、館址の西に方りて義經の祠堂あり、俗に義經堂と稱す、天

和三年仙臺侯伊達綱村郡司河東田定恒に命じて建しめしに安永九年に至りて廢頽し再び之を建つ堂は極めて小にして内に義經其他の塑像を安す、又左傍に辨慶堂といふあり内に辨慶の像を安す、長六丈餘戎衣して烏帽子を戴き、偃月刀に仗りて立つ、眼光瞋るが如く其堂宇は義經の祠堂より廣大なり

中尊寺 山號を關山と云へるは衣關に近きを以てなり、麓に地藏院あり稍々登りて本堂に至る、此寺の古志を按ずるに一山の境内東西十七町三十間、南北十三町、堂塔四十餘宇、坊舎三百餘宇ありしといふ、實に東國には比類なき大伽藍なり、其の結構も素より壯大なりしならん、今殘る所の金色堂の柱鴨居、其他扉承塵に金銀を鏤めたるを見て日光などより一層壯嚴なりしを推知すへし、抑當寺は五十四代仁明天皇の御宇嘉祥三年釋圓仁（即ち慈覺大師）の開基する所にして初め經山の中央に一宇の堂を建て弘臺壽院と號す、其後五十六代清和天皇貞觀元年に中尊

寺の號を賜ひ四境を定めらる。七十代後冷泉天皇の御宇天喜五年源賴義安倍貞任を征伐し凱旋の時鹽尻小前澤の兩邑を寄附せらる。七十三代堀河天皇の御宇藤原清衡に當寺を經營すべきの勅命あり依て創めて堂塔四十餘宇、僧坊三百餘宇を建造せり即ち鎮護國家の靈場たるべしとて勅願所と爲したまふ。基衡、秀衡尋て堂塔坊舎を増建す。山谷に軒を列ね豊を並べ殿宇樓門光彩赫耀として眞に海内屈指の佛界靈場たりき。建武四年原を焚き偶々風起りて其の猛火堂中に飛び惜むべし峻宇高門は更なり昆玉麗金の寶什を藏せし府庫に至るまで悉く灰燼に歸し、僅かに經藏、金色堂の二字を残したり。金色堂は里人光堂と稱し方三間の小宇なり、内に三木檀を置き、檀下に清衡、基衡、秀衡の棺を藏め、又泉三郎忠衡(秀衡の季子)の首桶を藏す。經藏堂は金色堂の東北十餘歩に在り、結構の美金色堂と大差なし、天仁元年建る所といふ、内に一切經三部を藏す實に稀世の寶物なり、其他境内に古址の存する者毛越寺、常行堂、大

金堂圓隆寺、二階大塔等枚舉に遑めらず就中毛越寺は堂塔四十餘の内今尙十七坊を存す

五串の瀧 一の關停車場の西北二里餘、嚴美村大字五串に在り、磐井川上流の水此處に來り兩岩の岩に迫られて瀑布を爲すものにして溪の左右に奇巖怪石磊砢として起伏し一危橋を岩上に架す、橋上よりは直ちに瀑水を望むべく其の景致の幽邃なる殆ど木曾の寢覺に似たり、詩人墨客の喋々其奇を賞する故なきにあらざ

●前澤停車場 (岩手縣陸中國膽澤郡前澤町字島町小屋)

○前澤町 は膽澤郡中水澤驛に亞ぐの宿驛にして戸數千三百餘、人口五千百十一を有す驛の東に不動堂あり其境内に櫻の古木朽殘れり芭蕉の句に「山におし此みものくの櫻かな」とあるは是なり

●水澤停車場 (岩手縣陸中國膽澤郡水澤町字新城)

○水澤町 は郡中唯一の繁昌地にして戸數二千餘、人口七千六百八十

五を有す、市に膽澤江刺郡役所、警察署、直税分署、郵便電信局等あり、其西南に聳立する高山は有名の駒ヶ嶽なり、一名駒形山とも云ふ、山上に左記の駒形神社あり

駒形神社 金ヶ崎村大字西根駒形嶽の山嶺に在り、駒形神を祭り國幣小社に列す、其の遙拜所は水澤町の西南に在りて本社、幣殿、拜殿ありて茲より山路に就き七里許にして山頂の本社に達すべし、本社は唯一宇にして冬季は積雪深くして途を絶ち春夏數月の間を限りて賽人の登拜を許す、然れども道險路峻にして健脚の人と雖も往々中途にして歸り來る者ありと云ふ、遙拜所は水澤町の遊園地に接近し風色頗る佳なり

鎮守府の址 水澤驛より官道を一里許り北に來て宇佐美といふ村ありこの村を左に八町許り入りて八幡社あり、即ち其地なり東に北上川、北に膽澤川を帯び要害堅固の地なるを以て延暦二十一年に阪上田村磨平城帝の勅を奉じて茲に城を築けり、膽澤城是なり、八幡宮には鎮守府八幡

宮の扁額を掲ぐ、藏品の存する者一もなし、境内凡ろ方一町、官道より八幡社前に至るまで方八町許りは當事常備團兵五千餘人を置きたりといふ、境内に安永七年に建たる碑あれと唯だ八幡宮の事のみを紀して城と府の事に及ばず、按ずるに鎮守府を置き將軍を任じたるは聖武帝の御宇大野東人を東海東山節度使兼鎮守府將軍と爲し奥州に使はずより始まりしかば此地は蓋し創始の所なるべし

● 黒澤尻停車場 (岩手縣陸中國東和賀郡黒澤尻町字十八割地)

○ 黒澤尻町 は東和賀郡の繁昌地なり、この地昔しは黒澤尻五郎正任なる者の住みし所にて一城廓ありしか源頼義陸奥征伐の時攻落されしとなり、今は城址の何れに在るや詳らかならず

● 花巻停車場 (岩手縣陸中國秋田郡花巻町字北萬丁目)

○ 花巻町 この地昔しは鳥谷と呼び安倍頼時の始めて城を築きし所、然るに天正十九年淺野長政九の戸に討入り其歸りに南部信直と謀りて其

家人北秀愛をして此の城を守らしむ、此の時花巻を改めしとぞ、今鳥谷神社といふ村社のある所即ち其の城址なり、現今戸數六百餘、人口二千五百六十六を有し、神貫郡に於ては里川口に亞で繁昌す

●石鳥谷停車場 (岩手縣陸中國神貫郡好地村)

石鳥谷は近頃停車場を設けし所、北數町にして紫波郡に接し日詰驛と相距る二哩餘に過ぎず、山間の一小村落のみ

●日詰停車場 (岩手縣陸中國紫波郡赤石村字日詰)

日詰は國道を界として南北二町に分る、戸數六百、人口二千零十二を有す、驛の西に陣ヶ岡あり康平中源頼義、義家阿部貞任征討の時陣營を置きし今尚ほ遺濠あり、又東北上川に枕みて志波城の古址あり、坂上田村磨の築く所なりと

高水寺 日詰より北の方國道を行く里餘にして高水寺村あり、此村の古刹高水寺は稱徳天皇の御宇一丈の觀世音を諸國に安置せられし其の一

にして當時四十餘坊あり、其後文治五年源頼朝走湯權現を勸請せり、斯く名高き佛寺たりしが世の變遷と共に漸々敗頽して今は唯一宇草庵の名殘を止めたり

●盛岡停車場 (岩手縣陸中國南岩手郡厨川村字木伏)

○盛岡市 停車場を降り東に向つて行くと數十歩、北上川に架したる標梁あり明治橋といふ、舊は船橋なりしを明治七年始めて橋を架けたり、石の巻港より此の橋の下に至る凡そ五十里、漁船を通じて運搬の便を開く、盛岡の繁昌は此の川の便あるに依るといふ、此の橋を渡れば即ち盛岡市なり、此地舊南部氏の城邑にして今は巖手縣廳の所在地たり、市の廣袤東西一里南北十八町、市坊四十七、戸數八千二百餘、人口三萬千九百二十五あり、商戸軒を並べ、物貨輻輳、縣下第一の繁昌地たり、官衙にては縣廳を始め裁判所、警察署、監獄署其他學校諸會社銀行等一とし具はらざるなし、旅店の重なるものは村田藏之助(十三日町)清風館、

陸奥館(停車場前)杉本與兵衛、成瀬米吉(肴町)高田屋與吉(六日町)佐藤

正八(吳服町)等なり

安倍館 又厨河の柵といふ、安部貞任の居城址なりといふ、最上川に

沿ふて西懸應を距る二十町、南岩手郡厨河村に在り、傳へ聞く康平五年

九月十七日源頼義貞任をこゝに攻めて之を誅す、文治五年源頼朝藤原秀

衡を伐ち九月二日平泉を出で此に赴き義祖の故事に因り泰衡の首を此に

獲んとを期す、後工藤次郎なる者之に居り其孫光家に至り南部信長に屬

す、文祿元年南部氏其の故柵を毀ち今僅かに濠を存せり、柵の南西方に

方八町と稱ふる所あり、頼義此の柵を攻むる時屯營せし所なりと

○南部富士 は盛岡市の西方六里許りに聳立する高山を云ふ、岩手山と

も岩鷲山とも云へり、其の形甚だ富士に肖たるを以て南部富士の名あ

り、山頂に岩手山神社あり、祭神は大己貴命にして倉稻魂命、日本武

尊を合祀す、盛岡市街より望めば遠翠空を摩し其景美なり○見馴の松

は市の富豪菊池金吾の庭前に在り、明治九年東巡の時此家を行在とし庭

松に名を賜ふて見馴の松といふ○石割櫻 市内字内丸地方裁判所の門内

に在り、一株の古櫻長さ二丈幅一丈ばかりの巨石中より生し根の生長す

るに従ひ其石を割きたるものにして頗る奇觀なり○外山牧場 市を距る

南方七里に在り塲の廣さ凡そ四千町歩、牧牛馬數百頭、専ら洋種を撰ん

で改良を圖り居れり

綱張温泉 は盛岡市を距る西北六里許り南部富士の麓に在り昔しは道

路險惡なりしも三四年前其道を修繕して今は自在に車馬を通ず、地は東

西南の三方に南部富士の峰巒をめぐらし北は僅かに開けて一の棧道を通

し遠くは盛岡の市街を望み近くは栗石川の清流を下瞰し廣漠なる原野は

足下より起りて數里の間寂ら緑の毛氈を布きたるに異ならず亦一奇異な

り、抑も當温泉は昔し和銅年間奥州の猶ほ夷と稱せしころ一人の獵師道

に迷ひて此の山奥に分け入りし時遙かあなたにて水音聞えければ偕は瀧

なとの落るにやと近づき見れば岩の間より鑛泉三丈あまりも噴出し其湯溢れて一の流れを爲しぬ獵師は明る日里に歸りて此事を物語り遂に此湯の病に効能ある事をいひつたへ開つたへて浴客も非常に増加せしが當時は近傍宿るへき家もなかりしかば土人等は茅葺の類を集めて屋根となし丸木を伐りて柱となしつゝ、玆に幾棟かの小舎を造り漸やく雨露を凌ぐの便りとはなしけると目下は温泉宿大小數十戸ありて湯守を澤村龜之助といふ泉質は鹽類泉なり

●好摩停車場 (岩手縣陸中國北岩手郡巻堀村)

好摩驛 は盛岡市を去る十二哩七十七鎮、山中の一寒村にして北上川の沿岸に在り、溪水の潺湲たるも木樵る音の丁々たるを聞くの外更に又觀るべきものなし

●沼宮内停車場 (岩手縣陸中國北岩手郡沼宮内村)

沼宮内は北岩手郡中第一の市驛なれども素より山間荒僻の地にして絶え

て水田なく里人概ね稗粟の類を食し、貧しき者は芋栗を常食とするに至る、且つ山岳阻絶海を距つる十餘里、終身魚味を知らざる者多かりしほとにて近時鐵道の便開けて漸く都會の美を知るに至れり、現在戸數五六百、人口二千四百四十餘あれども概ね老屋にして古風を存す、夏時蚊多しと雖も蚊帳を用ひず蚊やり火を焚て避る者多しとなり、此地古へ沼宮内少輔の居りし所にて古城址あれども今は存せず、是より延長七百六十二呎の大塚谷の隧道を抜けて中山停車場に達す

弓弭清水 は沼宮内より北上川に沿ひ官道を北に行き早坂山と府金山との間を経ると二里餘にして御堂村に在り、路の左傍に觀音堂あり、源頼義の護身佛なりといふ、之を安置する寺を北上山新通法寺正覺院と號す、寺内に老杉あり、一は圍四丈、上四幹を分つ、一は圍三丈許り皆な寺背の小阜の上に生ず、堂右に岩ありて清水湧出し弓弭の清水といふ是れ北上川の源なり、相傳ふ天喜五年源頼義安倍頼時を討つ、時に炎暑

熾が如く兵みな渴を苦しめしかは頼義遙かに帝京を拜し、自から弓彈を以て岩を突きしに清水立るに湧く、後賊平らぐに及び一寺を創立し、義家戰時警に納めて被ふる所の河内國通法寺の觀音を安置す因て新通法寺と號すといふ、釜あり古色掬すへし、謂ふ義家飯を炊きたるものと、又近傍摺糠村、馬不喰村等あり里人の説に往時烈戰の時馬疲れて糠を食ふこと能はず故に是の名ありと

●中山停車場 (岩手縣陸奥國二戸郡小島谷村)

中山驛は陸奥國に入り始めての驛にして、實に山中の一驛たり、西行法師の歌に「東路のあひの中山ほと狭み心の奥の見えはこそあらめ」とは此所を云ふなり

●小島谷停車場 (全 上)

小島谷驛 も亦山中と一般唯だ山間の奇景を賞するに過ぎず更に觀るべきものなければ直ちに一ノ戸に進むべし

●一ノ戸停車場 (岩手縣陸奥國二戸郡一戸町)

一ノ戸町 は二戸郡中福岡に亞ぐの宿驛にして戸數七百餘人口二千五百二十餘あり、茲にて有名なる古蹟は末の松山なり

末の松山 又浪打嶺といふ、一ノ戸町より國道を北に行くと半里餘りにして達すべし、阪路羊腸頗る險阻を極む、鐵道は西の山麓の稍々平坦なる所を通過するなり、昔し此山を浪越せしとて路傍の岩石に浪の跡あり、又貝の化石せしもの山上より出るると浪打時とは名けしなり、其事の當れるや否を知らず「年浪の末の松山かすむなり松立てえて春や來ぬらん」又「見渡せば沖つ鹽風吹なへに霞こえ行く末の松山」みな此所を咏せしなり、是より石切所を経て福岡に至る

●福岡停車場 (岩手縣陸奥國二戸郡石切所村)

○福岡驛 は戸數八百許り、人口二千九百六十九ありて山中の小都會なり、驛の南に古城址あり、是は九戸左近將監政實なる者の城址にて、

政實は豊臣氏に反き屢々兵を交へ、遂に僧薩天なる者に欺むかれて豊臣氏の爲めに亡ぼされたりといふ、是より金田一を経て釜澤村あり、此所を以て岩手青森の縣界とす、縣界より一里餘りにして三ノ戸に達す

●三ノ戸停車場 (青森縣陸奥國三戸郡大向村)

○三ノ戸町 是三戸郡中八の戸町に亞ぐの宿驛にして戸數一千百餘、人口四千零四十五あり、驛東に鬱然たる者之を三戸城址といふ、何人の居城なりしや知るべからず、又東一里許りに名久井岳といふあり、四方岳とも稱す、其山上に長慶天皇行宮の址及び其山陵、長谷寺の遺趾等あり、然れども未だ信疑を詳かにせず、又三戸町より國道を行く一里許り路傍に唐馬塚といふあり、是は綱吉將軍清人伊孚九が献する所の波斯國(所謂亞刺比亞)産の二馬を南部家に預け放飼にして其の種を殖せしめしに其内の一馬死したれば此に埋めたりといふ、是より沖田面、斗賀等を過ぎ十二哩五十五鎖の長路を一氣に馳せて尻内驛に着す

●尻内停車場 (青森縣陸奥國北上郡尻内村)

尻内驛は三戸郡の東部に在る一小村落にして停車場は馬淵川の沿岸に在り、出で、數十歩にして其の橋梁(長さ八十四間)を渡り一里餘りにして八戸町に至る此處より支線あり東走して尻内港に達す

●八戸停車場 (青森縣陸奥國三戸郡八戸町)

○八戸町 是東北に於る一の港灣にして南部氏の舊城市たり、市街は三日町、十三日町、廿三日町(以上上町)八日町、十八日町、廿八日町(以上下町)朔日町、六日町、十六日町、二十六日町、大工町、鍛冶町、荒町、鹽町等の十數町より成り、戸數二千八百餘、人口壹萬零九百餘を有す、三戸郡役所、治安裁判所、警察署、及び病院、中學校、銀行諸會社あり、商賈軒を連ね、物貨輻輳す、港灣には大小の船舶常に出入して帆檣林立たり、此地今を去る七百餘年前源義經衣川の館を逃れて來りし頃は海岸に陋屋三四戸ありしのみにて、山中に入りても蝦夷人のみ住み居りし處なりしが

承久年間より人家漸く増加し寛文四年に及び南部直房此地二萬石を領せしより遂に今日の繁昌を見るに至れり、是を以て里人この地を小南部と云ひ、盛岡を以て大南部と稱へたりき、産物は馬を以て第一とし、昆布、鮭其他海産物頗る多し

長者山の風景 長者山は八戸城址に接する小丘にして下に新羅神社を祀れり、以前は三社の稱あり、中央に新羅三郎及び源義經、右に虚空藏菩薩、左に愛宕大權現を安置せしが明治六年神佛混淆を廢せられてより新羅のみとせり、山上に馬場を設け祭典の時は騎射、流鏑馬、打毬、相撲等を催す、この山北に鯉ヶ浦(即ち八戸灣)を望み、東階上山を帯び老杉鬱爾として空を蔽ひ、櫻楓梅桃其間を點綴して風光頗る佳なり、傳へ云ふ文治年中藤原秀衡の三男和泉三郎忠衡が股肱の臣板橋長治なる者義經主従を護して此の地に來り、長治一高地を選び假に芝を積んで垣となし、粗屋を其内に構へて竊かに居らしむ之を長治山と名く、後轉訛し

て長者山と云ふに至れりと

源義經の遺物

義經その後小田の山に居館を構へ之を高館と云ひ居る

數年(今の小田村なり八戸より西北一里許)頼朝義經の死せざるを聞き人を此の地に遣はし之を探らしむと聞き急に遁れて蝦夷に渡りしといふ、此の小田に入幡社あり義經の創する所にして今に其遺物なりとて大般若波羅密多經の書寫せしもの百五十卷を存す、義經及び辨慶、龜井、片岡等の書寫せしものといふ信偽は知るべからず

櫛引八幡

は市の西南半里許りに在り、近傍第一の大社と稱せられ舊

曆八月十四日大祭を行ひ、此日は神輿を出して八戸町に渡御し御前神社の川向ひに來り互ひに奉幣を獻するの古例あり、殊に當日は博奕を公許し各所に團欒して輸贏を争ひしが明治の聖代に至り此事を禁じ、祭典亦昔日の如く盛大ならず社殿の如きも大破に及びて今は唯だ名残をのみ止めたるに過ぎず

● 下田停車場

(青森縣陸奥國北上郡下田村)

下田は奥入瀬川に沿ひ三戸、上北の郡界に存る一村落下して全村の戸數五百五十餘人口二千零六十四あり、八の戸以北野邊地近傍に至るまで凡う十里間、廣邈たる原野にして恰も那須野に髣髴たり、之を三本木野と稱す、下田は實にこの曠原中の村落なるを以て更に見るべきものなし、是より五ノ戸まで里程三里半

● 古間木停車場

(青森縣陸奥國北上郡三澤村)

● 沼崎停車場

(青森縣陸奥國北上郡浦野館村)

沼崎は下田驛を距る十二哩五十八鎖、是又曠原中の一村落なり停車場に接して有名の小河原沼あり、車窓より右方に望むを得べし、水波瀲灩鴨鷺浮游す、風光極めて佳なり、この沼又の名を倉内沼と云ひ周回十三里二十四間、東西二里十町、南北三里十八町あり、五の戸川を容れ東して海に入る

牧場 小河原沼のほとりに故廣瀬安任氏の牧場あり、氏は頗る牧畜熱心の人たりしを以て牧老人の名あり、馬群草野に戯ふれ伯樂の一遇を俟つもの、如し、其他曠野に牧場多し、伯樂たらん人はこの地徒過すべからず「東路の奥の牧なるあら馬をなつぐるものは春の若草」
○壺の碑 沼崎停車場より西北、坪村といふ官道に接する村落に其古蹟ありといふ、碑は今土中に埋却して知れず、或は仙台に在る多賀城の碑を以て壺の碑となすものあれと誤れり「陸奥のいはてしのふは得ず知らぬかきつくして上壺のいしふみ」

● 野邊地停車場

(青森縣陸奥國北上郡野邊地町)

○野邊地 沼崎より此の地に至る人家稀疎平々坦々の道を進むと更に十三哩零六鎖にして此の地に達す、この地全村の戸數一千八百餘、人口六千三百十餘にして上北郡中第一の大村たり、港灣には大小の船舶常に出入し、驛は人家數百戸檐を並べ内に富商家頗る多く公園などもあり

て頗ふる賑はへる土地なり
 ○十符の菅薦 野邊地近傍の浦を十符の浦と呼びしとて此の地今も十符の菅薦を産せり、多賀城近傍にもある由前に記したるが何れが眞なるや
 ○馬門の戰場 野邊地より北官道を半里許り行き馬門と云ふ所あり、この邊戊辰の役津輕兵と南部兵と激戦せし所にて路上鳥居平に戦死者の墓あり○温泉 又馬門村に温泉二ヶ所あり馬門温泉といふ疥癬、眼病、金創等に効ありとて浴客常に多しといふ○花鳥の塚 は野邊地驛常光寺境内に在り、明治九年東北御巡幸の時御馬花鳥の斃れしを此に埋めしなり花鳥は米利堅産にて頗る駿足の名ありき

●小湊停車場 (青森縣陸奥國東津輕郡小湊村)

小湊驛は野邊地灣の西北方に位し海岸を距る十五町許り、漁業を以て生活爲す者多し、驛の右手に雷電神社あり、傳へ云ふ延曆中坂上田村麿の創立する所と、祀るところ何の神なるやを知らず、是より延長一千零

五十四呎の土屋隧道を経て淺虫に着す

●淺虫停車場 (青森縣陸奥國東津輕郡淺虫村)

淺虫驛は當地方有名の温泉場にして山を負ひ海に臨み風景絶佳の地なりむかし温泉にて麻を蒸せしに依り麻蒸と云ひしが後淺虫と書するに至れり、温泉は浴池凡そ十八所あり、泉質は硫黄泉にて効能は聞洩したり、其内鶴湯、椿湯最も清潔にして且つ効ありといふ、前灣に湯島、鷗島、裸島、など大小の島嶼碁布散在し奇景小松島といふも可なり、盛夏に方り避暑の遊人遊舫を浮べて島廻りを爲す殊に興ありといふ
 唐味棧橋 は淺虫の驛端に在り、むかし怒濤山根を噛み行旅道なきを以て纜かに棧橋を架けて往來すといふ、今尙ほ古蹟を存す山上に古城址あり空濠尙ほ存す里人之を蝦夷館といふ大河兼任の據て天下の兵に抗せし所なり、兼任は藤原泰衡の舊臣なり詐つて源義經と稱し建久元年陸奥に入り足利義兼、千葉常胤其他の諸豪雄と戦ひ屢ば敵兵を敗り、後遂に

敗られて逃れて龜山に至り樵夫の爲めに斧殺せらる（淺蟲より青森までの間に野内、浦町の二停車場あり）

●青森停車場（青森縣陸奥國東津輕郡青森安方町）

○青森町 是東北鐵道終極の市街にして青森縣廳の在る所、堤川は東境を環流し北は内海に灣面し縣下第一の良港たり、横濱、函館其他に定期航海船ありて大船小船常に港灣に碇泊し殊に北海渡航の要地と爲す、市街の廣袤東西二十五町、南北七町餘、市坊十七より成り戸數五千餘、人口一萬八千九百九十七を有す、商賈橋を連ね物貨輻輳し其の繁昌弘前市に譲らず、縣廳は市中新町の西に在り、尋常師範學校、警察署、裁判所、病院、銀行、新聞社其の他劇場、寄席等の諸興業物一として具はらざるはなし、又旅人宿は中島政吉、中村多助、津島彦太郎、田澤市太郎、宮川慶五郎等名あり、例に依り此の地より至るべき有名地の里程を左に記す

函館へ海上五十九里○弘前へ十里半餘○黒石へ八里二十六町○田名部へ二十四里三十町○七

戸へ十六里十四町○八戸へ廿九里廿三町

善知鳥神社 是市内安方町に在り、縣社にして市杵島姫命、多紀理姬

命、多岐都姫命を祭り大同年間の創建なり、社殿の壯麗にして古雅なる此地方稀に見る所あり、善知鳥神社の由來に就ては古來種々の傳説あり或は允恭天皇の御宇鳥頭中納言安瀉なる者罪を獲て此地に遠流せられ初めて宗像三女神を祭るとも云ひ又安部貞任の遺臣鶴藤某貞任の遺子を奉じて此地に潜伏し後ち獵師となり其靈魂化して鳥となりしを土人此社に祭りしとも言へり、前説稍や信ずるに足るもの、如し

外ヶ濱 是は青森灣内上磯より野邊地までをいふ、此の瀕海頗る名勝に富み風光明媚古來歌人の咏唱する所なり、蓋し外ヶ濱の字は宛字にて古へは卒土ヶ濱に作れり并は詩經の普天之下無非王土、卒土之濱無非王臣の句より起りしものにて當海岸は王土の果にして是より以外は往昔化外として王土に入れられざりし故なりと曰ふ、又馬琴の玄同放言に

は蘇塗ヶ濱と論じ、三才圖繪には素規の濱と書す何れが妥當なるを知らず、西行法師の歌に「みちのくのわくゆかしくも思ほゆる壺のいしぶみそとの濱風」

油川 は青森灣に面する一村落にして青森を距る北壹里餘、又の名を大濱といふ、此の地青森よりも前に開け城廓もありて今の青森の如く繁昌せし土地なりしが津輕信牧開港場に適せざるを見て銳意善知鳥村に港を開き、爾來油川に於て木綿小間物等の賣買を禁じ且つ船舶成べく善知鳥の新港に碇泊するやう告諭せしかば油川は頓に衰頽して其の繁昌を青森に奪はれしといふ

奥羽鐵道

奥羽鐵道は日本鐵道東北線の最終停車場なる陸奥の青森町より起り弘前市より羽後に入り羽州街道に沿ひて秋田市に達し尙ほ進んで羽前の

山形、米澤の二市に通じ板谷峠を貫きて岩代に出で再び日本鐵道の福島停車場に連絡すべき官設鐵道の名にして目下工事中のものなり、故に茲には既に運輸を開始せし北端の一小部分即ち青森より弘前に至る二十三哩二十鎖間の沿道各名勝舊蹟の案内を掲ぐべし

●新城停車場 (青森縣陸奥國東津輕郡新城村)

新城は弘前街道(國道)の一驛にして青森を距る一里廿四町、油川を距る一里にして今は新城、石江、戸門其他の數村を併せて新たに村制を布き戸數五百六十、人口二千四百三十を有す、南方の山上に壘塹ありて中に古井を存す傳へて金賣橘次の故里なりと云ふ、橘次は山城鞍馬山より源義經を陸奥に伴ひ來りし人なり

妙見堂 新城の南西一里餘の處に在り(青森町より赴く方稍や邇し)此祠は大同年間阪上田村磨の創建する所にして祠畔に櫻樹百餘株あり花候に至れば近傍士女の來り遊ぶ者多し、此祠に秘藏する所の古舞樂の假面

は田村將軍の蝦夷を征討する時に用ひしものなりと云
 炭焼藤太の舊趾 - 新城驛の西十門村の山中に在り、岩石相重りて一の
 洞窟を爲し自から一家屋の如し、相傳ふ藤原秀郷の裔藤太頼秀金賣橘次
 の爲めに助けられて此處に來り止まり炭焼きを業として跡を潜めたりと
 頼秀は即ち津輕伯爵の遠祖なり

●大釋迦停車場 (青森縣陸奥國南津輕郡大杉村)

大釋迦は同じく國道の一驛にして津輕阪の南麓に在り、先年新道を津輕
 坂の北麓より牧川に沿ふて開鑿し自由に車馬を通すべし、大釋迦は今ま
 大杉村に屬し戸數一百戸ばかりの小驛次なり

●浪岡停車場 (青森縣陸奥國南津輕郡浪岡村)

浪岡は青森町と弘前市との中間に在る國道の一驛にして戸數凡そ三百戸
 を有し市街の殷賑なる遙かに他の驛に優れり、其の東方に故城趾あり北
 畠顯家の孫顯成の居りし處にして世之を浪岡御所と云ふ、其南八九町を

隔てたる山地荆棘の間に北畠累世の墓碑にして五輪塔を爲すもの數基あ
 り黒石に赴かんとする旅客は多く此地にて汽車を降る、近傍の名所は一
 括して之を左に掲ぐ

金光上人の墓 是浪岡の東、五郷村大字北中野に在り、金光上人は淨土
 宗の開祖圓光大師の高弟にして筑後國石垣の別當たりしが後ち大師の命
 を受けて東北諸國を巡歴教化し此地に來りて寂す○法嶺 五郷村大字本
 郷の東山中に在り、日蓮宗信徒の最も崇敬する靈場にして曾て日蓮の高
 足日持上人蝦夷に渡航せんとするに先だちて此嶺上に登り石面に六字の
 名號を留めて遂に其行く所を知らずと云ふ、今ま石面に存するものは其
 の筆跡なりと○八幡宮 浪岡驛の東北三町許りの處に在りて今は郷社に
 列す、延暦年中阪上田村磨の勸請せし古社にして譽田別尊を祀る、其の
 東隣に加茂神社あり昔年北畠氏の創建する所なりと

○黒石町 浪岡停車場の南二里廿町の處に位する一市街にして舊弘前

の支藩津輕承叙の治所たり、土地高燥にして黒石川其の南境を貫流し西北に十里の曠野を眺望すべし、市坊の數二十、東西十八町、南北十二町にして戸數一千二百を有し郡役所、警察署、郵便電信局等あり、其城趾は町の南端に在り今は壘壁を毀ち其趾に黒石神社を鎮す

黒石神社 黒石町字市ノ町舊城趾に在り、縣社にして黒石藩祖津輕信英の靈を祀り明治十二年の創建なり、境地は繞らすに塙塙を以てし古杉老松鬱然として繁茂し社殿も亦清洒なり

中野溪 黒石町の東南二里の山中に在りて中野川の水源なり山幽に樹暗き處溪水潺湲として流れ晚秋に至れば數百株の楓樹露に染みて錦繡を晒すが如く實に二月の花よりも紅るなり、又溪深き處に一瀑布を懸く水岩角に遮られて白沫飛散し亦一層の景致を増せり、

板留、温湯温泉 中野溪の近傍二ヶ所の温泉あり一を板留と云ひ一を温湯と云ふ、共に山形村に屬し黒石町を距る凡そ一里半なり、鹽類泉に

して二ヶ所とも旅舎數戸あり、土地高燥にして淺瀬石川(黒石川の上流)の貫流するあり夏日浴客多し、其近傍黒森山あり亦眺望に適す

●川部停車場 (青森縣陸奥國南津輕郡光田寺村)

停車場の東十町藤崎驛あり國道に衝り黒石川、平川の合流する處に在り此地は寛治六年安倍貞任の季子高星丸の城きたる舊趾にして爾來子孫相繼で之に居る、元享二年安東堯勢なる者首として北條氏に叛き勢ひ強大後ち安東氏秋田に遷る、今猶ほ微かに其の城趾を存すと云ふ(黒石町に抵る者此停車場より赴く方最も邇し)

猿賀城趾 川部停車場の東南二里、猿目村大字猿目に在り、縣社にして上毛君田道の靈を祭る、創建年月は遼遠にして詳かならざるも大同年間阪上田村磨社殿を再興し治承二年には藤原秀衡、建武二年には北畠顯家金若干を寄附して大に社殿を造營せしめ維新前までは寺領百石を寄附せられ且猿賀山神宮寺其の別當たりしが維新後之を廢せり、境地幽邃に

して一見其古社たるを知るに足るべし

大光寺城趾 猿賀村の隣村大光寺村大守大光寺に在り、奥州大崎城主葛西氏の裔來りて之に居る數年、後ち南部氏、瀧本氏交々之に住し慶長年中津輕藩祖爲信來り攻め瀧本氏を追ふて遂に城を陥る、爾來世々津輕氏に屬せしが後ち黒石藩にて遂に之を毀てり

●弘前停車場 (青森縣陸奥國弘前町)

○弘前市 舊津輕藩の城市にして陸奥第一の都會たり、地は中津輕郡の東部に位し西は岩木川に臨み東西三十四町、南北一里五町、戸數凡そ六千四百を有し街衢縱横に通じ其の中央に壘壁長く繞り城櫓の高く聳ゆるものは其の舊城趾なり、城は慶長十五年藩祖信牧の築く所にして傳へて十一世承昭に至り初めて郡縣一統の世となり城は陸軍省の管轄に屬せり、又市内に大圓寺あり創建年月は未だ詳かならざるも塔は寛文四年工を起し同七年落成せしものにして高さ十七間餘、汽車の弘前に近づくに

隨ひ遙かに其の尖頭を望み得べし、市内に裁判所、市役所、警察署、郵便電信局、學校、病院、銀行等あり又旅店には本町の永井養父太郎元寺町の齋藤榮助、同町の齋藤吉六、一番町の佐々木清次郎等最も名あり、例に依り市内重立たる神社佛閣等を左に列記すべし

東照宮 當社勸請の由來を綜ぬるに津輕信牧の室は徳川家康の養女にして松平康元の女たり且信牧は天海僧正の弟子となりて歸依厚かりしかば天海幕府に請ふて宮を津輕城内に營むべき允許を得、初め城内に創設せしが寛文元年城の東隣即ち今の地に移し別當東照院をして之を護らしめ維新後縣社に列せられたりと

八幡宮、熊野神社 俱に縣社にして字宇田町に在り、八幡宮は舊藩政の頃當城の總鎮守にして藩主の崇敬最も厚かりき、此社は元と鼻和の庄八幡村に鎮座せしを慶長十年今の地に移して新たに社殿を造營せりと、祭る所は譽田別尊、息長足姬命、姬大神の三神なり、熊野神社は楡御氣野

命以下四神を合祀し崇神天皇の六十七年に創建し延暦年間坂上田村麿今の地に移して社殿を造營すと云ふ、市内第一の舊社なり

長勝寺 市街の西茂森町に在り、津輕氏累世の香華院にして全郡曹洞宗の録所たり、大永六年僧菊仙の草創に係り後ち慶長年中今の地に移せしより堂塔伽藍壯麗を極め市内屈指の巨刹となれり

編者云ふ是にて弘前市までの案内を終りたれど同鐵道は不日秋田縣下へまで延長して運輸を開かるべきを以て左に弘前市近傍（南は奥羽羽後の國界まで）の名勝五六を掲げて讀者の一覽に供す、秋田縣下の部は鐵道落成の後ち本書再版の機もあらば之を追加増補すべし

高照神社 弘前市の西一里、岩木山の東麓岩木村大字高岡に在り、縣社にして武甕槌神、經津主神、天兒屋根命を祀り別に一祠を建て、津輕藩祖信政の靈を鎮す、社宇は本社、拜殿、神樂殿、神饌所、樓門、神馬所、舊藩士詰所、神橋等にして信政の祠は其の背後に在り、古松老杉鬱鬱と

して茂生し其の祠宇の壯麗なる鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮と相肖たる所あり、世人此社を高岡ノ宮と稱す

岩木山神社 同村大字百澤村、岩木山の麓に在り、國幣小社にして顯國魂神、多都比毘賣命、宇賀能賣命を祭り延暦十五年の創建なり、現在の社殿は本社、拜殿、瑞籬、神樂殿、繪馬殿、神橋、樓門等にして神殿は黒塗の柱を用ひ承塵其他の板壁等には飛禽走獸の彫刻を施し金碧燦然として人目を眩す、毎歲七月を以て大祭を執行し襄人群集す

岩木山 中津輕郡岩木村より西津輕郡中村に跨がり弘前停車場より西三里餘（直徑）に位し峭嶮天を摩せんとするもの、如し、麓より頂きに至る山路一里廿五町、其中腹より頂上までの間は石徑崎嶇として傾斜急峻、健脚の人と雖も躋り易からず、其の山容駿河の富嶽に似たるを以て世に津輕富士と稱し休火山に屬す

嶽の湯温泉 岩木山の南腹、岩木村大字常磐野に在り、硫黃泉にして

浴槽二ヶ所あり。地は三面山脈連亘して南方原野を下瞰す、弘前停車場より西一里廿五町百澤村までは人力車を通じ夫より温泉場まで三里の山道にして僅かに馬を通ずべし、浴場の傍ら旅舎數戸あり夏季は浴室群集し或は絃を弾じ或は鼓を鳴らし狂吟漫舞却て人を俗了するの地なりと云ふ其の近傍尙ほ三本柳、湯段等の温泉ありと云

長慶天皇の陵 弘前の西南二里餘、相馬溪の上紙漉澤村の山上に在り土人稱して上皇堂といふ、長慶天皇の裔孫常照院と號して世々其御陵を守り居たりと云ふ、其の佛堂に藏する所の古記録等には當年歴史の遺滿を補ふに足るものあり委しくは拙著「日本名勝地誌」に在り

乳井毘沙門堂 弘前市の東南二里、國道の石川村に在り、白河天皇の承暦二年八月東夷調伏の勅願として建立する古刹にして大同年中阪上田村磨之を再興し慶安以來津輕家に於て寺領を寄附せり、其の別當を喜承山福王寺と云ひ境内一ノ井泉あり水色少しく白濁にして乳汁の如し、故

に呼んで乳井と云ふ

石川城趾 平川に臨み嶺頭突兀たる處其の舊趾なり、牙城は石川村西南四町餘にありしものにて今猶ほ一丘陵を爲し字して大佛ヶ鼻と云ひ近年まで塹壘の跡を存せしとぞ、舊史を案ずるに天文二年南部安信之を城き弟高信をして守らしめしを永祿十二年五月津輕爲信來り攻め高信力竭きて自盡し城遂に陥いる云々

藏館温泉 國道の藏館村大字藏館に在り、弘前停車場を距る四里十町にして土地は前に平川の清流を臨み後ろに丘陵を負ひ平川を隔て、左記の大鰐温泉と相對す、泉質は鹽類泉にして浴槽三ヶ所あり其の近傍浴舎數戸を連ぬ、又此地に大日堂あり大圓寺と云ふ堂前に萩桂の古木あり高さ十餘丈、周り一丈餘、枝條屈曲して桂樹に同じく花は胡枝花に似たり、亦稀代の一奇樹なり

大鰐温泉 藏館温泉の南に隣り平川の橋梁に由りて相往來すべし、泉

質は鹽類泉にして泉口は河原湯、熱ノ湯、大湯等の數口あり、俚傳に依れば此地は元と鱒倉と稱し蘆茅擅まゝに繁茂し人烟甚だ稀なりしが後年津輕爲信眼を患ひ此地の温泉に浴して癒ゆるを得たり因て一の佛刹を泉側に營み里人をして浴舎を開かしめ廣く患者の入浴に便ならしむるに至れりと、其の地勢風景は藏館温泉に同じ

水戸鐵道

日本鐵道會社の水戸支線は同社の東北線小山驛より分岐し茨城縣水戸市に至る支線をいふものにして全線路中停車場の數十ヶ所、線路の延長四十一哩四十五鎖とす、旅客は東京よりするも奥羽地方よりするも皆此の小山驛にて列車の乗換へを爲すを要す、左に小山驛以下各停車場近傍の案内を爲すべし

●小山停車場 (栃木縣下野國下都賀郡小山町)

小山停車場の事は東北鐵道の部に詳しく記したれば茲に再録せず

●結城停車場 (茨城縣下總國結城郡結城町)

○結城町 は舊水野氏の城邑にして結城郡の北隅に偏在し東は水戸市に通じ東南は關本、下妻を過ぎて土浦町に達し西南は境町及び小山に出る二道あり、戸數二千九百餘、人口一萬百五十三あり、地に區裁判所出張所、郵便電信局等あり、人家稠密、物貨輻輳、商業繁盛の處たり、物産は結城木綿、紬等にして町内機織の業に従事する者多し、又町内に稻荷社、八幡社、天皇社、弘經寺、稱名寺等あり、弘經寺は淨土宗にして文祿四年結城秀康の開基、稱名寺は眞宗西本願寺派に屬し眞佛房の開基に係り關東七箇寺の隨一なり

玉日宮ノ墓 結城町字玉日に在り五層の石塔にして古木鬱鬱たる間に在り、按ずるに玉日宮は月輪關白藤原兼實の女にして親鸞上人の配なり其の終處に就ては諸説一ならずと雖も一説には親鸞死して後ち下野芳賀

郡に來り更に此地に移り偶々病を得て死せりと

●川島停車場 (茨城縣常陸國眞壁郡伊讚村伊佐山)

川島は眞壁郡と結城郡との郡界に在る小町村にして鬼怒川の東岸に位し今は伊讚村の一部に屬せり關本町は是より南一里に在り

鬼怒川 又縮川と書す、むかしは毛野川と云へり、源を下野鹽谷郡川

又村の衣沼山に發し東流川沼村にて五十川を併せ河内郡大渡村にて大谷

川を容れ鹽谷芳賀と河内都賀の郡界を南流して下總に入り終に利根川に

會す、線路には長さ六百九十四尺の鐵橋を架し之を渡れば即ち川島停車

場にして河畔には停車場の荷揚場あり

●下館停車場 (茨城縣常陸國眞壁郡下飯町)

○下館町 は元と石川氏の城下にして戸數一千二百、人口五千五百二十を有し郡役所あり、區裁判所出張所あり、警察分署あり、又西北八幡神社の境内を以て公園地とす、物産の重なるものは晒木綿にして世に眞

岡木綿と稱するものは多く下館近郷より製出す、此地は東南に筑波、加波、足尾の諸山を望み北は二荒の山嶺と相對す、是より西三里にして眞壁町に至り南三里にして下妻町に達す

椎尾山藥師堂 は下館停車場より東南三里餘、眞壁郡紫尾村大字椎尾

に在り、山は筑波山脈の餘勢を受けて別に小峯を爲し、幽邃にして閑雅

山腹に一條の瀑布あり懸崖より落つ、老樹森々として涼風自から至り實

に避暑の好地なり、山上に藥師堂あり縁起を見るに本尊藥師如來は印度

傳來の古佛なりと云ふ、山中に旅舎三四戸ありて宿泊料は通じて三十錢

内外、下館停車場より人力車に廿五錢を賃すれば一時半にして達す

○下妻町 は眞壁郡中有名の驛市にして下餘町より南方三里餘に位す

元と井上氏の采邑にして戸數八百五十餘、人口三千八百六十四を有す、

此地は中古下妻四郎弘幹の住みし處にして市街の西方に大寶城の故趾あり

り今も大寶八幡社の在る處是れなり、又社の南に沼あり水を隔て、關城

趾あり南北朝の時北畠親房の據りし處なりとぞ
 光明寺 下妻町字城廻りに在り、眞宗にして建保年間三浦義忠の開基に係り、本堂、開山堂、鼓樓、鐘樓、寶藏等あり、又境内に親鸞上人手栽の菩提樹、明空(義忠の法號)手栽の杉樹等あり、其他古木鬱々として其周圍に茂生し最も夏季の避暑に適す

●岩瀬停車場 (茨城県常陸國西茨城郡西那賀村)

岩瀬は今ま西那賀村に屬し下飯驛を距る八哩二十二鎖、其の停車場は大宇犬田村に在り、是より眞壁町に至る道あり道程凡そ二里半
 櫻川の櫻花 郡内磯部村に在りて停車場を距る東北一里許り、謠曲の櫻川即ち是地にして古來櫻花の名所なり、櫻川の水は村の中央を貫流し其の兩岸に數百株の櫻樹あり彌生の頃は白雲里餘に連なり士女の來り遊ぶ者多し、村内に磯部神社あり今ま稻村神社と稱し天照皇大神、瀬織津姫命、木花開耶姫命を祭る、社傍に一碑を建て和歌一首を碑面に刻す曰

く「いつよりも春邊になれば櫻川浪の花こそまなく寄すらめ」と是れ紀貫之の舊詠にして葉室顯孝の書する所なり

富谷観音 岩瀬停車場の北半里北那賀村大字富谷に在り、天台宗にして小山寺と號し天平七年聖武天皇の勅願に依りて草創せし古刹にして開山は行基僧正なり、寺域は丘陵の中腹に位し登路僅かに六町に過ぎずと雖も眺望頗る快豁なり、堂宇には本堂、観音堂、三重塔、二王門、鐘樓等ありて本尊十一面觀世音は慈覺大師の作なり

雨引山 筑波山の一支峯にして岩瀬停車場の東南に聳ゆるもの是れなり、雨引村大字本木より登れば七八町にして巔きに達すべく其の途中延命観音堂あり坂東二十四番の札所とす、此山も亦櫻樹に富み其巔きに達すれば眼界豁然として開け風色頗る佳なりと云ふ

筑波山 筑波郡に屬し麓は眞壁、新治の二郡に跨がり峯尖二つに分れ西を男躰、東を女躰といふ遠く之を望めは殆ど馬耳の相並べるが如し

其最も高き處は海面を抽くこと三千六百尺、實に關東屈指の名山とす、偕此の靈山に登らんとするには順路三あり、眞壁町より途を羽鳥に取るもの、筑波町よりするもの及び椎尾山よりするもの是れなり、筑波町よりするものは之を表坂と云ひ本道に屬し椎尾山よりするものは路近けれど最も峻し而して汽車の旅客は眞壁町よりするを便とす、旅客は先づ岩瀬停車場より腕車を驅りて眞壁町に抵るへし同所には龜屋以下二三の旅舎あり、茲にて車を棄て、案内者を僦ひ徒歩登山の用意を爲し平原を行くと南里餘にして羽鳥村あり是より山路に就きて足指漸く仰ぎ登り廿五町にして出村に至り五六町にして藥師堂の傍らに出づ、此より道は深林の中に入り峻愈々峻を加ふれども行くに隨ひて眼界開け男躰の峯は高く頭上に聳え足尾、加波の二山は既に脚下に在り、往て石の華表に達すれば茲より筑波郡に屬し絶頂まで二十五町なり、既にして男躰の頂きに達すれば茲に筑波山神社の本社殿として鎮座し左右神社數字あり之を男躰

の社と云ひ祭神は伊弉諾尊なり、是より社内を下り鐵鎖にすがりて九折の危道を辿り御幸の原を過ぎ又登ると半里にして女體山に到る、茲にも一社あり伊弉册尊を祭りて女躰の社といふ、山上より望めば常陸の山々は眼下に集まり西には富嶽を仰ぎ南には遙かに利根川の白帶及び房總の遠山を眺め、空隙雲なき時は東京の品川灣をも矚み得べし、風色の絶佳なる筆紙の及ぶ所にあらず、又山中には葉山の里、龜ヶ岡、女男の川等の名勝あり南方の山上には中禪寺の故趾ありて皆な一顧に値ひす、是より歸途に就けば道愈々峻にして途上北斗岩、大黒岩、雷神の窟、辨慶戻り岩、歡喜天堂あり二十五町にして山麓筑波町に出づ、筑波町には旅舎あり料理店ありて夏日の避暑に宜し

●福原停車場 (茨城縣常陸國西茨城郡西山ノ内村)

福原は水戸街道の一小村落にして西山ノ内村に屬し近傍見るべきもの甚だ少し、唯だ東方十五町許りに左記の稲田神社あり

稲田神社 西山ノ内村大字稲田に在り、縣社にして奇稲田姫命の祭り本社、拜殿、神樂殿、神饌所、神庫等豊を連ね老樹森々として其の四方に繁茂し境内頗神さびたる趣きあり、創建年月は未だ詳かならざるも延喜式神名帳に見えたる舊社なり、藤原光俊歌あり曰く「千早振この神垣も春立ちぬ籬の川上は氷とくらん」

西念寺 福原停車場より前記の稲田神社に到る途中に在りて同じく稲田村に屬す、眞宗にして建保年間親鸞上人の開創に係り今は東本願寺に隸す、往時は堂宇頗る莊嚴を極めしも二百年前池魚の災ひに罹り爾來再興すと雖も其觀舊時の半ばにも及ばすと云ふ、本堂には親鸞上人作の阿彌陀佛を安置して本尊とす

●笠間停車場 (茨城縣常陸國西茨城郡下市毛村)

○笠間町 是舊牧野氏の城邑にして郡中第一の都會なり、戸數二千八百五十餘、人口六千九百餘を有し西茨城郡役所、區裁判所出張所、警察

署等皆な町内に在り、居民は農商相半ばし市街稍や殷賑なり、笠間城趾は字日草塲佐白山の巔きに在り昔し平忠道押領使とし元文の頃笠間持朝來り住す、又此地に胡桃下の稻荷と稱する神社あり社殿は宏大ならざれども地方の流行神にして四方遠きを厭はず來り詣づる者頗る多く縁日には殊に繁昌なり、是より石岡町へ四里餘、土浦へ七里

佐志能神社 笠間町の東佐白山舊城趾に在り、延喜式内に列し仁明天皇の承和二年以來の創建に係り今は縣社なり、牧野氏舊城を毀つに當りて其材を以て本社を造營し境内に多くの櫻樹を植ゆ、春風駘蕩の候には老若男女の瓢を提げ行厨を携へて來り遊ぶ者多し、其の東北隅に石倉と稱する地あり危岩突兀として奇狀を呈し老樹亭々其間に點綴す、又雨降櫻あり周り二丈餘、如何なる晴天の日と雖も其樹下に至れば枝葉より露點々滴りて絶ゆることなし故に是名ありと

片庭の大杉 笠間町より西北一里餘、北山内村大字片庭の佛頂山に在

り、樹の高さ五十間餘、周圍五丈餘にして千餘年を経たる稀世の老杉なり、元と此地に楞嚴寺といへる古刹ありて杉は其の境内に成長せしものなりとぞ、今猶ほ里人は注連を張りて之を大杉大明神と尊稱す

●穴戸停車場 (茨城縣常陸國西茨城郡穴戸町太田村)

○穴戸町 是西茨城郡の東端に在りて東茨城郡と相接す、平町村、太田町村、橋爪村其他數村を併せて町制を布き戸數凡そ七百五十、人口凡そ三千九百八十を有す、此地より新治郡の石岡へ凡そ五里、土浦へ同じく八里餘、二驛に抵らんとする者は此處より下車すべし

●内原停車場 (茨城縣常陸國東茨城郡内原村)

水戸街道の北半里に在る小村落なり、水戸市を距る二里半、近傍に案内すべき名所舊蹟なし

●水戸停車場 (茨城縣常陸國水戸市字上市柵町)

○水戸市 茨城縣下第一の都會にして維新前に在りては徳川副將軍の

城下たり、市の廣袤東西一里餘、南北十五町餘にして戸數七千七百餘、人口二萬五千九百十五を有す、北に那珂川を控へ南に千波沼を擁し舊水戸城は其中央に屹立し市街人家は其の東西に分たれ西を上市と云ひ東を下市と稱す、人烟稠密、物貨輻輳、豪賈巨商多くして常に殷賑を極む、上市に縣廳、地方裁判所、師範學校、中學校、警察署、郵便電信局あり其他銀行、新聞社等は多く上市に在りて下市には問屋の簷を連ぬるあり旅舎には上市泉町の鈴木屋、伊勢屋、麴屋を以て最とし割烹店には垂楊亭、花月樓あり、又此地の北方に三條の驛路あり一は濱街道にして南長岡より來るもの、一は久慈郡の太田大中を過ぎて磐城に出づるもの、一は西北を指し那珂郡の瓜連、大宮に通ずるもの是れなり

水戸舊城 是往時大塚氏の築く所にして始め馬場城と云ひ江戸通房の時に及びて内城と呼ぶ、尋で佐竹義宣に至り本城の西に一廓を増築して淨光寺廓と稱す是れ實に文祿年間在り、慶長十四年十二月水戸源成

此地に封せられ傳へて子孫數氏に至り明治二年昭武の時版籍を奉還し同年城内に火を失して天主閣其他の樓屋は悉く灰燼に歸し今は僅かに城樓を存するのみ、而して今日は師範學校、博物館等の敷地となれり

常磐公園 一に偕樂園と云ひ日本三公園の一と稱せらる、水戸市の西南二十町許り東茨城郡常磐村字神崎に在り、停車場より人力車に八錢を賃すれば公園の東隅に在る常磐神社（神社の事は別に項を設けて記載すべし）の華表前に導くへし、抑も此公園は天保十三年徳川齊昭（水戸烈公）の初めて開きしものにして地は鐵道線路より高きこと四五十尺、園内の坪數凡ろ三萬坪にして屋宇數棟あり、樓を樂壽樓と云ひ亭を好文亭と云ひ庵を阿陋庵と云ふ是れ皆烈公の遊息所たり、公自ら偕樂園の碑を建て、其事を記す、碑は自然の平石にして高さ八尺三寸、幅八尺、碑面には篆書にて六百十字を勒す、上に古篆にて偕樂園記の四大字を題し周りに梅樹の模様を描き背面に園中の禁條を掲ぐ、碑石の前を東に出づ

れば總て庭園にして東北の間は皆な梅林なり、東西凡そ二百間、南北六七十間許りにして梅樹五千餘株あり、南は一面の芝生にして崖よりは千波湖を下瞰し庭中萩其他の花卉を植ゑ春秋の眺め最も妙なり、東は直ちに常磐神社の境外に接し西は櫻川の清流に枕む、沿岸の崖上に十株ばかりの古松あり其下に石造の碁盤を設け名けて仙奕臺と云ふ、東南千波湖を望めば碧水渺茫、妙法崎、梅戸崎は北岸に沿ふて常磐山の深林と連り三魂ヶ崎は東岸に斗出して濱田の市坊及び藤柄の人家を控へ又遙かに磯濱の松原を望む、四時の風景に富むが中にも仲秋の月、白妙の雪の晨は其眺め殊に佳なり、凡そ騷人墨客の眼を娛ましめ心を慰むるもの皆な願盼一瞬中に在り、又同所南の崖下に八景中の一碑あり自然石にて高さ四尺五寸、幅三尺七寸、烈公の隸書にて仙湖暮雪の四大字を刻す、公曾て封内の勝地を選びて八景を置く此地は即ち其一に居る、其他園中の勝は一々數多可からず茲には僅かに其の十分一を記して世間烟霞を好む者の

來りて實見せんとを促すのみ

常磐神社 借樂園の東隣に在り、同園の一隅を割きて社地と爲したるものにして本社には水戸藩主徳川光圀(義公)同齊昭(烈公)の靈を合祀す、去る明治五年の創立に係り同十五年別格官幣社に列せらる、祠宇甚だ宏壯ならずと雖も賽人常に絶えず、社傍に神樂堂あり中に烈公造る所の陣太鼓を納む、太鼓の徑四尺五寸、胴の周圍一丈五尺五寸、長さ六尺二寸、左右に烈公自筆の銘あり又烈公が鑄造せしめたる臼砲あり、社地を下りて表華表に出る阪路の傍らには花月樓津國屋と云ふ清香庵等の割烹店あり就て一酌するに宜し

第二公園

水戸市に公園二ツあり常磐公園を第一公園といふ故に第二公園の名あるなり、第二公園は元と弘道館のありし所にて上市三ノ丸に在り、坪數一萬七千六百五十八坪を有す、弘道館は烈公之を創立し以て文武の稽古場に充てし處なり、境内に鹿島神社、種梅の碑、弘道館の碑、

要石歌の碑、孔子廟等あり、弘道館碑は高さ一丈餘、幅六尺餘の寒水石にして八角堂の裡に在り碑文は篆書にて五百十字、烈公の自ら撰する所なり、園内凡そ空地なる處はすべて梅樹を植ゑ古へは其數一萬株と稱せしが今は八百餘株に過ぎず、元の弘道館は園の東端に在り今ま幼稚園に充て又館内に弘道學會なるものを設く

大洗海水浴

常陸東海岸に於る有名の海水浴場にして水戸市を距る東三里、上市三ノ丸字杉山通りの川岸より那珂川通ひの立舟に搭じて那珂川を下り那珂港の對岸字祝町に上陸し是より二十町の海濱を辿れば海濱松樹の林立する處に出づ是れ大洗なり、水戸より祝町まで借切の舟賃三十錢、乗合ならば一人四錢五厘、幸ひにして順風なれば一時間餘にして達すべし、其地に至れば海岸に浴ふて旅舎の軒を連ぬるあり曰く金波樓曰く魚來庵、曰く小林、曰く梓屋、皆傍ら割烹の業を兼ね、欄に倚れば怒濤の岸を噛み漁舟の波間に隱見するを望み風光絶佳の地なり、各旅舎

ともに樓下に潮水の温浴場あり、磯濱は漁村なるを以て魚鮮にして價廉海中には多く鮑を産す是れ此地の名物なり、歸路は道を磯濱街道に取り水戸市に出で停車場に來るへし、人力車賃は三十五錢にして二時間なれば停車場に達すべし

大洗磯崎神社 同所海水浴場の後山に在り、國幣中社にして大己貴命少彦名命を祭る、嶮しき石階魚耒庵の前より通じ左右老樹翁鬱として枝を交ふ、磴を登り盡したる處に本社拜殿あり、白砂青松の間遙かに鹿島灘を望み風光絶奇、縣下第一の勝區と爲す、社後に一坦地あり稚松雜生す、之を子の日原と云ひ水戸烈公の建てたる碑石あり

◎編者云ふ是にて水戸近傍の案内を終りたれと同じ常陸國に屬する左記の鹿島神宮以下二三の名所は編者の義務として東道の勞を取らざる可からず、但し總武鐵道の延長線落成の日に至らば東京より赴く者は同線路に據るを以て便利とすれども茲には姑く水戸線の終りに附記す

る事とはなしぬ

鹿島神宮 先づ此神社に參詣する順路を言へば水戸より前記大洗行の途を取り舟又は車にて磯濱に出で是より南五里の間を人力車を驅り銚田に出づべし、銚田は北浦の北岸に在る一小市街にして二三の旅舎あり、茲より小汽船又は和船に乗り南六里の湖上を航すれば東岸に大船津ありて一の華表は此處に建てり、鹿島神宮は其東十餘町、鹿島町大字宮中に鎮座し官幣大社にして武甕槌神、經津主神、天兒屋根命を祭る、社殿巍々として頗る壯麗を極め奏者社、神樂殿其他の社宇各處に散在し有名なる要石、御手洗池、御笠山等は皆其の境地に屬せり、要石は本社の一町餘の處に在り、石頭地上に抽づると二尺許り其頂きに凹處を存し全形稍や圓し、四方には瑞籬を繞らし前面に華表を設く、相傳ふ地下に大魚あり鹿島明神此石を以て其魚に釘し自在に撥動するとを許さず、石根地中に入ると數百尺何人も未だ其深きを窮むる能はずと

根本寺 同所に在り、大船津より四町、鹿島神宮より七町餘を隔つ、
禪宗臨濟派に屬し推古天皇の御宇聖德太子の草創せし古刹なり、堂宇莊
嚴、本尊瑠璃光如來は聖德太子の作にして靈驗著るしと言傳ふ

息栖神社 鹿島町の南三里弱（水路よりすれば二里半）中島村大字息
栖の水邊に在り、履中天皇の御宇三年の創建にして久那斗神を祭る、鳥
居は湖岸の水中に在り其の近傍女瓶、男瓶と稱する奇石あり、社殿清酒
にして老樹亭々四方を圍繞し風景頗る佳なり

香取神宮 下總國香取郡香取村に在り、息栖神社の川岸より利根川を
溯ぼると二里餘、津の宮川岸より上陸し南に行く半里にして神宮に達す、
官幣大社にして經津主神、武甕槌神、天兒屋根命を祭り古へより著名の
神祠なり、境内には本殿、拜殿、神樂殿、神饌所、樓門、并に攝社末社
數字あり境内の名蹟には龜甲山、木母杉、弓掛杉、斥候杉、牧野、釜塚、笠塚
等枚擧するに遑あらず又本社背後に櫻の馬場と稱する神苑あり一堆の

高地にして櫻樹數百株あり苑中に二三の茶亭を設け客の休憩に便にす
（是より陸路成田街道に出で總武鐵道に據りて東京に還らんとする者は
途中必ず左の小御門神社に賽すべし）

小御門神社 小御門村大字名古屋に在り、別格官幣社にして藤原師賢
の靈を祭る、社殿は明治十四年の創建にして本社、拜殿は其他の社殿あ
り又小御門神社紀念碑あり、師賢は後醍醐天皇に仕へて盡忠、元弘の亂
帝に代りて叡山に登り僧兵を募りて北條氏を誅せんと欲し事敗れて笠置
山に遁れ終に北條氏の爲めに捕へられて此地に歿す、元は公家塚と稱し
古墳は荒るゝに任せ敢て人の用するなかりしに土地の有志家澤田總平氏
等力を建祠に盡して今日あるを致せり亦是れ聖世の餘澤なり

北越鐵道

爰に北越鐵道といふは日本鐵道會社の大宮高崎間と、官設鐵道の高崎直

江津間を併稱する爲めに設けたる假名なる事は上編十四頁に於て述べたるが如し故に上野停車場を發して大宮、熊谷、高崎諸驛を経て信州に入り上田、長野を過ぎて、越後に入り柏原、高田より直江津に至らんと欲するものは此の線路に依らざる可らず、是より例に依り各停車場より到るべき勝區、古跡の案内を爲す可し

●大宮停車場 (埼玉縣武藏國北足立郡大宮町)

此驛の景況及び名所舊跡等は日本鐵道會社の東北線に於て見るべし

●上尾停車場 (埼玉縣武藏國北足立郡上尾町)

○上尾町 是中仙道の一驛にして東京を距る北方九里廿三町の所に在り、土地左まで繁華ならずと雖も驛の長と尙ほ三町許りあり、人口二千六百十餘、旅店あり割烹店あり、鎮守は淺間社にして近村賀茂村に賀茂の祠あり、旅店は細井岑五郎、増田仙藏等名あり、物産は紅花他に記すべきほどの事なし

●桶川停車場 (埼玉縣武藏國北足立郡桶川町)

○桶川町 是稍や繁華の宿驛なり人口三千百四十餘、驛の長と三町許り淨念寺といふ淨土宗の寺あり旅店は井筒安太郎、栗原權右衛門等

●鴻の巢停車場 (埼玉縣武藏國北足立郡鴻の巢町)

○鴻の巢町 是停車場を降りて右の方三丁許りの所に在り驛の長と凡そ四町、市人は農商相半ばし旅店料理店等ありて繁華の地なり驛内に勝願寺、葛城神社等あり旅店は繪馬屋平五郎、鈴木次郎兵衛等を最とす勝願寺 是淨土宗十八檀林の一寺にして中興は慶長元和の頃、奈良の興福寺の傍に住みたる不殘といふ僧なり、不殘は徳川家康公と親しくせし者にて其什物中に公より贈られし物多かる中に七寶燒の茶碗、盆、皿、古瀬戸の茶碗、大藏一覽集と題する朝鮮板の摺本等今に存せり
箕田八幡社 是鴻の巢停車場より北三十町許り、箕田村に在り此地邊源五綱出生の地なりといふ、八幡社は即ち綱を祭りしものなり、境内

に入り直に左手に箕田之碑あり、其事を記す

●吹上停車場 (埼玉縣武藏國大里郡吹上村)

吹上はむかし間の宿と唱へし所にて驛は至つて淋しく更に見るべきものなし唯名物鮎あぶらのうるかあり

●熊谷停車場 (埼玉縣武藏國大里郡熊谷町)

○熊谷町 は中仙道中屈指の繁昌地なり、東京より十七里四町の所に在り、戸數四千三百餘、人口壹萬二千二百六十餘、浦和裁判支廳、郡役所、警察署、郵便電信局、其他劇場興業物等具はらざるなし驛内に高城の神社、蓮生山熊谷寺等あり、是より西方三里半にして秩父山の麓に畠山といふ所あり畠山重忠の城趾なり、又北方二里半にして永井といふ所あり是は齋藤別當實盛の住みし所なりといふ、此地四方七街道の繼立場なるを以て絹綿などの産物は皆な此に集まる、旅店は清水屋藤左衛門、小松屋新三郎等を以て最とす

蓮生山熊谷寺

は驛の中ほどの右側に在り、熊谷次郎直實の故跡とし

て人の知る所るなり、其の寺は浄土宗にして京都智恩院の末寺たり、本尊阿彌院如來は惠心僧都の作にして多田滿仲の息美丈丸の持念佛なりしが熊谷直實出家して蓮生坊と號するに方り其靈像を勸請して當山を開基し今は坂東阿彌陀佛の其一に算へらる、又蓮生法師の木像あり寺中に安置す其墓は堂後の巽の方森の中に在りて承元元年丁卯九月四日と鐫す、安政元年本堂焼失したるも間もなく再建し其の結構稍や舊觀に復するを得たりと云ふ

鎮守彌左衛門稻荷

は熊谷寺の門を入り右手に在る小祠なり、神体は

弘法大師の作にて眞實尊信淺からず敵陣に斬入る時神跡雄猛なる武者に化身し熊谷彌左衛門と名乗り直實に力を添へ敵に勝利を得しかば居城に宮舎を營み之をあがめ今當山に鎮守し奉るとなり

●深谷停車場

(埼玉縣武藏國榛澤郡深谷町)

○深谷町 是熊谷に次ぎ繁華の市街にして民家軒を並ぶるところ六七町に亘り街道の右側に大木の杉の並木あり北に關東管領山内房顯の城趾あり驛内觀音堂の一木の柳の下に菊圖坊が碑あり下の如く刻つけたり「我佛法に入て風雅をさとり風雅にもとづきて佛法をささる○死ぬ事を知つて死ぬ日やとしのくれ菊圖坊」物産は絹糸、絹織物類なり

岡部六彌太の舊跡 是深谷停車場より北井四五町岡部村の普濟寺に在り此地は往昔岡部六彌太忠澄の領分なりしといふ、普濟寺は禪宗にて榮朝禪師の開山に係る、忠澄の墳墓は堂後に在り又堂内に夫婦の木像を安置す、堂前に一株の梅樹あり之を忠度の梅といふ、宗祇法師行脚の時忠澄の墓に詣て詠める歌あり「なきを問ふ岡部の原の古塚になごりのしるしの松風ぞ吹く」

●本庄停車場 (埼玉縣武藏國兒玉郡本庄町)

○本庄町 是亦た中仙道中屈指の古驛にして戸數千六百五十餘、人

口三千五百七十餘、市人蠶業を勉め其期節に及べば到るところ繁忙を極む、是を以て女子十六七歳に及べば其力に堪ゆべき養蠶の業を親より受取り是を各個の世計と爲し餘裕あれば之を貯へと爲すを以て此地の處女にして多少の貯金あらざるなしといふ驛内に祇園神社あり毎歳六月廿七日を以て大祭を執行す、物産は生絲絹織物とす、旅店は三浦屋十兵衛、諸井幸次郎等名あり其外割烹店貸坐敷等ありて頗る繁昌せり

●新町停車場 (群馬縣上野國綠野郡新町宿)

○新町 是神流川の鐵橋を渡りて着し此驛より群馬縣に入る、綠野郡の東北隅に在り、人口二千五百餘、郡内藤岡町に次ぐの繁昌地なり、此地また蠶業を勉め驛内三越紡績所あり、紡績所は屑繭、屑絲等を製して上糸と爲すところなり、器械最も巧妙なりといふ鎮守金鎖神社は驛内に在り毎歳九月廿九日を以て例祭を行ふ、旅店は埼玉屋金治郎、三ッ俣七郎右衛門等あり、是より倉賀野へ壹里半

陽雲院 是新町停車場より東南半里餘の金久保村に在り、往時満願寺と云ひしを武田晴信の室夫に別れ陽雲院と號して寺中に菴を結ばれし因みにて後年其孫武田信俊庵を修理し陽雲寺と改めしと云、陽雲尼公は轉法輪三條公賴公の御女にて轉法輪三條陽雲院殿と號す、元和四年九月入寂せられしよし境内の碑に載たり

○藤岡町は 新町停車場より西南壹里三丁に在り、町の廣さ東西廿町、南北十五町、十四ヶ町より成る、戸數二千餘、人口七千餘、綠野多胡郡役所、警察署、郵便局等ありて綠野郡中隨一の繁昌地なり、此地また蠶糸、織物等を以て名あり

多胡之碑 是新町停車場より西南二里餘(高崎より二里餘)多胡郡吉井町と鏡川の間おいたに在る池村に在り、和銅中建つる所、字體古刻、日本三碑の一とす(外二碑は下野國造の碑、陸中多賀の碑といふ)又山上の碑、金井澤の碑と此碑を稱して上野の三碑と云ふ共に綠野郡山名村に在り、

山の上の碑は多胡之碑を距る廿五町許り古寺の境内に在り白鳳十年に建しもの、又金井澤の碑は茲より更に十五町ばかりの山中に在り、是は神龜三年に建しものなり、多胡の碑は初め荆棘の中に埋もれしを縣廳にて之を刈のりき塚を清めて大垣を廻らしたれと他の二碑は矢張り雨曝しとなり居れり何れも苔蒸し字面磨滅して讀易からず、上野三碑考に由て視るに多湖之碑は左の如し(碑の高さ四尺二寸五分、横巾上一尺六寸、下二尺之に狀菅笠の如き雨覆あり)

辨官符上野國片岡郡綠野郡甘其郡並三郡内三百戸成給羊成多胡郡和銅四年三月九日甲寅宣左中辨正五位下多治比真人太政官二品穗積親王左大臣正二位石上尊右大臣正二位藤原尊

淨法寺鑛泉 是新町停車場より西四里許り、鬼石町大字淨法寺に在り炭酸冷泉にして其質礫部の鑛泉に同じく泉源數口あり、八鹽、淨法寺、澤之湯と云ふ、八鹽鑛泉は昔しより浴場あり今東京根岸の神泉亭に用ふ

る鑛泉は是れなり、村内に淨法寺といふ古刹あり、天台宗にして聖徳太子の創建に係り本堂、大師堂、戒壇堂、相輪塔等を存す、弘仁年中傳教大師此地に巡錫して堂宇を再建す故に大師を以て中興開山と爲す

鬼石の奇景 是神流川の上流に在り、新町停車場より西北五里餘、淨法寺温泉場を経て鬼石町大字鬼石に達す（新町より鬼石まで人力車賃四十錢）其奇景は鬼石、三塲の近傍神流川の河底に在り奇岩怪石突兀起伏して其の奇怪殆んど名狀す可らず此川平日は水涸れて河底礫となり居るを以て歩いて其の奇景を探るを得べし、上毛地方の文人墨客は夏季杖を曳く者多し又其の石は皆な一種の木理紋ありて庭石などに用ふるに妙なりといふ

●高崎停車場（群馬縣上野國西群馬郡下和田村字赤坂）

○高崎町 是西群馬郡の東南部に位し、新町停車場より六哩四十鎮の所に在り、往時赤坂の庄と云ひし所なり、地勢は高隆にして市街南北一

里、西南に烏川の流れを擁し、四方水田を繞らす氣候は稍や平温にして春秋風多し、眺望は六州の峯巒青然焦眉の間にあつまり、淺間の噴煙霧然として雲嵐の上に棚引を見る、此地上毛に在りては四通八達の地に於て即ち西より東南へ貫きて中仙道、例幣使街道あり、北に三國街道あり東北は前橋へ、西南は富岡へ通じ又西北に草津、信州への通路あり是を以て其繁華前橋に亞げり、市店は軒を連ね、百貨茲に輻湊す宜なる哉戸數五千餘、人口二萬七千三百七十餘あるや、驛の中央に高崎城址あり東京鎮臺歩兵第十五聯隊の兵營を置く、裁判所あり、西群馬片岡郡役所あり、警察署あり、郵便電信局あり、賴政神社は赤坂村に在りて境内廣濶樹木鬱蒼、今は之を公園となせり、旅店は堺屋安五郎、信濃屋金五郎、越後屋權平、榊屋善右衛門等著名なり

高崎城址 是驛の中央に在りて兵營となり居れり、元和田城と稱し和田義盛の八男八郎義國和田合戦の後遁れて上州に來たり後ち茲に居れり

といふ、白川の郷は今の和田山なり和田の城を築きしは應永の頃にして高崎と名けたるは井伊侯より始まる、井伊直政、酒井家次、間部詮房次で之に居り、元祿八年より松平侯の居城となり以て維新に及べり

大信寺 浄土宗知恩寺の末寺なり、三代將軍の弟徳川忠長（駿河大納言といふ）信州諏訪へ配流の途中此の寺に宿し寛永十一年十二月六日二十八歳にして寺中に生害ありしかば今も其墓を存せり

安國寺 は京都知恩院の末寺なり、往昔足利直義六十六ヶ國に寺一字宛を建立し安國寺と號し、塔婆一基を造直して祈願を寄せられし事あり是れ其六十六ヶ寺の一ならんといふ

清水の観音 高崎より西南十五町、觀音山といふ山の顛に大悲閣あり大同三年の創立にして石階數百級を登れば眺望絶なり

佐野船橋の舊跡 は高崎停車場より南十五町許り、倉賀野町との間鳥川の沿岸佐野村に在り、鳥川は源を碓氷嶺の北方鳥石に發し東南に流

れて榛名川、相馬川、碓氷川、蕪川、神流川を合して遂に利根川に入るものなるが昔し佐野村に於て此川を船橋にて渡せし事あり今に其船橋を繋ぎし榎の大樹あり其木影に舟木の觀音の石佛をも存す是に對して彼方の岸邊に大石あるは是も船橋を繋げる石なりと云へり、萬葉集に「あづまの佐野の船橋とりはなしたれやしとくればいもに逢ぬる」とあるは此とこそなり

ガラメキ鑛泉 は高崎停車場より北凡そ二里餘、伊香保に至る柏木道に屬し、西群馬郡西明屋村中野官地の溪畔より湧出す、泉質は鹽類泉にして慢性痲質私、痲痛、腰脚痛、諸神經病、慢性皮膚諸病、諸般慢性潰傷等に効あり之を服すれば慢性胃弱、月經不順、赤白帶下、常習便秘等に効あり、この地海面を抜くと二千四百十尺、地勢は西北に峻峰をひかへ東南は平坦なり氣候は四時寒暖其度に適し殊に山水の風景に富むを以て浴客は夏の日長も捲む事なかるべし

●前橋停車場

(群馬縣上野國東群馬郡上川洲村)

この驛は日本鐵道會社中仙道線路の最終停車場なれど其景況及び近傍名所舊跡等は都合に依り總て兩毛線の部に掲ぐ

●飯塚停車場

(群馬縣上野國西群馬郡飯塚村)

○飯塚 は高崎停車場より僅々三十町許りの所に在り、高崎の町續きに在るを以て信越地方より高崎に來るの旅客は、高崎停車場に降るよりも所ろに依りては寧ろ此處に下る方便利なるべし故に旅客、鐵道荷物等は通例高崎停車場と相伯仲するほどありて其の混雜云ふべからず、是より十五町ばかりにして板鼻驛に達す、此の地は中仙道中の一驛にして人口二千四百八十餘を有し、碓氷郡中安中、松井田等に次ぐの繁昌地なり此地の南の高き山に貫前神社といふあり之を一の宮と云ひ上毛にて著名の神社なり、又近傍八幡村に八幡の祠あり
八幡村八幡宮 は天徳元年の鎮座なり、康平年中源賴義、源義家奥州

○安信貞任、宗任兄弟征伐として下向の途次此の村に一宿し祈願して靈驗あり便はち箭幹を取つて地に挿みければ其幹に根を生じて今に繁茂し之を目白竹といふとかや、八幡宮の祭神は本社中央應神天皇、東神功皇后、西仲哀天皇にて、末社若宮、武内大臣、山王等あり毎年八月十五日例祭を行ふといふ

●安中停車場

(群馬縣上野國碓氷郡安中宿)

○安中町 は碓氷郡の東部に在り稍や盛んなる市街にして驛の長さ十余町、戸數一千八百余、人口六千九百八十余を有し、市中に碓氷郡役所警察署、郵便局等あり碓氷川は市街の南中宿と對する所を横流す、此處にては安中川と云ひ鐵橋を以て流車を通ず又此地は信濃、越後に通ずる咽喉の要衝なれば商業も繁昌し貸坐敷などもありて市中は頗る賑はへり此地また温泉場あり左に其案内を爲す

●碓氷津鐵橋

は安中驛字碓氷津に在り、停車場を距ると僅かに十五町

海面を抜くと六百六十尺、地勢は西北に山を負ひ東北は平坦なり、明治十九年以來開業するものにて其名甚だ高からずと雖も土地高燥にして風涼しく夏時は避暑に適せり、單純泉にして其効能は腺病性諸潰瘍、腺病性慢法諸皮膚病、慢性癩麻質私、疥癬、湯火傷、慢法潰瘍等に宜しといふ、近傍勝地少なからざる中に一二を擧げんに

里見城墟 是安中停車場より東板鼻を経て半里強、碓氷郡下里見村に在り應仁以來里見氏累代の居城たり今は田圃となりて僅かに濠塹の址を止むるのみ

鷹の巢山の城墟 是板鼻町の西に在り南は壁立數千仞の山に據り下に碓氷の激湍あり東北は開豁なり甲斐の信玄の家人依田六郎なる者の居城なりといふ山上に琴平神社あり

○富岡町 是安中の西南二里廿一町、北甘樂郡鑛川の北方に在り、東西十五町、南北七町にして市坊九ヶ町より成る、戸數二千壹百餘、人口

七千六百五十餘、郡中隨一の繁昌地たり、市民蠶業を力め農商相半ばす市中に北甘樂郡役所、警察署、電信局、製糸場等あり、此製糸場は總建坪壹萬五千六百六坪六合、表口百五十八間、裏口百十五間四尺八寸、裏行百十四間、而して男女職工を役する常に六百余名、蒸氣力を用ひて精良の生糸を製す、其盛んなると實に天下第一と稱せらる、此地に遊ぶ者必らず一見すべきなり

●磯部停車場 (群馬縣上野國碓氷郡西上磯部村)

○磯部村 是大字東上磯部村、西上磯部村、下磯部村より成り以前は全村九十戸に過ぎざる寒村なりしも鑛泉場の開けし以來漸々増加して今は二百余戸に及びたり此地曾て水利に乏しきを以て舊領主仙石公大土工を起し人見村字大王寺といふ所より碓氷川を分流し此村に灌漑せり今の鑛泉場の傍らを流る、奔流激湍の一川是なり是に由て嘉永年中村民相謀り公の功績を後世に傳へんとて碑石に刻し稻葉大權現の尊號を贈り春秋

祭典を行ふ其碑は元群馬縣知事佐藤與三氏の別業の前に在りといふ
 磯部鑛泉 は停車場を降りて僅か二町乃至三四町の所に在り、停車場
 近傍には各温泉宿の出張所ありて客の手荷物等は出迎ひの若い者等之を
 携へて我家に導くなど至極便利なり、東京よりは行程三十二里なれど上
 野停車場より僅々四時間にして到着するを思へば憚りに東京近傍の温泉
 場に赴くより手輕なり、汽車は上野を發し高崎に於て車を乗換へ磯部停
 車場に至る、乗車賃は下等七十八錢、中等一圓五十三錢なり、鑛泉の由
 來は詳かならざれども近くは文久二年村人大手萬平(今の鳳來館主人)此
 の鑛泉の諸病に効能あるを知り浴場を設けたり然れども人之を知らざれ
 ば唯だ村人等の來り浴するに過ぎざりき、次で明治六年土地の有志者は
 鑛泉の分析を舊熊谷縣廳に出願し其成績に依り始めて獨逸國のカル、ス
 ハットと泉質相似たるを知れり、明治十七年東京上野鶯谷に温泉の出張
 所を設け次で根津、向島等にも磯部の名を以て鑛泉場を開く者なり爲め

に本元なる磯部鑛泉も漸やく世人の知るところとなり、井上伯其他五六
 の紳士別業を此地に設くるに至つて其名一層高くなれり、然れども土地
 甚だ高燥ならざるに由り之を避暑地としては伊香保、霧積に及ばざるが
 如しと雖も而も割合に濕氣なく、空氣も清涼にして殊に碓氷の流れ清く
 轟々として耳を澄し妙義の翠峯近く聳えて風色を補ふあり夏冬ともに浴
 客絶えずといふ、鑛泉場は市街の中ほとに在りて其取締役事務所を濟生社
 と云ひ又其傍らに温泉場を設け一人前壹錢五厘の湯錢を取りて何人にも
 入浴せしむる事猶東京の洗湯の如し、温泉宿は鳳來館(大手萬平)三景樓
 對岳樓(林益造)山城軒(城田代吉)信泉亭(小島彦總)の五軒にして外に料
 理屋、鰻屋等もあり、浴室は各温泉宿何れも三四ヶ所を備へ且つ多くは
 温冷二槽に區別す、而して鑛泉の湧出する所三ヶ所ありて一荷何ほどと
 價を定め之を各温泉場に賣渡するものなりと云ふ、近年其繁昌は漸く他の
 海水浴場等に移りて大に衰微に傾きしが如しと雖も各温泉宿にして改善